

50th ANNIVERSARY

1975～2024

矢田・庄内川をきれいにする会
川の汚れは心の汚れー50年のあゆみ



矢田・庄内川を
きれいにする会

< 目 次 >

ご挨拶

次代の青少年にきれいな水と暖かい社会

宮田照由・宮田明美・・・1

第50回記念魚釣り大会

●第50回庄内川まつり魚釣り大会	2
●第50回庄内川まつり魚釣り大会参加者からのメッセージ	3
●第50回庄内川まつり魚釣り大会写真	5
●庄内川まつり魚釣り大会年表	6

会員寄稿

●35/50	小野 天下・・・8
●矢田・庄内川をきれいにする会活動の記憶	原 彰・・・9
●矢田・庄内川をきれいにするための環境基準 ～50年経っても矢田・庄内川の魚が食べられない根本的原因～	佐久間 元成・・・22
●庄内川のアユ	間野 静雄・・・34
●庄内川の想い	池田 正明・・・36
●人が減って戻ってきた？生き物たち	河原 進・・・37
●科学研究部を育ててくださりありがとうございました	平川 史子・・・38
●矢田・庄内川をきれいにする会活動50年に寄せて	OB会員 水野 達彦・・・39
●王子製紙春日井工場のパルプ排水・・・	OB会員 本守 真人・・・40
●矢田川のセットバック魚道はよい魚道？	OB会員本守 真人、河原 進・・・44

会員外の方からのご寄稿・祝辞その他

●矢田・庄内川をきれいにする会と国交省の50年の歩み	国土交通省 中部地方整備局 庄内川河川事務所 奥中 智行・・・54
●『川の汚れは心の汚れ』	庄内川河川事務所 坂口賢二・・・55
●一級河川矢田川における魚道整備について	愛知県尾張建設事務所 河川整備課 上原 弘嗣・・・56
●矢田・庄内川をきれいにする会50周年に寄せて	名古屋市 環境局長 小林 靖弘・・・57
●矢田・庄内川をきれいにする会と名城大学付属高等学校の協働について	名城大学付属高等学校 三輪 温子・・・58
●祝辞	経政会会長 木村 学・・・60
●祝辞	経政会 会員各位・・・60
●矢田・庄内川をきれいにする会と名古屋港を考える会	元住民に親しまれる名古屋港を考える会 事務局長 柿内 賢治・・・62
●矢田・庄内川をきれいにする会50周年のお祝いに代えて	NPO 土岐川・庄内川サポートセンター 理事 浅野 和広・・・63
●活動は「明るく、楽しく、美しく、」	NPO 土岐川・庄内川サポートセンター 及川 理・・・64
●志多味ビオトープにおける矢田・庄内川をきれいにする会の功績	土岐川・庄内川流域ネットワーク事務局長 大村 博厚・・・65
●30年来の友人で有る宮田さんへ	河村 亨・・・66

●庄内川での、いつかのお話です。	梶田 光太郎・・・	66
●矢田川と庄内川と 60 年の思い出	柴山 忠光 名古屋市上飯田柴山釣り具店・・・	66
●庄内川まつり魚釣り大会に寄せて	渡辺 文雄・・・	67
●庄内川釣り大会の思い出	川口 久志・・・	67
●庄内川新聞	矢田小学校児童・・・	68
●メッセージ	ソン・コマージュ・・・	70

矢田・庄内川をきれいにする会の活動にご協力いただきました皆様への感謝	71
--	----

(資料)

矢田・庄内川をきれいにする会の表彰および感謝状等受理の記録	72
矢田・庄内川をきれいにする会の活動の記録	73
矢田・庄内川をきれいにする会会則	89
矢田・庄内川をきれいにする会出版物	90

次代の青少年にきれいな水と暖かい社会

宮田照由 宮田明美

私達結婚して 55 年、夫照由は生まれも育ちも矢田川と庄内川に挟まれた守山区川西、妻の私は矢作川の源流の長野県根羽村、とてもきれいな川です。

昭和 40 年代、矢田川・庄内川は真っ白「白い街白い街なごやの街」と歌われていました。空気は汚れ、川も汚れ、これが日本の高度成長期。仕方のないことだと誰もが諦めていた。しかし夫が私の田舎に行った時、澄んだ川を見て昔庄内川で泳いだり魚をとって食べたことを思い出し、前会長の丹羽さんや近所の人達と「自分達の次代に汚したまま次代に残してはだめだ」と話し合い、合わせて毎日新聞の「庄内川シリーズ」にも刺激を受け「矢田・庄内川をきれいにする会」の発足となった。今から 50 年前のことです。当時夫は事務局長でした。

発足当時はあちこちで公害問題が起きてきた私達は「闘争はしない」「運動は明るく楽しく美しく」「次代の青少年にきれいな水と暖かい社会」を残すため市民・行政・企業が三位一体とならなくてはきれいにならないと思い「どうしたら市にこの現状を知ってもらえるのか」「それには川を診てもらうのが一番」「ならば魚釣り大会をしよう」ということになった。この頃の庄内川の水質類型は E ランク（魚の棲めない川）「釣った魚を食べる人はいるのか」「多分喰えんだろう」「ならば『食えない魚釣り大会』をやろう」等々次々と意見が出てきた。

第一回目の釣り大会は興味津々の人々で大混雑、でも魚はいた。奇形もいた。その後天然鮎がいることがわかり「食べられるかもしれない魚釣り大会」と副題を変えながら今も続けている。今年は「50 年たっても食べられない魚釣り大会」第一回目に参加した少年は今や孫やひ孫を連れて参加する。子供のいない私達にはとても嬉しいことだ。

又「川の汚れは心の汚れ」の看板は 100 本以上立てた。100 本目は名古屋市長が立てた。大多数が壊れてしまったが今も立て直している今年は矢田川に 10 本愛知県とともに立て、庄内川にも庄内川河川事務所とともに立てた。

その他の活動の中には守山水処理場周辺にさくらの植樹（経世会と共に）をしたり山岡町のゴルフ場予定地に「けいしょう」の森（景勝、継承、警鐘）の森、釣具商組合の方々と魚の放流、庄内川のボート下り数え上げればきりがなが会の歴史を見ていただければと思う。わたしたちはこの活動を後世に残すために既に 5 冊の本

を出している。「13 のあゆみ」出版時には夫は会長となり 5 つの取組みを発表した。

- ① 名古屋市の一般会計予算の 1 パーセントを堀川をはじめ、河川や池の浄化のために用いる。
 - ② アユの楽園（鮎 100 万匹大作戦）
 - ③ 堀川浄化
 - ④ ホタルの里作り（才井戸流）
 - ⑤ 水のリサイクル
- である。

又庄内川は漁業権を失った一級河川、でも魚は豊富で今では水質類型も C 級になっている。もう一歩で食べられる魚も釣れるかもしれない。活動を始めた頃釣った魚が美味しく食べられるまではと思っていたが夫はもう 77 歳、私も 76 歳となる。

地球温暖化が叫ばれる現在、50 年前から温かな工場排水が流され、温かな排煙は放出され続けたかつての公害は今や温暖化と名を変えた。

私たちは本当に「次代の青少年にきれいな水と暖かい社会」を残すことができるだろうか？地球はどうなっているだろうか？温暖化ではなく、暖かい社会を願う今日この頃.....

第50回庄内川まつり魚釣り大会

2024 年 11 月、季節外れの台風から変化した低気圧が、これまた季節外れの秋雨前線を刺激し記念すべき第 50 回の「庄内川まつり魚釣り大会」の開催が危ぶまれましたが、大雨は前日で止んでくれたため、快晴の下で記念大会を実施することができました。



振り返れば第1回の大会は「食べられない魚釣り大会」で始まり、半世紀経た今年も「50 年経っても食えない魚釣り大会」とは何とも情けない副題ではありましたが、大会の中で行った食味評価（シジミ、アユ、コイ、フナ）ではシジミ以外は「おいしい」という評価が少し見られるようになり「食べられない」「食えない」というよりも「まあまあ食べられるかも」くらいの味、言い換えれば「それなりの水質」になってきたのではないかと、50年にわたる「矢田・庄内川をきれいにする会」の活動の軌跡を踏まえ思うところであります。

さて、当日はスタッフを含め 60 余名の参加を得、魚釣り大会では、市長杯を争うシラハエ（オイカワ）の一般の部では過去何度も一位の榮譽を得られたベテランさんが 15 cm の大物を釣って優勝、庄内川事務所長賞のコイの部では 71 cm を釣りあげられた方が優勝、フナの部でも 40 cm の大物を釣られた方が優勝と、例年の大会よりも大きな魚が検量に持ち込まれていました。もしかすると、前日の大雨による増水と濁りが良い影響をもたらしたのかもしれませんがね。でも、油断は禁物、大会に参加された子供さんには会用意したライフジャケットを着用してもらいました。特別賞はゴクラクハゼ、タモロコを釣った方に進呈しました。



そして、雨の影響がもう一つ、この魚釣り大会は、テントや机・椅子などたくさんの備品を使いますがそういった資機材を満載した軽トラックが河川敷のぬかるみでスタックしてしまうアクシデントもありました。

今回は 50 回記念ということで、TSUCHIYA(株)様のご厚意により、コロナ禍もあって中止していた「アマゴのつかみ取り」も開催することができました。水中ポンプの近くに集まった魚を狙おうとする子供さんがまるで滝行をしているような状態になっていましたが着替えを持参されていたので安心しました。



また、参加者にも食味評価の口直しを兼ねてアマゴの塩焼きを食べていただき、最後には会長夫人によるカレーライスもお腹いっぱいになるまで食べてもらうことができました。参加・ご協力していただいたスタッフの皆さん大変お疲れ様でした。

	おいしい	ふつう	まずい
し じ 汁			
あ ゆ			
こ い			
小 な			

第50回庄内川まつり魚釣り大会参加者からのメッセージ

<矢田・庄内川をきれいにする会 会員>

今回は増水してて、釣れなかったけど、アマゴのつかみどりが楽しかった。



真野 大和

庄内川は最近まで行く機会がありませんでしたが、子供のころは矢田川にはよく行きました。1970年代の前半ごろは粘土色の川のイメージが強く残っています。1980年代前半は川の色は濁りもなくきれいな状態でした。お魚も70年代前半にはほとんど獲れませんでした。いろいろな魚種が獲れる様な状態になりました。近年では外来種の天国になりつつありますが、矢田川や庄内川にはまだまだ貴重な在来生物もあり、見守りたいと思います。

鵜飼 普

庄内川は、小学校の頃泳いだ事あり、時の流れを思い、今日も流れる庄内川です。

谷本 二三雄

50年前には高卒し、国交省に入省と同時に名古屋市内の大学に通学し、社会人として中部地整企画部で河川の総合計画をやり、河川屋としてのスタートをきって水商売の専属として約50年経過し、70歳に到達しました。きれいにする会とは社会経験とほぼ同じお付き合いです。

当時、守山区(矢田川の下流部)に家があったことから庄内川、矢田川が子供の頃より、あそび場として良い環境でした。ただし、谷田川は水に入ると白いあとが残る水質だった。ここから水商売のスタートです。生物・植物・水質と良い経験を得た事に感謝です。特に「きれいにする会」さんには、学校では教えてくれない事を現場で色々学びました。今あるのも「きれいにする会」の活動により、現在の私がつくられたと思います。是非、100年を目指してがんばります。おめでとうございます!!

溝口 敏明

<庄内川まつり参加者>

30年も参加しておりますが、年々気温が上昇していると思います。以前は防寒着を着て参加しておりましたが、今は必要なく暑い位です。これからも変わらず参加したいと思います。

名東区 丹羽

想えば25回以上の参加をさせていただきました。今回も15cmの白ハエを釣り上げることができました。大雨の増水で状態が悪かったので、皆さん苦戦されたようです。

北区 渡辺 文夫

今回は家族3人で参加しました。楽しい時間を過ごしました。これからも活動頑張ってください。

K

今まで釣り大会を開いてくれてありがとうございます。これからもがんばってください。

南

50周年おめでとうございます。川はきれいになっています。鮎が釣れる庄内川になってほしいです。

東区 市江 正邦

少ない参加金でこれだけの釣り大会をひらいてもらい、楽しい会だと思います。

春日井市 匿名

今日は天気も良く、地域の皆さんの笑顔が見られて、とても良い機会でした。今後も美力ながら協力させていただきます。運営、スタッフの皆様、朝早くからの準備おつかれ様でした。

Tsuchiya 石川

前日に雨が降りましたので、釣り大会はあるのかな?と庄内川の水位を調べました。また、今日は香流川～谷田川～庄内川と川沿いを自転車で行って参加しました。天気が良くとても気持ち良かったです。今日は、実際に川に足を運んだことで、身近なところに、これだけの大きな川があることを改めて知った気がしました。もっとたくさんの人が庄内川を楽しんだらよいと思いました。子供を連れてこようと思いましたが、自転車で

は少し遠く、駐車場があるとより多くの人が川に近づけるかな？

名東区 木綿

大人から子供までこれからも自然とふれあえる楽しい川をこれからも守って行ってほしいと思います。

西区 加藤 淳也

初めて釣りをしました。コイが釣れて嬉しかったです。70 cm 一生の思い出に残ると思います。催してくださってありがとうございました。ちなみにですが、私も今年 50 歳になりました♡

西区 久内 めぐみ

天気が心配されたが、秋晴になるふなも釣れていい日です。

春日井市 三田 靖

水の流れが速くてちょっとつりづらかった。

匿名

今日は天気良く釣り日和でしたが、川の水位高く釣り場少なく、シラハエ釣りは苦戦しました。フナ、コイが沢山釣れていました。矢田・庄内川をきれいにする会の皆様、ごくろう様でした。

森橋

激濁りの中 10.3 cm が釣れましたが、15 cm には敵わないです。来年リベンジさせていただきます！！

小柳

おめでとうございます。あと、3 億年か 4 億年続けてください。

匿名

最初はマジこわかったけど、だんだんなれてきて魚をとるのが上手になりました！楽しかったです●ありがとうございます！！

ソフィア

つかみ取りに参加 7 歳の息子が初めてつかみ取りができて、いい経験になったと思います。最近魚釣りが好きなので、今回のつかみ取りで、より好きになったと思います。

匿名

さいしょはきもちわるくてぜんぜんとれなかったけど、どんどんコツをつかめていっぱいとれました。たのしかったです。ありがとうございました。

匿名

今日もポーズ！！（‘Д’）

匿名

子供が小学生のころから参加させていただいてます。今その子は 38 才になりました。我が家の 11 月行事にくわえさせていただいてます。次回からは孫達も参加させていただきます。有難うございます。

尾張旭市 石田 清一

50 周年おめでとうございます。この大会には小さい頃から毎年参加させて頂いております。40 回大会では鮎の部で優勝させて頂き、50 回大会でも入賞できたことは良い思い出です。今後も活動を応援しております。

匿名

さいしょはぬめぬめしててこわかったけど、だんだんなれてきて 1 回とったらとれてきて楽しかったです。このきかく、ありがとうございました。

匿名

本日はありがとうございました。素晴らしい取組だと思います。これからも続けていただけることを願っています。

匿名

ママ友に教えてもらい参加しました。釣り部門では魚はつれませんでした、子どもも楽しんでいました。大きなコイやいろいろな魚が庄内川、谷田川に住んでいると知れてとてもいい機会になりました。ご準備大変だったと思いますが、とても楽しかったです。つかみどりのおみやげもうれしかったです。

匿名

できれば魚の回収をして頂けると助かります。矢田川から運ぶのがつらかったです。

守山区 匿名

イクス作りで大きいので、もう少し魚をふやしても良いと思う。

守山区 匿名

第 50 回庄内川まつり魚釣り大会写真



庄内川まつり魚釣り大会年表

年 月 日	大 会 名	会場
1975年6月29日	第1回 食べられない魚釣り大会	水分橋
9月28日	第2回 食べられない魚 親子釣り大会（*矢田川・香流川合流点）	*合流点
10月26日	第3回 食べられない魚 母子釣り大会 （ここまでプレ魚釣り大会）	松川橋 新川仲橋
1976年5月9日	第1回 庄内川まつり 食べられない魚釣り大会	吉根橋
6月14日	9年ぶり県によって鮎放流	
9月28日	釣りクラブ「山彦会」発足	
10月6日	名古屋女子大 廣教授による庄内川の鮎「天然」と発表	水分橋
10月24日	第2回庄内川まつり 食べられるかもしれない魚釣り大会(魚の試食会)	
1977年1月30日	土岐川支流・肥田川にあまご放流	庄内橋
5月15日	鮎救出作戦	水分橋
10月9日	第3回 庄内川まつり 食べられるかもしれない魚釣り大会	庄内橋
1978年4月11日	鮎救出作戦中止	水分橋
11月18日	第4回 庄内川まつり 食べられるかもしれない魚釣り大会(名古屋市長杯/本山市長)	庄内橋
1979年4月22日	鮎救出作戦	水分橋
11月18日	第5回 庄内川まつり 食べられるかもしれない魚釣り大会	
1980年7月31日	フルーツパーク釣り池開放	水分橋
11月16日	第6回 庄内川まつり いつかは食べられる魚釣り大会	水分橋
1981年11月15日	第7回 庄内川まつり 鮎かえれ庄内川魚釣り大会	枇杷島橋
1982年4月25日	住民に親しまれる名古屋港を考える会（名港を考える会）釣り大会	水分橋
11月21日	第8回 庄内川まつり 鮎かえれ庄内川魚釣り大会（魚沼指導・名古屋市長杯/西尾市長）	水分橋
1983年11月6日	第9回 庄内川まつり 鮎かえれ庄内川魚釣り大会	水分橋
1984年10月28日	第10回 庄内川まつり 鮎かえれ庄内川魚釣り大会	水分橋
1985年10月27日	第11回 庄内川まつり 鮎かえれ庄内川魚釣り大会	水分橋
1986年10月26日	第12回 庄内川まつり 鮎のすむ庄内川魚釣り大会	水分橋
1987年11月8日	第13回 庄内川まつり 鮎のすむ庄内川魚釣り大会	水分橋
1988年10月30日	第14回 庄内川まつり 新しい川づくりをめざす庄内川魚釣り大会	水分橋
1989年11月5日	第15回 庄内川まつり 新しい川づくりをめざす庄内川魚釣り大会	水分橋
1990年10月28日	第16回 庄内川まつり 鮎が泳いでいる庄内川魚釣り大会	水分橋
1991年11月3日	第17回 庄内川まつり 鮎が泳いでいる庄内川魚釣り大会	水分橋
1992年11月1日	第18回 庄内川まつり よみがえれ庄内川魚釣り大会	水分橋
1993年11月7日	第19回 庄内川まつり よみがえれ庄内川魚釣り大会	水分橋
1994年11月13日	第20回 庄内川まつり 20周年庄内川魚釣り大会	水分橋
1995年10月29日	第21回 庄内川まつり 20周年庄内川魚釣り大会(ニジマス)	水分橋
1996年11月10日	第22回 庄内川まつり 水質基準ランクアップ記念魚釣り大会	水分橋
1997年11月2日	第23回 庄内川まつり もっときれいな川づくりをめざす庄内川魚釣り大会	水分橋
1998年11月8日	第24回 庄内川まつり もっときれいな川づくりをめざす庄内川魚釣り大会	水分橋
1999年11月7日	第25回 庄内川まつり 25周年記念庄内川魚釣り大会	水分橋
2000年11月5日	第26回 庄内川まつり 天然鮎が遡上できる庄内川魚釣り大会	水分橋
2001年11月4日	第27回 庄内川まつり 天然鮎とアユカケが泳ぐ庄内川魚釣り大会	水分橋
2002年11月10日	第28回 庄内川まつり 天然鮎とサツキマスが泳ぐ庄内川魚釣り大会	水分橋
2003年11月7日	第29回 庄内川まつり 天然鮎とアユカケが泳ぐ庄内川魚釣り大会	水分橋

2004年11月6日	第30回 庄内川まつり	30周年を記念して大イベント庄内川魚釣り大会	水分橋
2005年11月7日	第31回 庄内川まつり	天然鮎とサツキマスが泳ぐ庄内川魚釣り大会	水分橋
2006年11月5日	第32回 庄内川まつり	天然鮎とサツキマスが泳ぐ庄内川魚釣り大会	水分橋
2007年11月4日	第33回 庄内川まつり	水質ワースト1返上！ 庄内川魚釣り大会	水分橋
2008年11月2日	第34回 庄内川まつり	生物多様性を重視！ 庄内川魚釣り大会	水分橋
2009年5月2日	庄内川・矢田川鮎遡上調査（5月3日、20日、21日）		水分橋
6月30日	第11回日本水大賞	環境大臣賞受賞	水分橋
11月1日	第35回 庄内川まつり	庄内川水系にアユ遡上100万匹大作戦庄内川魚釣り大会	水分橋
2010年11月7日	第36回 庄内川まつり	外来魚を駆除しよう庄内川魚釣り大会	水分橋
2011年11月6日	第37回 庄内川まつり	外来魚を駆除しよう庄内川魚釣り大会	水分橋
2012年11月4日	第38回 庄内川まつり	アユが遡上できる魚道をつくろう庄内川魚釣り大会	水分橋
2013年11月3日	第39回 庄内川まつり	庄内川全国一級河川水質ワースト10からの脱却を釣り大会	水分橋
2014年11月2日	第40回 庄内川まつり	庄内川の汚染源に抗議する魚釣り大会	水分橋
2015年11月1日	第41回 庄内川まつり	まだまだ食べられない 魚釣り大会	水分橋
2016年11月6日	第42回 庄内川まつり	どうして、まだ食べられないの？魚釣り大会	水分橋
2017年11月5日	第43回 庄内川まつり	捕った魚を食べてみよう魚釣り大会	水分橋
2018年11月4日	第44回 庄内川まつり	もうじき食べられるようになるかも魚釣り大会	水分橋
2019年11月3日	第45回 庄内川まつり	令和になっても食べられない 魚釣り大会	水分橋
2020年11月1日	第46回 庄内川まつり	「庄内川の語り部」発行記念魚釣り大会	水分橋
2021年11月7日	第47回 庄内川まつり	泳ぐ庄内川を目指そう魚釣り大会	水分橋
2022年11月6日	第48回 庄内川まつり	食べられる魚を釣りたい会	水分橋
2023年11月5日	第49回 庄内川まつり	釣ってみよう、食べてみよう魚釣り大会	水分橋
2024年11月3日	第50回 庄内川まつり	50年経っても食べない 魚釣り大会	水分橋

はじめに

矢田・庄内川が汚されたからこの会が出来た。元のようにきれいにしようといろんな活動を続けて50年の歴史を迎えたが元には戻っていない。地球上のいたるところでこのようなことが繰り返され続けている。私たち人間は地球に生きている生き物の一員だ。自然の恩恵を受けて生きているのに自らそれを壊し続けている。この会の50回続けてきた魚釣り大会の副題がそれを如実に語っている。自然を大切にすることをみんなが共有して生きていく社会を作りましょう。私は入会して35年になりますが、経験したことやこれからのおもいをのべたいと思います。

会への入会 そして

1989年(平成元年)名古屋世界デザイン博覧会が開催され、社員全員で出展参加することになった。「街並み」、「水辺」、「子供の遊び」の3つテーマでパネル展示をした。開催終了後も活動を続けようということになり、「水辺」チームが、その当時川のボランティアとして唯一の「矢田・庄内川をきれいにする会」とつながった。2回目の愛知国民体育大会1994年(平成6年)の年に庄内川河川事務所が庄内川のヘドロ(主に陶土)をしゅんせつした。有効利用しようと名古屋城の金のしゃちほこの形の鈴を作ったら採用された(WC会との共作)。1997年から新前田橋右岸に庄内川河川事務所とビオトープを作り、四季4回大潮の日に関中調査をする。順調に行っていたが2000年(平成12年)9月11、12日の東海豪雨で大きな被害を受ける。自然の成り行きとはいえ多少は庄内川河川事務所の人達と手直しの汗をかいた。2002年宮田会長が脳梗塞で倒れる。間瀬川の高木さんに代わりに会いに行きたくて急遽間瀬川に行くことになった。高木さん曰く、昭和50年ころは間瀬川に1メートル近い大イワナ(体重8.8kg)など38種類の魚類に恵まれていたが年々ヘドロ、砂、砂利がたまり溪流魚は10種を数える。”人は環境の乳を飲んで育つ”と言うが人の力で亡びたものは、人の力で最上と考えて、皆

で微力を尽くそうではないか、48歳の時の私の勇姿も23年立って今は……。ほうばずしをいただき間瀬川の河原で食べた味は格別だった。

名古屋に住んでいる中国人から、中国の瀋陽で河川敷の公園を作る仕事があるがやらないかという。瀋陽市の中心を流れる渾河の右岸(瀋陽市の旧市街地側)長さ5km、幅400mの河川敷の公園を作る仕事だ。造園が専門でこの会に入って水や河川のことをかじっていたこともあって国際コンペで弊社に決まった。既設のコンクリート護岸を撤去して自然護岸にする。いであ株式会社に協力頂いて1か月で図面を完成させる。冬はマイナス10℃になるので工期は4月から着工して10月までに完成しなければならない半年の後期だ。毎日5,000人が作業する。そのうちに市長が6月末に視察に来ることになったら、それまでに完成させよという、工期が半分になった。5,000人に加えて刑務所から服役中の囚人を警察と公安が連れてきてどうにか完成できた。完成後当時庄内川河川事務所副所長尾中宗久氏を団長にして脳梗塞の入院から退院してきたばかりの宮田会長初めお世話になった方々約30名で北京を経由して瀋陽市の現場を見に行った。瀋陽市副市長が応対された。この会に入会され活躍された原彰氏は延岡高校の先輩、もう一人先輩で川の件でお世話になった方を紹介します。甲斐一政氏で元愛知県副知事です。中日新聞の論説委員をされていた時、庄内川のことを書いてくださいとお願いし、庄内川の資料を段ボール1箱届けましたところ書いてもらえました。「時代を読む 甦るか庄内川」(2003年12月28日)その時こうも言われました。「川をきれいにするなら環境活動として市民の賛同者を増やすことだと」色々活動してきてそう思う。



記事のQR

矢田・庄内川をきれいにする会活動の記憶

原 彰

はじめに

矢田・庄内川をきれいにする会が 50 年の歴史を迎えた。河川の浄化を願うボランティア活動であるが、50 年も歴史を刻んできたことは素晴らしいと思うだけではなく、驚異である。私の会員としての活動は 16 年しかなく、積極的に活動した期間は僅か 8 年であるが、矢田・庄内川をきれいにする会会員として多くの思い出はある。

ここでは 2008 年から 2016 年までの広報部長の在任期間中の、印象に残る活動をピックアップして、矢田・庄内川をきれいにする会の活動の一端を紹介しておきたい。

1. 矢田・庄内川をきれいにする会への入会と環境大臣表彰

2008 年 3 月に大学を退職した次の日に、名古屋市守山区に終の棲家を求め、引っ越しをした。その片付けが終わらないうちに、私は矢田・庄内川をきれいにする会に入会した。その会は高校の後輩 小野天下氏が事務局長をつとめていた関係からである。

庄内川は数十年にわたり、王子製紙が廃水を流しており、川としての正常な機能が失われた川である。庄内川に流れ込む八田川に王子製紙の廃水口があり、ヘドロが溜まっている。宮田会長の依頼で、名城大学在職中にそのヘドロを調べたこともある。

入会後私は、宮田会長に、会則を変更して役職に広報部長を加えることを提案し、承認された後、自ら広報部長に就任した。私が最初に取りかかったのは、会の活動をまとめて「日本水大賞」に申請することだった。2008 年 11 月に会の活動を「庄内川・矢田川流域の河川浄化・環境整備活動」としてまとめ、3 ページの応募書類を作成したが、内容は会長から渡された資料から得たものである。ほとんど活動実績のない私が書いた申請書であるが、まさか環境大臣賞をもらえるとは予想していなかった。環境大臣賞をもらって、改めて矢田・庄内川をきれいにする会の活動が如何に価値あるものであったかを認識した次第である。環境大臣賞を得て提出した活動報告書および庄内川祭り 第 35 回魚釣り大会については、「矢田・庄内川をきれいにする会活動 35 周年

～日本水大賞 環境大臣賞受賞記念～誌」に掲載している。

2. アユ遡上調査

矢田・庄内川の会則改正から最初の春の活動はアユの遡上調査だった。私にとっても川の中の初めての活動だったので、大変印象に残っている。2009 年 6 月の会報を引用する。

会報第 4 号でお知らせしましたように、5 月 2 日、3 日、アユの遡上調査を実施しました。小田井床止堰では、左岸（矢田川寄り）において、午前 10 時から午後 6 時頃までに、220 匹、右岸（庄内川寄り）において 292 匹が確認されました。また、庄内川山西用水堰下で投網により 71 匹を捕獲しました。アユはこの堰を上ることができませんでした。

なお、一晩明けた翌朝は、小田井床止め堰左岸においては 11 匹、9 時から午後 1 時 30 分までに 293 匹、4 時 45 分までに 20 匹を数えました。右岸では一晩明け後、および午後 4 時 55 分までに 1 匹も確認されませんでした。

調査は魚道に上がるアユをほぼ完全にトラップしています。この結果、アユは午前中に遡上数が多く、また、右岸の 2 日、3 日で確認されたように、遡上数には大きな変化があることが分かりました。

この年、アユの遡上調査は 7 月 19 日、20 日も実施しましたが、2009 年 11 月 1 日、庄内川祭り 第 35 回記念魚釣り大会において、会は「庄内川水系にアユ遡上 100 万匹大作戦」の開始宣言をし、庄内川に 100 万匹のアユの遡上を目指すという目標に向かって活動を明確にしました。

アユの遡上調査は初めてだったが、遡上アユが大量に観察されることが毎年当たり前と思ってしまった。その後の継続の調査でアユの遡上数は年により大きく異なることがわかった。10 倍も差があることもあるようだ。



3. アユの産卵場づくりに重機を入れる

庄内川へのアユの遡上数を増やすには産卵場を充実させる必要があり、重機を入れて産卵場の造成を実施した

2010年7月19日に、アユ研究の第一人者高橋さんを招き、庄内川のアユの生息環境の調査をお願いし、産卵に適した場所についてもアドバイスを得た。それを受けて庄内川に重機を入れて、産卵場を作った。以下は10月26日の広報第7号の記録である。重機を入れた産卵場づくりは2011年10月2日にも、水分橋下流でも実施したが残念ながら台風により河川が荒らされ、ショベルカーは空しく砂をかき混ぜるだけに終わった。この巨大な重機は平田工業さんの無償提供だった。

10月24日、「庄内川水系にアユ遡上100万匹大作戦」に新しい1ページが記録されました。予告していましたように、ショベルカーを動員してアユ産卵場の造成を実施しました。場所は松川橋と庄内川大橋の間です。当日は曇り空でしたが、巨大なショベルカーが威風堂々、川の中に入ったときには感激しました。

アユはぜいたくな魚なので、産卵場も選びます。

大きさ1～10センチの石の隙間に卵をうみつけます。ショベルカーの役割は、固まった（アーマー化した）底面を掘りおこし、砂と泥をかき出して小石の間に隙間を作ることです。

川の中央に10メートル範囲に涉ってショベルカーが動きましたが、その間わずかに20分ちょっと。予想したよりもはるかに速い時間で終わりました。その跡を人力で平にならしていきます。この作業が重要で、アユは起伏の多いでこぼこを嫌うそうです。

合計で3ヶ所、300㎡の面積の産卵場を造成しました。



庄内川へ重機

水温は20度を切る程度でしたので、ちょうどアユが下降し始める頃ですが、今年はアユ遡上調査でもアユが少なかったのも、あまり大きな期待はできません。しかし、アユの産卵場の整備の仕方が分かっただけでも、大きな収穫と言えるでしょう。

来週の日曜日はもう一つ新しい試みを行います。矢田川での降下アユ調査として作ったヤナ（3m×4m）を仕掛けます。興味のある方は三階橋の下流に12時頃お出で下さい。

4. 第4回いい川・いい川づくりワークショップで準グランプリ

2011年9月24日・25日、国立オリンピック記念青少年総合センターにおける第4回いい川・いい川づくりワークショップに参加した。参加団体は河川で活動している37団体だった。このワークショップは、いい川いい川づくり実行委員会主催で国交省が後援となっているが、「みんなで考える“いい川”“いい川づくり”公開選考会」の副題のとおり、大変厳しい選考会だった。



選考一日目、先ず全体発表会で 37 団体が 3 分間の発表、続いて A~G のグループに分かれ、一次選考が行われたが、矢田・庄内川をきれいにする会は E グループの 5 団体に属した。この 5 団体から 2 団体が次の選考に進むが、当会は何と、この一次選考で落選したのである。これはやむを得ないとも言える。活動団体は高校生や子どもも参加しているので、彼らの素直さには勝てないということだと思われる。

大丈夫、大会は 2 日間で行われ、2 日目は敗者復活戦が行われたのである。敗者復活選では、パネルセッション形式で、13 名のコーディネーター、コメンテーターの投票で数団体が選出され、矢田・庄内川をきれいにする会はその一つに選ばれた。二次選考は一次選考で選出された 14 団体と復活で残った団体が発表を行い、コメンテーターによる投票、会場の拍手等を加え、10 団体が最終の公開討論会へ進んだ。

公開討論会ではコーディネーターやコメンテーターによる総括討論、コーディネーターはコメンテーターらによる投票や会場からの意見を聴取し、最終的に表彰者を決定することになったが、グランプリは大阪府の「芥川・ひとと魚にやさしい川づくりネットワーク」で、矢田・庄内川をきれいにする会は準グランプリ 3 団体の一つに選出された。グランプリの芥川・ひとと魚にやさしい川づくりネットワークは一回戦で同じ E グループで一緒だった団体である。

この 2 日間に渡ったワークショップには宮田会長と参加したが、大変充実した面白く、印象に残る選考会だった。



宮田会長と活動 37 年を表示



準グランプリの表彰式 宮田会長と私

5. 身近な水辺再生と川の健康診断・矢田川にやなを架ける

2011 年 10 月 30 日に、前年に続き、2 回目のアユ築設置を行った。築を架ける活動は、当然のことながら河川事務所に伺いを立てたが、河川事務所長は「矢田川はそのようなものを設置するような川ではない」と婉曲に反対されたが、押し切って実施した。矢田川はほとんどくるぶし以下の深さだが、築を架けた場所は大人の胸の高さ位の深さがあった。作業は豊造園の社員の手で行われた。ブログで公開した文は以下のとおりである。

あいち森と緑づくり環境活動・学習推進事業として、第 5 回 矢田川に親しもう 身近な水辺再生と川の健康診断・アユヤナ体験事業を実施しました。実施の企画・運営は NPO 土岐川・庄内川サポートセンターですが、実施に当たってサポートセンターの一員である矢田・庄内川をきれいにする会に支援を受けました。事業内容は以下のとおりです。なお、この活動のアユヤナ部分は本事業の一部です。

(1) 天神橋下流での活動

○集合及び参加者

10月30日(日)、9時30分に天神橋下流で受付を開始し、最終的な参加者は64名、そのうち14名が小学生以下でした。また、参加者は(株)リコージャパン社、経政会、港栄第一エコクラブ、愛知県環境部、豊造園、名城大学学生、土岐川・庄内川流域ネットワーク、チラシを見て参加された方、矢田・庄内川をきれいにする会会員等と多彩でした。

○事業の説明

天神橋では9時30分受付でしたが、早い会員は9時には現地に着。9時30分には必要な資材・材料が到着し、受付の準備が整いました。事業の説明は10時からとしていましたが、時間通り開始することが出来ました。まず、矢田・庄内川をきれいにする会広報部長(私)が本事業はあいち森と緑づくり環境活動・学習推進事業であること、また(株)リコージャパン社のグリーンプロモーション事業として認定を受けていること、河川環境管理財団の助成を受けた事業であることを説明しました。続いて、愛知県環境部水地盤環境課からあいち森と緑づくりについての趣旨説明を受け、(株)リコージャパン社からご挨拶をいただきました。この時点での参加者は42名でした。

当日はA4の3枚の資料と、昨年矢田・庄内川をきれいにする会が作成した、矢田川環境マップ、当年作成の庄内川環境マップ1を配布し、それをもとに事業のスケジュールおよび注意事項の説明を行いました。

○水質検査

水質検査は資料に基づき、pH、COD および透視度について説明し、予め準備していた①大森橋下の水、②香流川の矢田川に流れ込む直前の水と③天神橋下流の水の3種類について、3班に分かれて水質調査を実施しました。pHおよびCODはパックテストで実施し、その数値を準備したパネルにワッポンで表示させました。結果は昼食後の交流会で発表しました。

○ガサガサ

次いでガサガサの実施方法について矢田・庄内川をきれいにする会会員が説明、それぞれタモ網とバケツをもって川の中に入りました。午後には雨が降ることが確実視されていたため、ガサガサの時間は約20分程度で川から上がってもらいました。捕獲された生き物については矢田・庄内川をきれいにする

会会員から説明がありましたが、クロメダカが貴重であること、それに対する外来種はカダヤシであること、ドジョウ、シラハエ、カマツカ、テナガエビなど1匹ずつ特徴が説明されましたが、何と言っても体長21センチのアユが見つかったことでしょう。婚姻色が強く出てかなり黒く、新鮮に見えたので死亡した直後と思われますが、産卵に立ち会うことが出来たのでしょうか?一昨年に天神川下流で矢田・庄内川をきれいにする会会員がアユの産卵を観察していますので、恐らく同じ場所で産卵が行われたと考えてもいいでしょう。

(2) 天神橋から三階橋へ清掃活動

清掃作業はガサガサの場所から三階橋まで歩く途中に実施してもらいました。準備したのは手袋、ゴミ袋、ゴミばさみですが、これを抱えて約1キロ先の三階橋を目指しました。参加者には出来るだけ、車を使わずに歩いてくださいとのお願いに快く従ってもらいました。2日前に庄内川河川を歩いた時には台風の影響が色濃く残っていたのですが、矢田川ではそれほど木切れなどのゴミはなく、僅かに橋の欄干部分に木切れやゴミがまとわりついているのがありました。集めていただいたのはペットボトルなどの分解しにくいゴミ類でした。なお、矢田・庄内川をきれいにする会会員4名が川の中を歩き、魚(アユ)の追い込みを試みました。

(3) 三階橋での活動

○アユヤナ体験

午前7時過ぎに三階橋においてアユヤナの設置を行いました。アユヤナは三階橋下流の段差のある堰を利用して作製しました。まず、鉄骨で枠組みを作製し、それに縦半分に切断した竹をすのこ状に並べ、固定し、それにクレーンを使って段差部分に隙間のないように接触させました。ヤナの設置は9時前に終了しました。

ほぼ、スケジュールどおりに三階橋下流のヤナ場に到着した参加者はアユヤナの素晴らしい出来栄に感心していましたが、残念ながら肝心のアユは姿を見せませんでした。アユの追い込みも不発に終わったようです。そこで、投網を使って擬似アユのシラハエの捕獲を試みました。シラハエは小型ですが一網に数匹は必ず入っており、容易に集めることができました。小学生たちにバケツに入れたシラハエを上から流し、ヤナに落ちてきたシラハエを集めてもらいましたが、子供たちは大いに盛り上がりましたが、それもちっという間に終わってしまいました。

今年の秋に矢作川上流のヤナ場にアユを食べに行きましたが、そこでも「〇〇さん、今からアユを流しますので準備をしてください」とのアナウンスでアユヤナ場でも同じようなことを行っていたので、笑ってしまいました。その後、投網の実演も実施しました。

○食事と交流会

アユヤナを終わるころには雨が降りはじめ、気温も低かったのですが、そこへカレーうどんを提供しました。60名を超える人数でしたので、行列が出来ましたが、アツアツのカレーうどんは大好評でした。最大でも60名の参加者と予測していましたが、麺は60名分でもカレーは100名分相当を準備しましたので、お代りをする方もいました、

最後に雨の降る中を矢田・庄内川をきれいにする会の活動紹介を実施し、水質検査結果の発表を行いました。pHは大森橋下が7.0、香流川が7.5、天神川下流が7.5～8.0の結果でした。また、CODは大森橋下が1.5、香流川が5.0、天神橋下流が5.0～12.5mg/Lでした。天神橋下流のデータがぶれているのは小学生が多かったからでしょう。

最後にアンケートの提出をお願いしました。交流の時間をもう少しとりたかったのですが、雨が強くなってきましたので、早めに終了宣言をしなければなりません。これで最後ではありません。車を天神橋下流に置いた参加は戻らなければなりません。また、ヤナの撤去は3時30分までかかりました。



(上:アユ築で魚の手づかみ 下;活動が終わって)

6. 庄内川川会議 (第1回 平成24年10月21日)

川会議は前年に「矢作川川会議」に参加した際に、庄内川水系での必要性を認め、実施を決めた。「庄内川の再生」を目的として、庄内川水系で活動する団体に呼びかけた。午前中はリバーピアとして朝市が開かれ、農産物が安く出販売されているので、午後開催した。川会議は1回から5回までは私が世話をし、6回まで開催されたが、残念ながら中止となった。なお、庄内川水系の川会議なので、矢田・庄内川をきれいにする会が加盟している土岐川・庄内川流域ネットワーク主催としてもらった。第1回会議の結果は以下の通りである。

日時: 10月21日(日) 午後2時～

場所: 水とぴあ(水防センター)会議室

司会 村上 誠治氏

1. 川会議開催宣言

2. 来賓あいさつ

清須市長 加藤 静治氏

庄内川河川事務所長 宮本 健也氏

3. 基調講演

矢作川漁業協同組合 前組合長・顧問

新見 幾男氏

「庄内川と矢作川はどこが違うか？」

ー農業・発電団体と一緒にー

4. 一般講演

○愛知の川から庄内川を見ると

愛知川の会 本守眞人氏

○水源の森の健康診断から

中部大学応用生物学部 上野 薫氏

○庄内川水系にアユ遡上100万匹大作戦

矢田・庄内川をきれいにする会 原 彰氏

○藤前干潟クリーン大作戦

藤前干潟クリーン大作戦実行委員会

鈴木康平氏

○朝市から

NPO 矢田・庄内川サポートセンター

寺本忠司氏

5. 活動アピール (1団体)

6. 庄内川水系川会議宣言

7. 交流会

庄内川水系の再生を目標とし、水源の森から河口域(藤前干潟)までの流域の環境保全、住民に親しまれる水辺環境創生、流域圏の経済活動の支援、河

川行政への提言を行う。前号でお知らせしましたように、10月21日(日)、清須市水とぴあ(水防センター)において庄内川川会議が開催されました。当日午前中はリバーピアのお祭りで恒例の朝市に加えて多くのイベントが盛りだくさんに行われ、たくさんの方の家族連れでにぎわいました。当会も投網やガサガサ指導の役割を担いました。

午後2時には準備をした60の座席が埋まり、2時きっかりに川会議宣言がなされ、来賓の清須市市長 加藤静治氏、庄内川河川事務所長 宮本健也氏にご挨拶をいただきました。続いて矢作川漁業協同組合前組合長・顧問の新見幾男氏により、基調講演がなされました。演題は「矢作川と庄内川はどこが違うか」でしたが、庄内川での私たちの活動によって大変参考になる内容でした。レジュメのカッコ書きに「矢作川は「・良く利用され、なお美しい矢作川」をめざしてきた。・農業用水団体および水力発電会社とともにあった。・矢作川「経済3団体」による現場決着主義路線を歩んできた。」とありますが、水利用という観点からは本来なら敵対関係にある、漁業者、農業団体、水力発電会社と厳しい駆け引きを繰り返して、共存・共栄の道を模索し、水利用の難題を解決に導いていった過程は、大変説得力のある話でした。また、新たなダム建設を阻止し、矢作川河口堰建設反対運動を展開し建設中止に追い込み、中部電力との「河川維持流量」の改定にあたって自主決着をはかったことなど、40分という時間制限の超過を忘れさせる熱い語りは、分かりやすく、感動的でした。じっくりと時間をとってもう一度聞かせていただきたいというのが率直な感想です。私どもの活動の甘さを認識させられました。



新見 幾男氏



原 彰氏

その後の一般講演の5題はそれぞれ時間超過する熱のこもった内容であり、3分回スピーチも6団体によりなされました。私は講演の最後に「愛知万博やCOP10を誘致し、開催した愛知県・名古屋市は環境イベント先進都市であるが、庄内川を全国一級河川水質ワースト10として数10年放置し、法律違反の堰を野放しにしている環境政策後進都市でもある。」と皮肉をいわせていただきました。

最後に庄内川川宣言が提案され、満場一致で承認されました。会の終了後はトン汁をすすりながらの交流が行われました。今回の川会議は国土交通省、愛知県、名古屋市、清須市などの職員の参加もあり、第1回の開催が成功裏に終わることができましたことを参加された方々、協力していただいた方々に厚くお礼申し上げます。

なお、庄内川川宣言文は以下の通りです。

庄内川川会議宣言

<庄内川水系2020年の目標>

- 目標1：庄内川の魚や貝がおいしく食べられる水質とする。
- 目標2：アユ、ウナギ、サツキマスなどが海と川を自由に行き来できる。
- 目標3：水系のすべてで子供たちが安心して遊び、泳ぐことができる。
- 目標4：水系の水辺や川の中のゴミを今よりも明らかに少なくする。
- 目標5：水とぴあの朝市を拡大し、道の駅として支援する。
- 目標6：伊勢湾・三河湾の再生ネットワーク活動と連帯する。

庄内川川会議は毎年開催され、第6回まで開かれた後、終了した。

7. 庄内川川下り（2013年6月9日、7月14日、7月28日）

川下りは私の希望でもあった。そのため、川下りに必要な竹は志段味ビオトープの竹林整備の時に一人でせっせと竹を切り出した。炎天下の中の作業が体調不良を引き起こし、いかだ下りの本番ではゴムボートに乗ったが最悪の体調で何度も川に飛び込もうかとおもったほどだった。しかし、面白かった。以下は主に平成25年度あいち森と緑環境活動・学習推進事業報告書の引用である。

（1）事前調査を実施

今日は庄内川竹筏下りの事前調査を兼ねてのゴムボート下りに挑戦しました。参加者は7名、そのうち2名が車での後方支援に回りました。ゴムボートに空気を入れるのがネックと思っていましたが、気のきく会員が車のバッテリーに接続できる空気入れを持参してきたので、難なく空気を入れることができました。出発地点の確認の後、戻ってきたら空気が漏れているということでしたので、点検したところ、空気を入れる部分で漏れているのではないかとということで、ねじ状部分を締めればうまくいくと安堵したのもつかの間、やはり空気漏れは直らず、手動の空気入れを持参することになりました。ボートの住人にとってみれば生命維持装置を動かしながら移動するということを意味します。

9時45分に進水し、水深はやや浅いものの順調に滑り出し、暫くして浅瀬に遭遇したので、全員降りて移動したのち、再度乗船。さらに進んでいくと、川幅 2/3 ほどを占めるコンクリートの残骸にぶつかり、右岸へよけて進行。（過去にここに橋があったのだろうか？帰宅して確認しましたが兩岸に道路があったとは思えない場所であり、何の残骸かは不明です）左岸にアサヒビールの工場横を通過、再度浅瀬を歩いて、中央線鉄橋の床止を通過しました。ここは予め、当会の有能な会員がどこを通過すれば良いかの下見をしてくれていましたので難なく通過。この鉄橋下までで所要時間、43分。

鉄橋を通過した後次の浅瀬に達したところで、ボートを降りようとしたが、年齢相応の体と若いと思っている心との乖離により、あえなく川の中へ撃沈する羽目に。かくして、ほとんどびしょぬれとなり

ましたが、温かい気温に救われ、寒くなかったのは幸いでした。



しかし、カメラも水につかり、スイッチを入れるとほとんど画面にスモークがかかり、やがて白くなり、消えてしまいました。これまで記録してきた映像は全て駄目になった恐れもあります。

再乗船してからは流れがゆるやかになり、浅瀬がなく、国道 19 号線にかかる勝川橋を通過したのが 10 時 38 分。川の流れはほとんどないように見えボートの漕ぎ手の力に託された単調な移動となりました。ゴール近くになり、予め下見をした会員は右岸への接岸を考えていましたが、後方支援部隊は左岸に陣取り、左岸への接岸を強く要求。止むなく、進路を左岸側に。到着してみるとどうにか川岸に上陸できる場所（堀川への導水路になっている中州の始まり部分近く）へ接岸。時計は 11 時 1 分を示していました。所要時間は 1 時間 16 分です。

上陸したところは水分橋から約 300m 地点で、ブルーシートを広げるのに十分な面積があり、本番の集合地点としてスペースが取れる場所であることを確認。ここでは会長夫人が山菜の天ぷら（コシアブラ、タラノ芽、コゴミ、ゼンマイ、ニセアカシア、タケノコ）、イタドリ酢漬けに蜂の子の入った炊き込みご飯を準備してくれており、五月晴れの清々しい中での至福の昼食、これこそ贅沢と表現すべきものです。この年齢になって 1 時間を超える川下りが出

来るとは、参加者の皆さんに感謝。

この事前調査により、本番前に竹筏を作製し安全性を確かめる必要性が提案され、6月9日、才井戸流ホタル観賞会の前に実施することになった。また、浅瀬を歩かねばならないことや安全性から大きな筏よりは小さめの筏を数台作製することが良いだろうという結論に達しました。皆さんにご心配(?)をお掛けしたかもしれないカメラは帰宅後電池やSDを外へだしておいたところ、数時間して無事に復帰。写真も大丈夫だったことを申し添えます。竹筏下りの本番は改めて報告します。

(2) 庄内川川下り筏試作

6月9日、7月28日の庄内川竹筏下りに向けて、筏の試作を行いました。集合場所は竹を使用するために、上志段味の志段味ビオトープです。ここでは毎月2回、矢田・庄内川をきれいにする会も参加する庄内川流域ネットワークが竹林整備を行っています。材料である竹は、竹林整備中に数回にわたって大きめの竹を3.5mサイズでせつせと集めてきました。その数、60本程度ですが、なんと当日その竹を使用できないという駄目出しがなされたのです。大き過ぎて重すぎるという理由ですが、余り多くない大型の竹を集めてきた私の苦労はどうしてくれると思いましたが、その場で手ごろな竹を切ることから始めましたので、予定より大きく時間が遅れることとなりました。

会員の一人が詳細なマニュアルを作ってきましたがそれをほとんど見ることなく、竹を黙々と組み合わせさせていきました。矢張り、作製してみないと問題が出てくると思っていた通り、竹を固定するテープが不足し、補充のためホームセンターへ走るハプニングもありました。3.5mの長さの竹を縦横、約25センチ間隔で固定し、そこに発泡スチロールを四隅に固定することで浮力を作りました。やっとのことで出来あがりしましたので、まずは記念写真です。



出来あがった筏は細い竹に代えたにもかかわらず重く水際まで運ぶのに大変な苦勞をしました。進水式ですが、写真のようにきれいに浮かぶことができ、バランスも崩すこともないことが分かりました。本番では筏の上にコンパネ(合板)を置いて、手すりをつけることになりましたが、まずは大成功と言えるでしょう。熟年パワー、8名で頑張りました。時間は5時30分を過ぎていました。

(3) 竹筏下り本番

7月28日(日)庄内川竹筏下りを実施しました。前日、水質検査時の庄内川は黄褐色に濁っていましたが、当日は濁りが薄くなり、水量も平常時に戻っていました。私は8時30分過ぎに松川橋下に到着しましたが、すでに何人もの会員が待っていました。

付属高校生は9時30分過ぎには到着しましたが、竹筏を作る場所に到着するまでに時間がかかりました。始めに愛知県環境部水地盤課にあいち森と緑環境活動・学習推進事業に関して、ご挨拶をいただき、次いで本日の事業の趣旨説明をしました。今回の活動はESD(持続可能な開発のための教育)あいち・なごやパートナーシップ事業として認定されていることを報告するとともに、庄内川の水質が全国一級河川の中で数十年にわたりワースト10であることと、川下りを通じて川遊びを楽しむことをアピールする狙いがあることを説明しました。

竹筏は名城大学付属高校生に作製してもらうこととし1台は7月14日に事前走行したものに手入れを2台は最初から作製してもらうことにしました。

筏は上部が3.5mの長さの竹を10本、2.5mの長さの竹を15本、十文字に組み合わせ、交差する場所をビニールテープ、PPバンド、ナイロンバンド等の結束バンドで固定するのですが、交差場所が多く慣れていないためにかなりの時間を要しました。

上部が出来あがると発泡スチロール約90×90×45

cmのブロックを4隅に、中央に1個を配し、それを挟みつけるように、下部に3.5m竹6本、2.5m竹を9本を使って上部と同様固定し、上下をPPバンドやビニールテープ、自転車の廃チューブを使って固定しました。結束バンドの締め付けが甘かったり、重複して補足したりで予定を1時間以上遅れての出航となりました。時間は12時8分でした。



名城大学附属高校生筏づくりいざ出航

当会は2回の事前川下りを実施していますが、今日の参加者は名城大学附属高校生27名、先生2名、庄内川河川事務所3名、愛知県職員1名、清須市職員1名、藤前干潟を守る会1名、カヌーイスト2名、あそびわ会員2名、当会会員15名の合計54名で、竹筏3艘、Eボート1艘、ゴムボート1艘、カヌー2艘の構成でとなりました。高校生には3台分のノボリを作ってきてもらいました。「浄化リバー」、「ゴミ捨てちゃ駄目」、当会の「川の汚れは心の汚れ」、「庄内川水系にアユ遡上百万匹大作戦」などのノボリが筏に取りつけられました。私はEボートに乗り、しんがりを受け持ちましたが、水量が少ないために途中で3カ所、ボートを降りなければならぬ場所があり、また何の残骸かは分かりませんがコンクリートの残骸を通り抜け、右岸側の水流



の早い場所で右岸から突き出した木にぶつかりながらの結構変化のあるコースを抜けると、いよいよJR中央線鉄橋下の難所をとります。3艘目の筏があわやコンクリートブロックに衝突するような勢いでしたが、うまくすり抜けたのに対し、Eボートは国交省庄内川河川事務所職員が川の中に入り、誘導してくれましたので難くすりぬけました。

3回目もこれまでと同様、流れのない、単調な下りが始まると、いよいよ高校生の活躍の場になりました。筏から飛び降り、ライフジャケットで浮いた体を流れに身を任せたり、筏をゆすって同僚を落とそうとしたり、筏から豪快に飛び込んだりの、川下りを大いに楽しんでいました。当会では事故にならないよう、ああでもない、こうでもない議論したのは全くの杞憂だったようです。

Eボートでは7月の太陽をまともに受けて、川面をわたる風がある時は心地良いものの、ないときには蒸し暑く、当方も出来れば飛び込みたいとの欲求を飲み込みながらの、ゆっくりした時間の流れを過ごさせてもらいました。アンケート結果では、高校生にとってはこれまでにない、経験になったようで、竹筏下りは楽しかったですかという問いに参加した27名中、26名が「強くそう思う」にマークをしてくれました。JR鉄橋下からほとんど川の中にいた女子生徒もいました。

ゴール地点は水分橋上流ですが、水辺に上がるのに都合が良い場所を選んではいましたが、簡単には上がれずに時間がかかり、距離があった筏がくっついて混みあいました。会員が操作するクレーンにより筏を吊りあげなければなりませんでした。(写真)

到着時間は1時53分、2回の事前川下りよりも約30分余計に時間がかかりました。ゴールの後、人数が多い分だけ着替えるのにも時間がかかりましたが、いつものように会長夫人による楽しい昼食が待っていました。カレーにコロケ、肉団子、サラダ等、もちろんお代わり自由なので多くの生徒がお代わりを要求したようです。



11名中7名が川の中へ



到着・ゴール地点での混みあい

今回の活動はわずか3km区間ですが、筏で下るには危険な場所もあり、また筏を降りなければならない浅瀬、生徒の感想では水温が違う場所、深さもまちまちであること、などが分かりました。小学生を対象にするには多少の問題があるようです。特に庄内川は雨の後に増水が早いので前日の雨には十分な注意が必要でしょう。

それにしても7月の猛暑の中、川の中に飛び込んだ生徒を除いてかなり過酷な活動であったことは間違いありません。ご協力有難うございました。

最後にアンケートで最も意見が割れたのは、「今回の活動で庄内川は安全に遊べる川であると思いませんか」という設問でした。生徒だけの回答は強くそう思う6名、思う8名、分からない8名、思わない5名という解釈に困る結果になりました。生徒の中でそれぞれ、印象が強かったことから導き出された回答だと思いますが、根拠を聞くべきでしたね。

一つだけ明らかなことは、ゴール地点までは水質はまあまあですが、そのすぐ下流の八田川合流点下流では水質、臭いに問題があり、今回のような水浴は出来ない川であるということでしょう。

8. 才戸流れでの活動

(1) 才井戸流と矢田・庄内川をきれいにする会との関わり

矢田・庄内川をきれいにする会と才井戸流との関わりは30年以上さかのぼる。平成3年9月30日付の毎日新聞に「スナヤツメ カワモズク 残土用地に貴重な生物」という見出しで、住民グループ「湿地帯を守って」、市に要請という記事が掲載された。この発端は、名古屋市水道局が才井戸流の水源周辺に残土廃棄場を建設する計画を推進しようとしたのに対し、当会が待ったをかけたのである。

記事をそのまま引用すると、[同会(矢田・庄内川をきれいにする会)は「生物の保護はもちろん、庄内川本流の水質保全にもこのわき水は重要な役割を果たしている。埋め立て地を移すか、せめて規模の縮小を」と、今月から名古屋市水道局との本格的な話し合いを開始した。]と記述されています。その後計画は実行に移された。現在の才井戸流にもたらされた荒廃は、名古屋市が行った残土廃棄場建設が引き金になっていることを認識すべきであるが、それを知る人は少ない。

(2) 才戸流の環境と活動

才井戸流は守山区志段味にあり、湧き出た水が庄内川に注ぐ、数百メートルの小川であるが、水源は名古屋市最大の湧水地である。才井戸流には希少種が多く生息していたが、今やゲンジボタルやカザグルマが失われた。しかし、ヘイケボタル、ヒメボタル、スナヤツメ、カワモズクが現存し、マツモ、(準)絶滅危惧種であるミクリ、ヤマトミクリ、ナガエミクリやウワミズザクラ、カタクリも見られる。

この才戸流において、私が関わってから多くの活動を行ってきた。





重機を入れてのビオトープ試験場整備

川の清掃、一年を通じての毎月の水質検査（株・愛研との共同）、守山高校・名古屋国際学園との生物調査活動、竹林整備、ぬかるみ対策としてのこの設置、排水口へのバイオビーズ設置、ザリガニによるホタル幼虫捕食実験、ホタル観賞会等々。

才戸流の近傍の区画整理計画による公園化について、区画整理組合、名古屋市都市整備公社、志段味の自然を次世代に伝える会、その他有志により話し合いが行われた。長い間、会議を続けてきたが、活動方針の違いから矢田・庄内川をきれいにする会は撤退することにした。

以下は矢田・庄内川をきれいにする会が主催したホタル観賞会で最も参加者が多かった第4回ホタル観賞会の結果である。その後、ヘイケボタルはかなり姿を消したらしい。2020年、矢田・庄内川をきれいにする会は、才戸流れにおいて辛うじて名古屋市委託の水質検査を続けている。

(3) 才戸流ホタル観賞会に179名（2014年06月8日、11日矢田・庄内川をきれいにする会ブログより抜粋。）

第4回のホタル観賞会を6月8日（日）に実施しました。庄内川での清掃活動に続き、ダブルヘッダーです。才井戸流は名古屋市内で残された唯一のヘイケボタルの生息地です。自然に任せているので今年は果たしてホタルが出るのかどうか心配されましたが、木曜日、断続的に小雨が降る中を見に行きました。まだ明るい時間でしたが、守山高校の東南角にホタルを見つけることができました。まずは安心です。

8日、当日は日中、30℃を超える気温で、ホタルが出てくる環境は整っていました。7時前に到着しましたが、すでに何人かの参加者がおり、すぐに受

け付けを始めました。守山高校東側の道路は工事のためにUターンできない状況にあり、車は満杯状態になりましたので、高校入口部分に駐車スペースを空けてもらい、対応しました。

誤算はふれあいスクールのスタンプラリーチラシおよび事業紹介冊子が30部ずつしか配布されていないことで、スタンプラリーチラシは10分ほどでなくなりました。そのため、当会が準備した資料にスタンプを押して、そのスタンプを貼り付けてもらうことにしました。

当会の活動紹介、才井戸流れの紹介、ホタルの解説をしているうちに暗くなり、ホタルが見えるようになりました。上流部のウミズサクラの下を見に行ったら、昨年よりは少ないようですが、ホタルは矢張りいました。「自然のホタルなので、見ることができるかどうかは保証できません」と説明をしたとは言え、やはりホタルを見てほしいので一安心です。



押すな押すなの参加者



同じ場所でザリガニ調査

それから後はホタルを楽しんでもらうことにしました。乱舞するホタルもきれいですが、目を凝らしてみるホタルも、その労力の対価として喜びが大きくなり、印象が強くなります。

ホテルを見た方々が三々五々、帰宅の途につくなかで、最後の見回りの後、当会も引き上げることにしました。

本日の参加者は記名者 179 名で昨年よりもずいぶん多い数となりました。大垣市、西尾市、あま市、春日井市、尾張旭市、瀬戸市、緑区、西区、中区、北区等からの参加者もいました。

(ザリガニ調査は 2014 年 7 月 21 日)

9. 奈佐の浜海岸のゴミの片づけで伊勢海老 5 匹ゲット

近年は大雨や台風の影響が大きくなる傾向にある。地球温暖化によると言われているが、大雨で伊勢湾には大量のごみが流れ込んでくる。そのごみは三重県の伊勢湾入り口に位置する答志島に漂着する。その問題を解決すべく、2012 年 6 月 9 日に、東海地域から数百人が海岸清掃と答志島の現状を知るために集合した。私と家内も土岐川・庄内川流域ネットワークの一員として参加した。答志島には年間 3000 トンのゴミが漂着する。



表彰された写真



表彰写真の前で

その際に、三重県が美し国 三重として「フォトコンテスト」が行われることを知ったので、漂着ゴミ清掃の写真を応募した。翌年 3 月に、表彰が行わ

れ。見事 3 位に入賞し、賞品は伊勢海老 5 匹をゲット、美味しくいただいた。写真は清掃の様子と表彰掲示されたものである。この写真は誰が撮影しても同じようなもので、表彰を受けたのはそのタイトル「ヒトがゴミに埋もれるよりもゴミがヒトに埋もれる社会を」が表彰されたと思っている。

10. 矢田・庄内川をきれいにする会として講演、事例報告を行う

矢田。庄内川をきれいにする会の活動について、多くの報告依頼があった。私が行った報告はパワーポイント資料から調べると次のとおりである。

近自然工法研究会、ふるさと春日井学研究 Forum、学生環境サミット、香流川をきれいにする会（2011 年、2015 年）、水質環境目標市民モニタリング・湧水モニタリング（平成 25 年度・27 年度成果発表会）、名古屋国際学園（才戸流保全活動）、尾張地域水循環再生地域協議会事例報告、東生涯学習センター、藤前クリーン大作戦講演、名城大学付属高校、あいち森と緑づくり環境活動・学習推進事業事例報告（21 年度、27 年度）、名城大学春日井市卒業生の会、名東ライオンズクラブ、第一回庄内川川会議、庄内川再生フォーラム、庄内川流域ネットワーク、河川財団事例報告（川に学ぶ事例報告発表会）、宮崎県自然豊かな水辺の工法研究会・研修会（宮崎、延岡の 2 カ所）、生物多様性センター

11. 宮田会長夫妻、矢田・庄内川をきれいにする会会員への感謝

矢田・庄内川をきれいにする会は、私が会員になる前に、私の後輩である小野事務局長を通じて知っており、水質浄化の実験を請け負ったりした。その際にはバイオビーズを使って、王子製紙の排水や堀川の水の浄化実験を行ったりもした。

広報部長となって矢田・庄内川をきれいにする会の 34 年間の活動をまとめて、日本水大賞に応募し、環境大臣賞を得たのは、まさしく、矢田・庄内川をきれいにする会が表彰に相応しい活動をしてきたことの証左である。そのリーダーが宮田会長夫妻である。

宮田会長は脳梗塞や心臓疾患等で入退院を繰り返しているが、その間、会長夫人が会の運営に支障がないように、活動されてきた。その上、イベント等での昼食のカレーやソーメン流し等、例え、100 人、200 人であろうと必要な人数分準備をしてくれるの

である。また、忘れてならないのは、活動資料の蓄積、保存を確実に努めていることであり、それが環境大臣賞の受賞につながったと言える。

余り表面には余りでることがないが、小野事務局長の存在も大きい。小野事務局長は私が計画した、アユ築づくり、アユの産卵場整備、庄内川の竹いかだ下り、才井戸流れのビオトープづくり、すのこの設置、長島町の川の浄化など、縁の下の力持ちを發揮し、そのほとんどを実施可能にした。大いに頼りになる後輩だった。

現在の役員の方々は、私がかかなり独断で決めてきたのに対し、事業ごとに細かく意見を聴取しながら、民主的運営に努めている。その上、企業や行政に対しては科学的な知識や根拠に基づいて厳しく対処しており、頼もしい限りである。

私は矢田・庄内川をきれいにする会の広報部長を8年間やらせてもらったが、大きな混乱もなく、好きなように活動させてもらったと思っている。会員の皆さんには協力的で、楽しい思い出しかないので、宮田会長夫妻、小野事務局長および会員の皆様に厚くお礼申し上げます。本当に楽しい、有意義な活動でした。

矢田・庄内川をきれいにするための環境基準 ～50年経っても矢田・庄内川の魚が食べられない根本的原因～

佐久間 元成

当会は設立から50年目を迎える。全国的に見ても市民団体が50年間活動を継続しているところは多くない。これだけ長く続けてこられたのは、宮田会長をはじめ会員の皆様のご尽力の賜であることは勿論であるが、別の見方をすれば50年経っても矢田・庄内川がきれいになっていないことが理由でもある。

私が会員として活動に参加したのは2009年頃からである。会の歴史から見れば、たったの15年程度である。本報は、この間に取組んできた矢田・庄内川をきれいにする活動のうち、水質環境基準にかかわる活動の記録を記念誌の一部として残したい。

<3つの衝撃>

私が当会会員として活動した中で大きな衝撃を受けた出来事が3つある。1つ目は水分橋付近での王子臭である。全国の河川を数多く見てきたが、水分橋付近の庄内川の悪臭（製紙排水からの硫黄臭であり、この悪臭を王子臭と呼んでいる）のあまりの酷さに衝撃を受けた。全国の公害は克服したと言われているご時世に、強烈な悪臭が漂う河川が今も存在することに驚いたことを今でも覚えている。



王子臭が酷い水分橋付近

2つ目は、庄内川河口で採集したシジミの不味さである。当会の活動として2012年から「庄内川河口・二枚貝調査」を毎年継続しているが、初年度に採集したシジミを味噌汁にして食した際の強烈な不味さは衝撃的であった。味噌汁を口に入れた瞬間から先に述べた王子臭が口の中に広がり、直ぐに吐き出してしまふほどであった。シジミの味噌汁は私の好物であるが、あのときの不味さを経験してからは、シジミの味噌汁を食す際は、記憶が蘇って最初の一口は恐る恐る口に入れるようになってしまった。あのとき体感した衝撃は一生忘れないであろう。



名城大学附属高等学校・自然科学部と
合同で実施したシジミの食味調査

最後の3つ目は、庄内川の濁水である。雨の後に見られる土砂や粘土由来の茶色い濁り水のことであるが、庄内川では雨が降っていない日に突如として、川一面にひどく濁った濁水が流れていたのである。「流れていた」と過去形にしているが、これは当会の会員が濁水の発生源を上流の土岐川支流まで遡って調査し、ある業者の敷地から流れ出ていることを特定したことで、現在では濁水は見られなくなっている。発生源を特定したことで、その後、行政指導が業者に対して行われたのである。濁水問題は当会会員の活動によって解決した。

しかし、それまではひどい濁水が流れていても多くの沿川市民は問題視することなく、長年流れ続けてきたのである。沿川市民の川の汚れに対する無関心な状況は過去も現在も課題として残っており、上記3つの衝撃よりも沿川市民の川の汚れに対する無関心な状況は、総じて最も深刻な事態といえるだろう。



庄内川で発生していた濁水

<環境基準の見直し>

当会では、魚がおいしく食べられる川を目指して、長年、水質環境基準の見直しを愛知県に求めてきた。結果的に令和2年（2020）に庄内川と矢

田川の環境基準の見直しが行われ、類型が1ランクアップした。このように水質は改善傾向にあり、環境基準が1ランクアップしたことは喜ばしい出来事である。しかし、そこに至る過程では、素直に喜べない事情があった。この喜べない事情こそが、50年経っても矢田・庄内川の水質がおいしく食べられない根本的な原因であろう。

庄内川の環境基準の設定や見直しは、愛知県が実施するものである。今回の見直しが行われたきっかけは、実に情けない経緯があり、愛知県の環境行政の恥を露呈するものであった。

ことの始まりは、清須市議会議員である高橋哲夫市議との出会いである。当会の活動を知った高橋市議から清須市内の河川の水質を改善するために話を聞かせて欲しいとの依頼があり、水質環境基準の問題点や庄内川や新川・五条川の現状について私の意見を述べる機会を得た。

高橋市議は市内の川の魅力を高めたい想いで、その後、市議会において「庄内川・新川・五条川の類型指定について」と題した質問をされたのである。その内容は、市内を流れる河川の水質基準が庄内川は未だにDランク、新川と五条川については最低のEランクであること、そして庄内川・五条川では15年以上、新川に至っては40年以上見直しが行われていないことを問題視したものであった。そして、高橋市議の質問に対して、当時の加藤市長は現在の水質基準に対して「考えられんですわ。全然変わっておらんというのは全く考えられん。」と答えたのである。※詳しくは、別添の清須市議会(平成25年12月議会一般質問)の議事録をご覧ください。

そして、清須市議会での加藤市長と高橋市議のやり取りが、後に愛知県を動かすきっかけになったのである。当会の活動が清須市議会での質問に繋がり、そのことが結果的に愛知県を動かすことになった。当会は愛知県に対して水質環境基準の見直しを毎年要望し続けてきた。結果的に清須市議会を通じて愛知県を動かすことになったが、当会のような市民団体の声が愛知県政に直接届くことがないと実感した残念な出来事でもあった。

さて、このような経緯を経て、ようやく愛知県が環境基準の見直しに向けて動き始めることになる。平成28年(2016)のことである。これにより庄内川の水質基準も早急に見直しが行われることを大いに期待したが、愛知県が示した見直しの考え方や進め方は問題があるものであった。

図1は愛知県が提示した水質環境基準の見直しスケジュールである。清須市議会での発言もあり、庄内川水系の新川と五条川はブロック1として最初の年(平成28年)に見直しを行う予定が示された。一方で、同じ庄内川水系の庄内川は、それから3年後の平成31年に見直しを行う予定が示された。庄内川の見直しは最後であった。同じ庄内川水系の庄内川、新川、五条川の庄内三川は、支派川が繋がるまさに一体的な河川(新川は庄内川の放水路でもある)であり、同一水系とし

て本来は一体的に見直しを行うべきであった。

また、県内の水質汚濁の深刻さを踏まえても、庄内川がブロック1として最初に見直しを行うべきであった。最初の年でなくとも、百歩譲って二番目に見直しを行うべきであっただろう。

当会からすれば、庄内川の環境基準の見直しを愛知県に長年要望し続けてきたにもかかわらず、それを無視する形で見直し順は最後であった。ましてや別水系である日光川(日光川水系)と新川・五条川(庄内川水系)を同一グループにするなど、流域の土地利用や水系区分を考慮しないブロック区分であった。こうした数々の問題点から愛知県の環境行政の怠慢を露呈したずさんな見直しスケジュールと言わざるを得ないものであった。

庄内川の汚れ(異臭汚染)の主な原因は、大手企業の王子製紙春日井工場からの製紙排水である。そのことは愛知県の担当職員であれば、口には出さないが誰もが認識する周知の事実である。愛知県(の職員)は大企業の企業活動を優先し、水質改善という公共の利益を後回しにすることを選択したのである。当時の職員は、最も厄介な庄内川の見直しを自らが担当することを避け、他の部署に異動した後に見直しが行われるよう設定したことがあからさまであった。

最優先に取り組むべき課題から逃げ、公共の利益よりも職員の個人的都合を優先したスケジュールであった。当会は「川の汚れは、心の汚れ」をスローガンに活動をしているが、愛知県職員の心の汚れが表面化した出来事であった。

	指定年度	指定水域
当初の指定	昭和45年度～平成10年度	38河川49水域
前回見直し	平成7年度～16年度	14河川18水域
今回見直し	平成28年度	ブロック1
見直し予定	平成29年度	ブロック2
	平成30年度	ブロック3
	平成31年度	ブロック4

(備考) ブロック1: 庄内川等水域の一部(日光川、新川下流、五条川下流)、豊川等水域
 ブロック2: 矢作川水域 ブロック3: 境川等水域
 ブロック4: 庄内川等水域(ブロック1の水域を除く。)、その他の水域

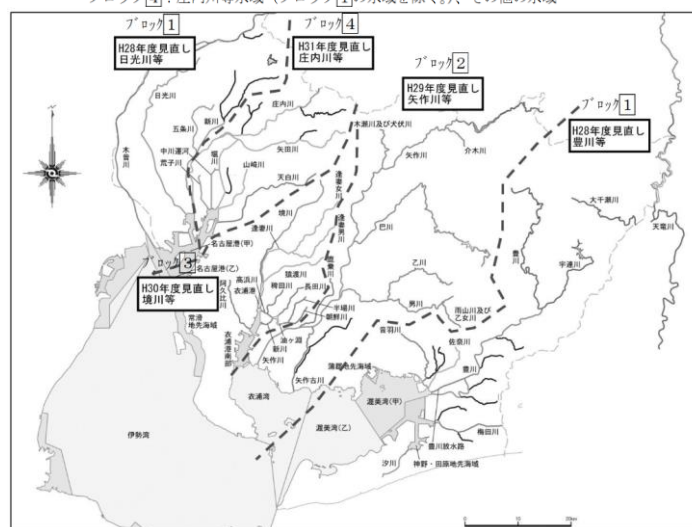


図1. 愛知県が提示した環境基準の見直しスケジュールとブロック区分(出典:愛知県資料)

新川・五条川の見直しから3年遅れで庄内川の見直しの検討が開始した。ようやくであった。そして、愛知県が提示した見直し案は、庄内川の水質の現状と水の利用目的を無視するものであった。代表的な観測地点である「大留橋」の水質の経年変化と環境基準を図2に示す。

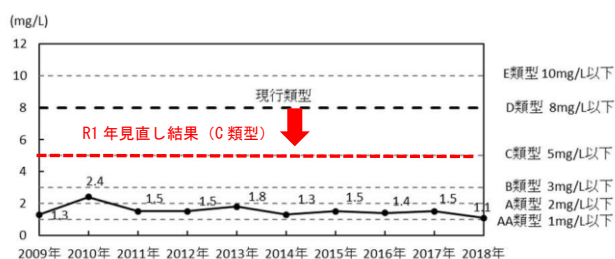


図5 (1) 環境基準点 (大留橋) における BOD (75%値) の状況

図2. 庄内川 (大留橋) の水質と環境基準類型の見直し結果
(出典：愛知県資料をもとに加筆)

この地点の BOD は、かなり以前から 3mg/L 以下であることが分かる。しかしながら、環境基準は長年 D ランク (8mg/L) が設定されていたのである。実際の水質と環境基準値との大きな乖離は誰の目にも明らかである。

さらに、ここ 10 年間以上、水質が 3mg/L 以下であるにもかかわらず、愛知県が示した環境基準の見直し案は C ランク (5mg/L) であった。新たな環境基準値よりも、実際の水質は大きく下回っており、今さら新しい環境基準値を設定したところで全く意味をなさないものであった。

まさに 15 年以上、河川によっては 40 年以上に渡って環境基準の見直しを怠ったツケが明るみとなった。このような場合、神奈川県では環境基準の 2 ランクアップを行っている。なぜ、愛知県は 2 ランクアップを行わなかったのだろうか。

2 ランクアップの必要性は、検討部会でも指摘されていた。委員の井上隆信専門員 (豊橋技術科学大学) による 2 ランクアップについての疑問に対して事務局 (愛知県) は、言い訳ばかりの回答を並べ、納得がゆく説明もなく 2 ランクアップを強引に行わなかったのである。

そして、「2 ランク以上上位の類型の指定にあたっては、環境基準点以外の調査地点や支流の水質状況等も含め総合的に勘案する。」という今後のルールを資料に記載するだけで終わってしまった (図3)。

(2) 県の考え方

国の考え方に鑑み、BOD の測定値を基本に検討し、その他の項目については必要に応じて考慮して進めるものとする。

考え方については、以下のフローによる。

< 水域類型の見直しの考え方 >

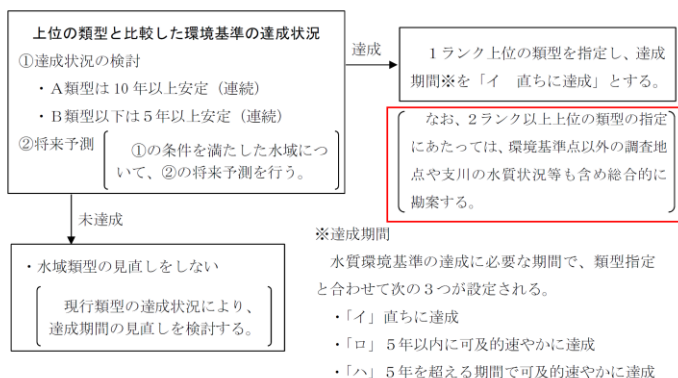


図3. 愛知県の環境基準類型見直しの考え方
(出典：愛知県資料をもとに加筆)

2 ランクアップに向けた「総合的な勘案」は、実施していないのである。また、愛知県がすることではなく、審議会 (水質部会) が総合的に勘案するものであるはずだが、愛知県の曖昧な回答によってスルーされてしまった。今回からのルールではなく「今後」のルールとしたことも問題であった。「今後」とはどう考えても 10 年以上先のことであろう。このルール自体、愛知県職員の個人的な考えにすぎない。その場しのぎの個人的な思想で作られた「今後」のルールによって、県民は多大な不利益を被る結果となってしまった。

※詳しくは、別添の愛知県環境審議会水質部会の議事録をご覧ください。

このように愛知県が行った水質環境基準の見直しは、公共の利益を無視した県職員の個人的思想・意向によって情けない結果となってしまった。新川 (萱津橋) の環境基準の見直しは、現状の水質と環境基準の大きな乖離を解消できなかった典型例といえる (図4)。

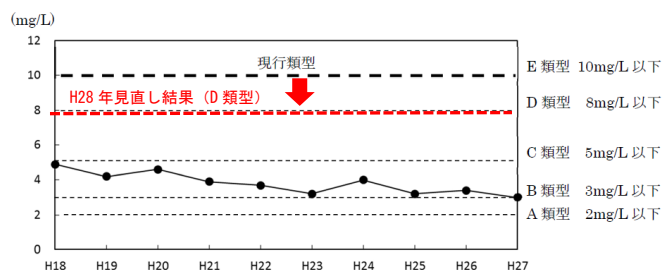


図5 環境基準点 (萱津橋) における BOD (75%値) の状況

図4. 新川 (萱津橋) の水質と環境基準類型の見直し結果
(出典：愛知県資料をもとに加筆)

水質基準が 2 ランクアップすることは、水質改善の取り組みの成果であり、愛知県にとっても喜ば

しいことのはずだ。それにもかかわらず、愛知県（の職員）が頑なに2ランクアップを拒んだ理由が今でも不明である。

さて、ここまでは後ろ向きな話が続いてしまったが、ここからは前向きな話をしたい。同じ行政でも愛知県と名古屋市では対応が大きく異なった。

名古屋市は庄内川の魚や貝がおいしく食べられることを目指した当会の活動に理解を示してくれたのである。通常行う水質調査に加えて、名古屋市は「庄内川における生物等の異臭調査」を令和2～4年の3カ年実施したのである。庄内川に生息する魚類（コイ、フナ、アユ、オイカワ、ボラなど）と貝類（ヤマトシジミ）の体内に含まれる異臭物質（メチルメルカプタン、硫化水素、硫化メチル、二硫化メチルが対象）の調査である。当会もこの調査を実施するあたり、魚類や貝類のサンプル採取に協力した。



名古屋市の調査のための
シジミサンプルの採取



名古屋市の調査のための
魚類サンプルの採取

地域の課題に対して新たな予算を確保し、調査を実現いただいた名古屋市の職員の方々には本当に感謝したい。また、調査の結果は名古屋市のホームページで公開していただいている。ぜひご覧いただきたい。

名古屋市の調査結果から魚類や貝類の体内に含まれる異臭物質の特定とその体内含有量を把握することができた。このことは大きな成果である。しかしながら、現状では異臭物質の種類ごと

に、人への影響や不快と感じる生物内含有量の目安（基準値）が明確でないことが課題として残っている。

近年、環境省が全国一律ではなく、地域特性に応じた環境基準の指定に向けた議論を進めている。こうした動きを踏まえ、異臭物質の生物内含有量を指標（測定項目）とした庄内川水系独自の地域環境基準を設けることを今後真剣に考えるべきであろう。地域環境基準が設定されるまでは、当会が魚釣り大会等のイベント時に実施している「食味を指標とした水質調査（以下、食味調査という）」を当面続けていきたい（図5）。



釣り大会での食味調査



図5. 食味を指標とした水質調査マニュアル
（左：シジミ編、右：アユ編）

この食味調査は、対象の河川でシジミやアユなどを採取し、それを味噌汁や焼き魚として調理し、食べた人の「おいしい」や「おいしくない」などのアンケート結果（感想）をもとに川の水質を評価するものである（図6）。

項目類型	対象とする水産生物	基準値（案）		
		食味 [※]	外観	臭い
生物A	比較的低温域の水域に生息するイワナ、サケマス等	90%以上	奇形個体が見られないこと	異臭がしないこと
生物B	比較的高温域の水域に生息するコイ、フナ等	70%以上	奇形個体が見られないこと	異臭がしないこと
生物C	汽水域に生息するシジミ、ハマグリ等	70%以上	奇形個体が見られないこと	異臭がしないこと
生物D	広範な水域（生物A～Cの水域を含む）に生息するアユ、ウナギ等	70%以上	奇形個体が見られないこと	異臭がしないこと

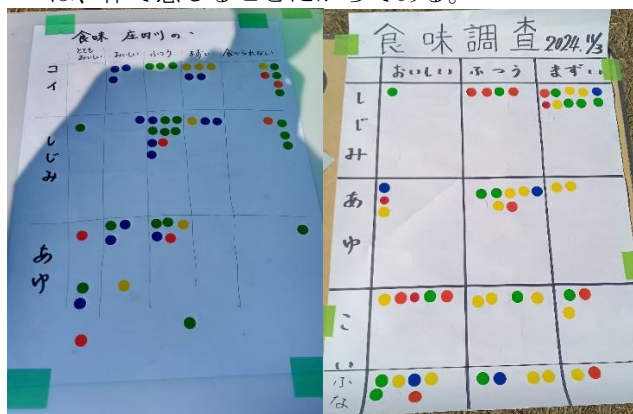
※水産生物を食べたときに「おいしい」と回答する人の割合

図6. 食味を指標とした水質調査にもとづく新たな環境基準の提案
（出典：食味を指標とした水質調査マニュアル（シジミ編））

食味調査に参加した 70%以上の人が「おいしい」と答えることが基準を満たす条件としている。これまでの結果、シジミは残念ながら「おいしい」と答える人の割合が大幅に基準値以下となっている。ただし、少しずつではあるが「おいしい」と答える人の割合が高くなってきている（図 7）。

また、アユは庄内川中流域（水分橋より上流）で採取したサンプルの場合、「おいしい」と答える割合がかなり高い傾向にある。水質が改善してきている証であろう。一方、庄内川下流域（水分橋より下流）のアユは明確に「おいしくない」状況である。当然であるが、採取した場所の水質（王子臭）がアユの食味に影響を与えていることは言うまでもない。

ぜひ皆さんも食味調査に参加・協力いただき、食味を通じて庄内川の水質とその経年変化を体で感じてもらいたい。特に将来を担う若者には、イベント等の機会を通じて食味調査に参加してもらいたい。人々の行動変容に繋げる一番の近道は、体で感じるからだからである。



釣り大会（左：202、右：2024）にあわせて実施した食味を指標とした水質調査結果

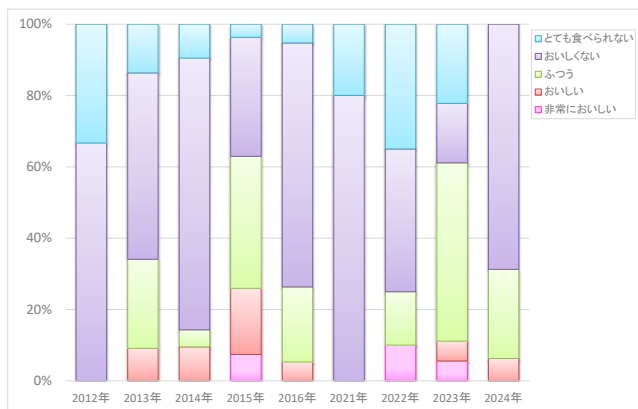


図 7. シジミの食味を指標とした水質調査結果の経年変化

<最後に>

本報では、水質環境基準の観点から、これまでの活動を振り返った。そもそも環境基準とは「人の健康の保護及び生活環境の保全のうえで維持されることが望ましい基準として、終局的に、大気、水、土壌、騒音をどの程度に保つことを目標

に施策を実施していくのかという目標を定めたものが環境基準である。環境基準は、「維持されることが望ましい基準」であり、行政上の政策目標である。（環境省資料）」とされている。つまり行政上の政策目標ということである。したがって、過去から現在の庄内川の環境基準は、政策目標として魚や貝をおいしく食べることを目指していないのである。

行政が政策目標としないのは何が原因だろうか。それは行政職員が原因でもあり、その行政職員を動かす議会が原因でもあり、その議会の動かす首長や議員が原因でもあり、詰まるところ、その首長や議員を選ぶ市民が原因でもある。結局は私たち市民の責任である。

現在、私たちは庄内川の水を飲むことはなく、木曽三川の水源に依存した生活を送っている。ほとんどの市民は、身近な庄内川の恩恵を感じる機会がない状況である。問題のある状況である。

しかし、大地震などの災害が起きた場合を想像して欲しい。過去に大規模な災害が起きた地域では、インフラが機能せず、飲み水や生活に必要な水を身近な川から得て避難生活を送ったとする事例は多い。災害を通じて身近な川の重要性を実感することは間違いない。しかし、災害が起きてから重要性を感じるようでは遅いのである。

日本は災害列島である。庄内川流域でもいずれ大規模な災害が起きることは間違いない。それがいつかは分からない。災害が起きる前に、庄内川の水の大切さを日頃から考え、日頃からきれいに保つ備えが必要である。そのことを改めて市民、行政、企業等が認識することが大切である。

環境保全も防災の備えも一体的なものである。行政や誰かが取組んでくれるものではなく、自らが取組むものである。矢田・庄内川をきれいにする会の活動もこうした認識を市民に伝えていくことが今後の使命であろう。

庄内川は私たちにとって母なる川である。なぜならば、庄内川の水は私たちの命と健康を守る水であるから。

(別添資料 1) 清須市議会(平成 25 年 12 月議会一般質問)の議事録)

高橋議員。

< 8 番議員 (高橋 哲生君) 登壇 >

8 番議員 (高橋 哲生君)

議席 8 番、高橋哲生。議長のお許しを得ましたので、順次質問いたします。

まず、1、河川環境基準の類型指定についてであります。

公害対策基本法第 9 条及び環境基本法第 6 条の規定、すなわち政府は大気汚染、水質汚濁、土壌汚染及び騒音に係る環境上の条件について、それぞれ人の健康を保護し、及び生活環境を保全する上で維持されることが望ましい基準を定めるものとする。このような生活環境の保全に関する環境基準が定められておりまして、全国の河川ごとに、A A から E の類型指定がされております。これは国あるいは県が指定するものとなっております。

本市に関係するところでは、お手元に配付いたしました資料 1 にあるとおり、庄内川下流で D、新川下流で E、五条川下流で E に指定されております。

資料 2 のほうが基準となっておりますが、A A を最上位として、E が最低の類型になります。

続きまして、資料 3 をごらんください。これは全国 1 級河川の水質状況図であります。全国で 1 0 9 ある 1 級水系の中で、関東圏の鼓川で E があるものの、庄内川が D であるということは、これ全体を見ても特異で、最低レベルな状況であるということがわかると思います。

我が市を流れる 3 河川がこのような最低レベルの環境類型にあることは残念であり、恥ずべきことだと思います。もちろんかつて高度成長の中で工業優先、経済優先がされてきたり、流域の市街化の進展、下水の立ちおくれ等々、歴史的な背景もあると思いますが、一方で放置され、無視され、余りにも粗末な扱いを受けてきたのではないかと思います。これまでも本市では加藤市長のリーダーシップのもと、治水事業とともに、水辺の散策路整備、河川環境保全、河川における環境教育など、水に親しむまちづくりが強力に推し進められてきたと存じております。それに呼応する形で水辺にはウォーキング、ランニング、健康づくり、各種スポーツ、畑や、また釣り、昆虫採集、魚とり、あるいは朝市等々、各種イベント等々、水辺に憩い、親しむ市民は年々増加しているように見受けられます。また、新川美化を初め庄内川、五条川でも河川環境保全に努める市民、団体も育ってきており、河川環境保全に関する関心も高まってきております。

そんな中、河川の水質の向上は、多くの市民が望むところではないでしょうか。我々人間の 7 0 % を構成する水であります。人間を含め多様な生命が息づく、そんな水が豊富であるということは、清須のかけがえのない財産であります。河川の水質を高め、本来の自然の姿を取り戻し

ていくことは、市の魅力を高めることになります。想像してください。五条川の桜並木に流れる清流を、清洲城がはえる清流を、かつてのようにシジミがとれたり、鶺鴒が行われる新川、あるいはかつて四十八景の1つとたたえられた自然環境豊かな庄内川、このようなものを取り戻していきたいと私は考えるものでありますが、河川の水質浄化というのは、地球環境の保全にもつながる一大事業でありまして、水とともに生きる清須市民にとって意義深い事業だと思っております。

そして、その一歩となるのが河川環境基準の類型指定のランクアップだと思います。上位類型指定を目指すアクションは、河川環境保全に対する理念を市内外に伝える強力なメッセージとなると思います。

そこで質問いたします。

①水と歴史に織りなされた安心・快適な環境都市を標榜する清須市として、さらに高度な類型指定がなされるように、関係機関、この場合は愛知県だと思いますが、こちらに積極的に働きかけるべきだと考えますが、所見を伺います。

②としまして、これに関連しておりますが、清須三川の水生生物の保全に係る水質環境基準の水域類型の指定というものが、このたび検討されておまして、愛知県によって12月に新たにこれが指定の告示を受けると聞き及んでおります。現在、審議会の答申では、生物Bという指定になるのではないかとということではありますが、この指定によってどんな効果があるのでしょうか。また、本市として、この指定に際し、この際どうかかわって、どんな行動をとっていかれるのか、お伺いいたします。

大きい2番としまして、環境保全における市民協働の展望であります。

①年々市民による河川環境保全活動が盛んになっておりますが、ここで改めて河川環境保全に関する市民協働の実績（内容・参加者数の推移等）の報告とその評価をお伺いいたします。またそれを踏まえ、今後さらにこの市民協働を加速するためにどんな施策を展開していくのか、お考えを伺います。

3つ目としまして、新教育長の基本的なお考えということで、新しく清須市2代目の教育長に御就任おめでとうございます。御就任に当たり、清須市の教育行政においてお力を発揮され、実現していきたいこと、実現すべきことについてお考えを伺います。特に小・中の学校教育においてはどんな児童・生徒像を目指しますか。清須市の幼児教育についての現状認識をどう考えていらっしゃいますか。幼児教育振興策についてはどう考えていらっしゃいますか。教育日本一の

清須市を標榜できるほどの御活躍を期待してやみませんが、清須市の教育にかけるその意気込みも伺います。

以上、答弁よろしく願いいたします。

議長（石田 敏治君）

最初に、1の①の質問について、星野生活環境課長、答弁。

生活環境課長（星野 薫雄君）

生活環境課、星野でございます。

1の①についてお答えいたします。

高度な類型指定に向けて関係機関に積極的に働きかけるべきではないかについて、お答えします。

河川環境基準の類型指定ですが、水質汚濁に係る環境基準により公共用水域を水域と利水目的、水質汚濁の状況、水質汚濁圏の位置状況を考慮して基準値が設けられており、庄内川については、本市よりも上流域で類型がD、新川・五条川については類型がEと指定されています。

河川の水質向上には、全ての流域全体が河川を汚さないということが重要であり、生活排水が汚れの大きな原因となっていることから、本市においても下水道整備を促進し、下水道事業等の関連事業や関係機関等との連携、調整及び住民等との連携を図りながら、河川浄化に向けて取り組んでまいります。また、本市においても独自に河川の水質調査を実施することにより、現状把握に努めていきます。

以上でございます。よろしく願いいたします。

議長（石田 敏治君）

高橋議員。

8番議員（高橋 哲生君）

答弁ありがとうございます。市で独自の水質調査を実施していかれるということは評価したいと思いますが、肝心なところが答弁になってないと思います。

私の質問の趣旨は、より上位の類型指定がなされるように関係機関、この場合に愛知県になりますが、それに対して清須市として働きかけをしてくださいという趣旨であったはずなんです、そのところをもう一度御答弁お願いいたします。

議長（石田 敏治君）

星野生活環境課長。

生活環境課長（星野 薫雄君）

このたびの類型指定に向けてでございますが、指定がするのが愛知県となります。愛知県のほうに聞き取りいたしましたところ、指定の類型については市民団体の声、あとは市民等の声等を根拠にしながら、また水質基準の調査を根拠にしながら、類型の見直しをしていくということになっておりますので、こういった声が大きくなれば県においても見直しの方向になっていくと思っております。

以上です。

議 長（石田 敏治君）

高橋議員。

8 番議員（高橋 哲生君）

それはよくわかるんですけど、市として声を上げたらどうかということなんですけど、そういう気はないということですか。ないのかあるのか。シンプルなことなので、どうなんですか、そこは。

議 長（石田 敏治君）

星野生活環境課長。

生活環境課長（星野 薫雄君）

清須市においても県のほうに働きかけていきたいと思っております。

議 長（石田 敏治君）

高橋議員。

8 番議員（高橋 哲生君）

ありがとうございます。働きかけていくという前向きな答弁をいただきましたけど、これ実際、現状の数値を見ても、類型と合っていないんですよね。現状、今、かなりきれいになってきていまして、DだとかEだとかあるんですけど、新川なんかも、私は全てですけど、Cぐらいにいけるんじゃないかなと数値を見ても思うんです。

これ今まで、庄内川、五条川でいいますと、15年以上見直しがされてない。新川は40年以上見直しがされてないんですね。昭和46年5月25日に閣議決定をされた、そのままなんです。こういうのがほかでもそういう例はあるんですけど、やっぱり地域から声を上げていくということが非常に大事だと思いますので、そこら辺、この分野は、やはり環境課ではないかなと思っておりますので、ぜひ課長またリーダーシップを発揮されて、また浄化にも取り組んでいかれ

るということなので、これとあわせて行動をとっていただきたいと思います。

せっかくですから、市長からも何かコメントいただければ、これに関して。

議長（石田 敏治君）

加藤市長。

市長（加藤 静治君）

私は専門的な数字はわからんですけど、考えられんですわ。全然変わっておらんというのは全く考えられん。いろんなことをやってきとるわけで、それでこういう数字だということは考えられんと思います。この基準について、一遍よく研究したり、また要望したりしていきたいと思います。

議長（石田 敏治君）

高橋議員。

8番議員（高橋 哲生君）

ぜひ市長のリーダーシップも発揮していただきたいと思います。

次、2番目のほうへ行ってください。

議長（石田 敏治君）

次に、②の質問について、星野生活環境課長、答弁。

生活環境課長（星野 薫雄君）

②の水生生物の保全に係る水質環境基準の水域類型の指定が告示されることにより、どんな効果があるのか、市としてのかかわり、今後の行動ですが、水生生物保全環境基準については、環境基準の類型が指定されることにより、その水域について環境基準が適用され、その達成状況が評価されるものであり、国が指定する水域以外の水域の指定事務は愛知県知事が法定受託事務として、直近5年間の水質等の状況、魚介類の生息状況を調査した結果により指定されるものであります。

庄内川等水域は、生物Bと指定、告示が12月にされ、指定に当たっては、本市がかかわることではありません。今後、愛知県が河川等環境の水質保全を一層推進するため、この告示により県内の河川等の水域においては、水生生物保全環境基準が適用されることとなり、公共用水域水質測定の中で、同環境基準の達成状況について監視していくこととなります。

なお、河川の水質向上に向けた本市の行動については、①で御答弁申し上げたとおりでございます。

(別添資料 2) 愛知県環境審議会水質部会の議事録

(2) 諮問事項

生活環境の保全に関する水質環境基準の水域類型の見直しについて

- ・水質環境基準の水域類型の見直しについて

【事務局】

(事務局による説明)

<質疑応答>

【井上委員】

資料3の3ページ、下の(2)の県の考え方で、「2ランク以上上位の類型の指定にあたっては」と書かれている。2年前に2ランク上位の類型を満足していたが、2ランク上位に指定しなかった水域が1件あったと思う。この考え方は変わっていないのか。

【事務局】

考え方は変えていません。

【井上委員】

その時、2ランク上げるのは、かなり大変だという話をしたと思う。

【事務局】

流入河川がどれだけあるかといった川の構造や補助地点、調査地点を総合的に勘案し、引き上げは時期尚早と結論されたと考えている。

2年前は、井上委員からのご意見を受け、フローに2ランクアップの考え方を追加した。平成28年度当初は、2ランクアップの記載がなかったが、部会の中で2ランクアップできるのでは、というご意見を受けて追加した。

(1) 諮問事項

ア 生活環境の保全に関する水質環境基準の水域類型の見直しについて

- ・平成28年度第1回水質部会における委員意見及びその対応について
- ・水質環境基準の水域類型の見直し(案)に対する県民意見の概要と県の考え方(案)

(事務局による説明)

<質疑応答>

【井上専門委員】

2ランクアップする場合の考え方について、資料2の10番の回答で、その方針については「環境審議会へ諮問し、審議中です」という回答になっているが、2ランクアップのときは厳しくするという事で審議中になっているのか。

【事務局】

11月10日の第1回目の部会のときに、参考資料3-1の3ページ(2)県の考え方(案)で、国の考

え方、それから県の考え方を示し、県の場合は、3ページの真ん中より下のところに県の考え方としてそのフロー図を示し、1ランク上位の考え方について了解をもらったと理解している。

なお、審議会から答申を受けていないので、審議中と整理した。

【井上専門委員】

1ランクアップするときはこれでわかるが、2ランクアップをしないということや、2ランクアップのときの考え方については明記されていない。

【事務局】

11月10日の部会の中でも、出席委員から同じような質問があり、さきほどの説明でも申し上げたように、2ランクアップするときは、対象河川の環境基準点以外の調査地点や支川の水質状況等を含め、総合的に勘案していきたいという回答をした。

【井上専門委員】

それを見直しの考え方のフローの中に入れておいたほうがいいのではないか。

議事要旨等で確認できるが、フローでは、1ランクアップはこの考えで1ランクアップし、2ランクアップのときにはこういった考えで、2ランクアップするということを明記しておいたほうが、この後、ルールがわかりやすい。

【事務局】

了解した。水域類型の見直しの考え方のフロー図を修正する。

庄内川のアユ

間野 静雄

1. 庄内川との出会い

矢田・庄内川をきれいにする会の活動に参加するようになった 2012 年当時、私は大学院で長良川の天然アユの生態研究をしていた。それまでに投網など使ったこともなかったが、きれいにする会の活動で投網を打つようになり、庄内川にもアユがいることを知った。恥ずかしながら、アユと言えば「清流の魚」というイメージしかなく、陶土で濁り、製紙工場の排水で嫌なにおいがする汚い庄内川にまさかアユがいるとは思わなかった。ところが川に入ってみると陶土を被った真っ白な石や投棄された古タイヤにもハミアト（付着している藻類をアユが食べた跡）がたくさん付いていた。庄内川でたくましく生きているアユを見てからは研究目的だけではなく、庄内川的环境改善を意識してアユを調査するようになった。きれいにする会の活動が 50 年前に始まったことを考えると、私が庄内川で活動した期間は約 10 年とわずかではあるが、この間に調査して分かってきた庄内川のアユを取り巻く環境について報告したい。

2. 庄内川を遡上するアユ

アユは川の魚というイメージが強いが、秋に川で生まれたアユはすぐに海へ下り、冬は海で過ごす。春になるとまた川に上り、夏は河床に付着している藻類を食べて大きく成長する。庄内川にも毎年名古屋港からアユが上ってくるが、庄内川本流には愛知県内だけでも落差 0.5 m を越える堰堤が 7 つある。堰堤は治水や利水を目的に設置されているが、アユをはじめ、水生生物が川の中を移動する際には障害となる。そこで堰堤には魚道（生物が通過するための通路）が設置されている。庄内川に上ってきたアユが初めに遭遇する大



小田井床止め（2016 年 6 月 27 日）

きな堰堤が小田井床止め（河口から 17.4 km）である。小田井床止めは落差が 1.9 m あり、魚道が 3 つ設置されている。一方、県内最上流にある 7 つ目の堰堤は玉野堰（河口から 40.7 km）で落差が 6 m もある。

これまでの調査でアユは玉野堰まで遡上していることが分かっている。また、玉野堰を越えて岐阜県の大治見まで遡上するアユがいることも確認されている。海から上ってきて堰堤にある魚道の一つ一つ通過していくアユの遡上能力とモチベーションの強さには驚かされる。とは言え、玉野堰付近まで遡上できるアユはごくわずかである。各堰堤の下で投網を打つとアユの数は小田井床止めより上流で激減することがよく分かる。原因は小田井床止めの魚道をうまく上れていないためだ、と以前から言われてきた。

小田井床止めでは例年 4 月初めにアユの遡上を確認することができる。投網に入るアユの数は 5 月下旬から 6 月初め頃にピークがあり、遡上してくるアユの量が多い年には投網 1 投当たり平均 10 個体以上捕れる日もある。魚道の出口（上流端）に定置網を設置してみるとアユが入ることから魚道を利用しているのは間違いない。しかし、堰堤の下にアユが増えると魚道を通過するアユも増えるかと言うとそうでもない。また、魚道の中を調査してみても留まっているアユはほとんどいない。つまり、アユは魚道の通過に苦労しているというよりも、魚道の入口（下流端）をうまく見つけられていないようだ。

アユは強い流れに向かって泳いでいくことから、魚道から出る水の勢いが弱いことや魚道入口付近が複雑な流れになっていることが魚道を見つけにくくしている一因と考えられる。また、下流から 2 つ目の堰である山西用水堰（河口から 19.2 km）についても調査を行ったが、堰直下にアユはいるものの、魚道を通過するアユは確認できなかった。山西用水堰の魚道も小田井床止めと同じく、魚道の入口が見つけにくい構造に問題があると考えられる。

3 つ目の堰である庄内用水頭首工（河口から 21.9 km）の直上流には製紙工場の排水が大量に流れ込んでおり、同頭首工から下流の水質は極めて悪い。庄内川に上ってきたアユは少なくとも同頭首工より上流へ行かなければ生息に適した環境で過ごすことはできな

いであろう。しかし、多くのアユが下流の2つの堰堤を越えられないことを考えると、同頭首工までたどり着けるアユはごくわずかと思われる。

3. 庄内川で生まれるアユ

川を上ったアユは秋になると今度は川を下り、河床の砂礫に産卵して一生を終える。堰堤は産卵に向かう親アユや生まれた仔魚が川を下る際にも障害となる。庄内川におけるアユの降河や産卵についてはまだ断片的な情報しかない。これまでに砂礫に産み付けられるアユの卵を探したこともあるが、小田井床止め直下流でわずかな卵を見つけたことしかない。また、孵化したアユの仔魚は夕暮れから夜間にかけて川を流れ下ることから、プランクトンネットを使って流下する仔魚の採捕調査も行った。仔魚数が最も多い時期は11月下旬であると推定できたが、7日間の調査で確認できた仔魚は合計しても100個体と極めて少なく、どのあたりで産卵しているのかも分からなかった。



アユの産着卵 (2019年11月18日 小田井床止め)

さらに、海域にいるアユを確認するために、庄内川の河口、藤前干潟、隣接する新川河口において冬にサーフネット（小型の地引網）を曳いてアユの採捕も試みた。調査した中では庄内川の河口で採捕されたアユが最も多かったが、それでも10回の調査で採捕できたのはわずか65個体であった。産卵場所や海域の生息場所についてはまだまだ調査が不足している。しかし、これまでの調査結果を見る限り、秋まで生き残って産卵するアユは極めて少なく、生まれる仔魚もほとんどいないのが現状のようである。



サーフネットを曳く (2019年2月19日 庄内川河口)

4. 庄内川への期待

名古屋港に流入する河川でアユが生息しているのは庄内川だけではない。新川、天白川、山崎川、堀川でもアユが確認されている。これらの河川の中で、アユの遡上量が最も多いのは、河川の規模から考えても庄内川であろう。しかし、遡上するだけで新たな命を生み出してないのであれば、アユがたくさん遡上していることを喜んでばかりはいられない。アユが住める川になるためには遡上するだけではなく、産卵し、生まれた仔魚が海にまた戻れる環境にすることが必要である。

これまでの調査で改善を要する点は見えてきたが、魚道などの構造物に私たちが直接手を加えたりすることできず、歯がゆい思いをすることが多々ある。それでも環境は改善しつつある。例えば庄内用水頭首工ではアユの遡上と降河を助けるため、堰堤のゲート開放操作が行われるようになった。また、2023年には小田井床止め魚道の改善に向けた試験的な改修作業が行われ、2025年には山西用水堰魚道についても一部の改修工事が行われる予定である。さらに、支流の矢田川では2013年～2024年に9基の魚道が新設された。どれもきれいにする会が国、県、市に粘り強く要望を続けてこなければ実現しなかったことである。大都市名古屋を流れ、大きな水害を起こしてきた庄内川では利水や治水が優先され、生き物にとっての環境保全は二の次にされてきた。きれいにする会のように水質汚濁や河川改修に対して物言う市民団体が存在する意味は大きい。きれいにする会の活動が今後も継続し、庄内川が真にアユが住める川になることを期待する。

庄内川の想い

池田 正明

私は子供の頃から庄内川の近くで育ちました。生き物大好き少年の私にとって、庄内川河畔は知的好奇心をくすぐる様々な出会いのあるフィールドでした。しかし、川面は洗剤で泡立ち、その下は陶土で濁った水が流れ、某製紙工場排水の悪臭が漂っており、川で釣れる魚は食べてみようとも思うことができない状態でした。しかしそれが都市を流れる川の普通の状態だと思っていました。

進学し、いつしか庄内川で遊ぶこともなくなってしまいましたが、自分に子供ができてから、また庄内川に親しむ機会が始まりました。清らかな流れとは程遠いものの、かつての濁水・汚水は随分おさまっており、多くの堰と機能性の乏しい魚道、夏場の高水温といった苦難にめげずアユやウナギが遡上するなど、水生生物が逞しく生きる姿がありました。

環境の改善には「矢田・庄内川をきれいにする会」など関係者の並々ならぬ努力があったのでしょうか、その時にはそんなことなど考えもしませんでした。子供たちが大きくなってからも、私の庄内川通いは続きました。サイクリングを兼ねて釣りや、動植物観察（動物ではキツネ、タヌキ、イタチ、やイノシシ等、鳥ではオオタカ、ノスリ、ミサゴといった猛禽類や、オシドリ等も見られます）、毎週末のように庄内川通いをするようになりました。

そんな私にとって転機となる出来事がありました。2010年9月のことです。春日井市玉野町で釣り上げたのは、特定外来種のアメリカナマズ（チャネルキャットフィッシュ）でした。関東の霞ヶ浦などでは自然繁殖し手が付けられない状態と聞いていましたが、まさかここまで棲息を広げていたとは驚きでした。早速、詳しくそうなところはないかとWebで検索し、問い合わせた先が「矢田・庄内川をきれいにする会」の原広報部長でした。未だ庄内川でアメリカナマズの採捕情報が無いことを教えていただき、ついでに入会のお誘いをいただいたのが「矢田・庄内川をきれいにする会」で活動するきっかけとなりました。幸いなことにその後庄内川でアメリカナマズが見つかったという話を聞きませんが、どこかで密かに繁殖しているかもしれませんね。



庄内川で釣れたアメリカナマズ

「水に流す」という言葉があります。過去の経緯を一切無かったことにして咎めないという意味で、その語源は汚れや邪悪を水の流れて清めることにあるようです。しかし、人の生活に近い水辺を見ると「水に流す」という言葉が全く別の意味になってしまっているのを感じます。自分の前にある要らない物は水に流してしまえば良いと思っている人が多いようです。改善されたとは言え、庄内川では工業廃水や生活排水、ゴミの不法廃棄、陶土鉱山からの濁水流入、手に余った飼育魚や外来亀の放流など、本来清らかに保たれるべき水の流れが不要物の排水路のように使われています。そして行政の定める水質基準が庄内川の水質改善を阻んでいることも「矢田・庄内川をきれいにする会」の活動を通じて知りました。自然の叡智をテーマとした万博、COP10やESDを開催し環境問題に敏感であるべきこの地域で、行政の基準によって水質改善が進まないのは矛盾していると言わざるを得ません。

庄内川は周辺住民をはじめとしたみんなのもの。庄内川が都会の憩いの場としての水辺になって欲しいと想っています。1955年頃までの庄内川は本当にきれいな水が流れ夏には水泳場ができたりそこで採れる魚介が食卓にのぼったりと本当に生活に身近な存在であったことを「矢田・庄内川をきれいにする会」で「庄内川の語り部〜次世代に伝えたい、きれいだったあの頃〜（2020年発行）」という冊子にまとめた際、多くの方から伺うことができました。この川が抱える多くの問題を解決するには、残念ながらまだまだ時間がかかりそうです。ですが、あきらめるわけにはいきません。会の発足から50周年という節目を迎える今、微力ながら活動を進め次世代へ繋げていこうと、改めて思うところです。

人が減って戻ってきた？生き物たち

河原 進

1. 魚のいない川

まだランドセルが大きく感じられた頃、雨が降れば水に水たまりが出来、電話はまだダイヤルを回していたあの時分、矢田川にでるとなによりヌルヌルとした溶き卵のようなものに覆われた石が川底一面に広がっていて生き物が棲んでいるとはあまり思えなかった。周りの子たちもあの川に生き物がいるなんて発想はなく、魚を捕るといえば志段味付近の庄内川やその向こうの高蔵寺。それか小幡緑地の緑ヶ池か見返り池、大森の二つ池といったところだった。なので「泳げる川、魚とりができる美しい故郷」という情景は矢田川にはなかった。中学に上がろうかという頃、矢田川にかかる橋の下にコイの尾がうねるのを確かに見た気がした。周りの子たちはそれは幻だといって信じなかったけれど、多くの子にとって矢田川は名東区と守山区の間の仕切りや野球をする場所以外の意味合いはなかったように思う。

2. 故郷の美しい自然などなかった

財テクなんて言葉が市民権を得た頃はもうブラックバスとブルーギルは一大勢力で、例えば工事前の緑ヶ池の堰堤のあたりに群れていた。当時はまだまだ開発に勢いがある時代、ちょっとした木立や流れが気になり次の年に見に行くと草が生い茂る宅地やすっかり護岸された姿に変わっている事が良くあった。まだ子供の僕には実感が沸かなかったけどこの国はゴルフ場やらリゾート開発に熱心で、犬猫以外の獣を動物園以外で見たことがない子供が普通だったと思う。自転車からバス電車と行動半径は広がるけれど、開発のスピードとそれは比例しているようで、どこへいってもどこか似たようなで出来立ての町がそこにあり、生き物の姿はそこになかった。生き物はテレビの中か消えゆく大自然の中に棲んでいて絶滅に瀕している、そんなイメージが一般的だった。

3. 少しづつ何かが増えていく

後からバブルが弾けたと大人たちが話していたあの時期、矢田川の橋から落差工の下の溜まりにコイが群れているのを見かけるようになった。橋の袂から

川を眺める人が目に付くことが多くなったのもこの時からで、コイが戻ってきた！と喜んでいた。当時はコイが外来種なんて思っても見なかったし。もう川底の白いヌルヌルも見かけなくなっていた。ノストラダムスやマルチメディアなんて言葉が一段落して、大人達が落日の日本社会の予兆に怯える頃にはナマズがルアー釣りで楽しめるほど増えていた。こちらも外来の説も流れていたけれど。そんな折、帰省した際の夕べ、矢田川に注ぐ小河川の辺で駆けていくイタチを見かけた。それから帰省するたびに何かを見かける。庄内川の河畔林でムクドリを追うチョウゲンボウ、声を張り上げるキジ。大地震に震えた年の夏に子供たちがカワウソだ！と騒いでいた正体であるヌートリア。闇夜に浮かんだしゃれこうべに震えたと思ったらアライグマの白い隈取りだったり、庭の果物を狙うハクビシン、瀬戸の廃屋の脇にいたタヌキ。その頃には矢田川の川面を眺める人も多くなりオイカワをフライで狙う人もいたりした。でもまあ自分の心にはシラハエという方がしっくり来る。ドラゴンズの終わらない宴が終わった頃、名古屋のこの地に戻ってきた。少子化人口減少の暗い予言が次々と実現する中、矢田川橋で友釣りでアユを掛けた記事を目にした。日本人の振る舞いが大人しくなるのと入れ替わりで生き物を目にすることが多くなったようにも思う。

4. 生き物が故郷に「戻ってきた？」

そしてコロナ後、新しい魚道が作られ瀬戸近くまで登る少ないアユがいる。でも少し郊外に出ると壊れたままの農道、増えていく廃屋。そして活力が無くなって久しいこの国。このあたりの郊外でも狐を見かける。宇宙船地球号なんて言葉も前にあったけど日本便は座席構成が様変わりしているようで人間の座席は減り空席を野生生物がもう一度座っている。昔なら河川が獣の通り道になると興奮していたが、あの夏、矢田川の公園でイノシシの足跡を見てそれに続く大捕物。昭和の時代はシンプルに自然を守ろうとの声が大部分だった。無論自然は守っていききたいが、人が減った今に即した向き合い方が新しく必要なのだろうと思う。

科学研究部を育ててくださりありがとうございました

平川 史子

1. 矢田川は通学路にあるのに知らない

2016年、当時顧問をしていた東邦高校科学研究部に横井君が入部してきました。「小学生のときは矢田川と隅除川が遊び場だった。小4の夏休みは、矢田川でカマツカを捕まえることに費やした。」という地元の少年です。

早速1年生5人と香流中学裏の河川敷へ。根固めブロックの上をぴょんぴょん飛んで右岸側へ渡らせられたのには閉口しましたが、ブロックの隙間にすごいスピードで泳ぎ抜けるオイカワの群れ。大都会にこんなに豊かな自然があるなんて！と率直に感動しました。隅除川では、100均で購入した釣り竿でブルーギルを釣りました。みんな、地元の川でこんな風に楽しめるとは思っていなかったようです。

当時部活で取り組んでいた透明標本のサンプルとして、生態系に悪影響を及ぼすとされるアメリカザリガニとブルーギルを採捕し、標本作成と環境保全の一石二鳥を決意しました。

2. 「矢田・庄内川をきれいにする会」に入会

せっかく矢田川に取り組むなら、釣りやガサガサで遊ぶだけではなく、川の歴史や自然保護の学習もさせたいと思っていたところ、タウン誌咲桜に矢田庄内川をきれいにする会主催の「川の健康診断」の情報があり、横井君他2名が参加しました！「アユがいた」「矢田川はブルーギルは殆どいない。カマツカいた」などとても楽しそう。すぐに本守さんにお電話して入会させていただきました。本守さん、小野さんからは、川や会の活動について直々にお話を伺うことができました。

矢田川がきれいになったのは、最近で、1975年以前は庄内川同様陶磁器生産のため白かったこと、水質防止法による排水規制や下水道整備ができて少しずつ改善されて今日の矢田川がある。そこには1975年発足の矢田・庄内川をきれいにする会の働きかけが大きかったなど。

名古屋という大都会を流れる矢田川環境は、会の先輩方をはじめとする市民の願いでできた奇跡なんだと思い知らされました。

3. 「矢田川の健康診断」に参加して

科学研究部は2016年から2019年まで毎年会のイベント「矢田川の健康診断」に参加しました。永田さん、鶴飼さん、溝口さんにはガサガサ、投網など教えていただき、池田さんからは川魚の見分け方など教わりました。2019年には生徒たちもスタッフとして水質調査のお手伝いさせていただきました。

参加者は近隣のお子さんファミリー、高校生、会社員といろいろ。小さいお子さんたちが博識で疲れ知らずで、頼もしいと思いました。お昼には会長奥様のカレーをいただき、参加者の皆さんは持参したテントでくつろいでみえました。またしても大都会の真ん中でこんなに洗練されたイベントを無料で体験できることに感動しました。



4. 最後に

私も横井君と出会わなかったら、矢田川にも庄内川にも関心を払わずに生きていたと思います。横井君のような子供たちがこれからも育ってくれたらいいなと心から思います。

最後ですが、会が制作した冊子「庄内川の語り部」素晴らしいです。これを読んだらちょっと前まで（1950年ですが）庄内川がいかにきれいだったかが、リアルにわかります。「泳いでいるときにアユが足をくすぐるほどたくさんいて、食べると香りがよかった。」「春日井一帯に川魚の料理旅館が並んでいた。」目指すべき豊かな姿があります。いろいろな人にお勧めしています。この本を思いながら、名古屋で生きていきたいです。

矢田・庄内川をきれいにする会活動 50 年に寄せて

OB 会員 水野 達彦

「矢田・庄内川をきれいにする会」に関わり始めたのは 40 年近く前からでしょうか、誰か知り合いに紹介されたのだと思います。「食べられない魚釣り大会」というのは新聞で読んで知っていました。

川をきれいにするなんてことは行政のやる仕事だなんて思っていたのですが、これを住民の側から活動を始めたという事に関心を持ちました。それも行政に要請したり、抗議したりすることではなく、地域の住民の人たちに現状を知ってもらうために自分達で川の調査をしたり、川に関心を持ってもらうためのいろいろな企画をしたりというところからです。

その中で立て看板の設置がありました。「川の汚れは 心の汚れ」というものです。普通だと「川を汚さないようにしましょう」とか「汚水を流さないで」とかになるのですが、ここは「川の汚れは 心の汚れ」だけです。これは汚れた川に無関心だったり、しょうがないとあきらめてしまったりすることが汚れてきた原因の一つではないかという問題の提起をしているのだと思いました。こういった運動のやり方は参加しやすいし、また楽しくもありました。

毎年の魚釣り大会は朝早くから会場の準備、運営、後片付けと忙しいけれど楽しい行事でした。

蛇足ですが、40 年前は早朝寒くてセーターにジャンパーと厚着をしていたものですが、ここ最近はセーターを着ることもなく、これが温暖化というものかなと変なところで納得しています。

ここから全く個人的な話になりますが、35・6 年ほど前「きれいにする会」と関係の深かった地域の名北福祉会という社会福祉法人が障がい者の働ける場所作りをしてるという話を宮田さんから聞いて、当時障がいを持った子どもの将来に不安を持っていた自分は「これだ!」とこちらにも関わるようになりました。また同じように「きれいにする会」と関係の深かった北医療生活協同組合の活動にも関わるようになっていきました。それによって本当にたくさんの人達と出会い、いろんな活動に参加し、充実した人生を送って来られたとありがたく思っています。

思えば「川の汚れは 心の汚れ」から始まったのかも知れません。

王子製紙春日井工場のパルプ排水・・・

OB 会員 本守 真人

1. パリ万博、セーヌ川には大腸菌が

2024 パリ・オリンピックはセーヌ川中心に開催された。開会式はここに船を並べて行われた。またトライアスロンの水泳もここで行われた。開催前、雨が降ってセーヌの水質が心配され、安心をアピールするため7月17日、アンヌ・イダルゴ＝パリ市長が100年前から遊泳禁止のセーヌ川を泳いで見せた。実はパリの下水は古い下水によくある合流式で降雨時は水質が悪くなる。実施は強行され選手は見てもならないものを見たし、嘔吐した選手もいた。

オリンピック向けに雨水滞水池を15億ドルもかけ整備してきて、BODはそれなりに良くなったと思われる。が、問題の本質は違ったのだ。大腸菌である。日本の水浴場は環境基準で大腸菌が1000MPN（今は300CFU）/100ml以下が必要だがそれを上回ることしばしばであった。大阪の道頓堀でさえ平均240MPNであった。私は思わずわが庄内川を調べた。最上流域嶺橋でなんと2021年値1400~49000MPN、2022年値35~1200CFUという高い値であった。多分上流での排水も原因であろう（2022年値多治見64~1200CFU）。

今は学校プールが完備されているが昔は川でよく泳いだものだ。今では川での大人の水難事故が絶えないので川は危険で子供は泳ぐものではないという教育がなされているとかいえないとか。先のトライアスロンのように走、泳など自然を相手の耐久競技はサバイバルの時代にこそ必要だろう。

2. 庄内川はきれいな川になった？

わが会は1975年、王子製紙春日井工場（以下単に王子製紙または春日井工場）の排水や下水道の未整備によるドロドロに汚れ切った庄内川の水をきれいにする運動から始めた。50年もかかったが近年は下水道の整備により水質BODは3mg/lに限りなく近づき、水質ランクは当初のE（BOD≤10）からDを経て、2020年環境基準のランク見直しで、水分橋下流もC（同≤5）になったばかり。

ちなみに庄内川水系では2022年の水質調査の結果はBOD75%値で庄内川は岐阜県多治見橋0.8mg/l、城嶺橋1.2、大留橋1.8、水分橋3.0、枇杷島橋

4.1、庄内新川橋1.2、矢田川中流宮下橋4.5、同下流天神橋2.8であった。

庄内川・矢田川が見た目にきれいになってからは「釣った魚が食える川」と「泳げる川」にしたいと運動を質的変換してきた。庄内川にも矢田川にも昭和50年代からアユが遡上してきているが、どれもクレヨンのような異臭がしてとても食せない。国・愛知県（以下県）の水質基準からみても最低ランクB（BOD≤3）にならないと鮎を食せる水産用水にならない。

名古屋市の独自の環境目標値を決める告示では庄内川の松川橋上流ランクB（BOD≤3）相当で「川に入って遊びが楽しめる（水浴はA（BOD≤2以上）」としているが、もう一方の水浴の基準の大腸菌数は前段のように全くクリアしていない。名古屋市は泳げる川・海を諦めているのか要件調査さえしていない。河村市長よ！パリを笑えないぞ。（東京のオリンピックも同じ問題があった。清流の国ニッポンではなかったんか。）

3. 王子製紙との交渉―改善は不可能か

上流と言う点で春日井工場のパルプ排水の問題がある。戦直後春日井市は旧陸軍工廠跡地へ同工場を誘致した。殆どのパルプ工場が海近くに立地しているが庄内川は河口から22キロ地点に立地し下流長区間に影響を及ぼしてきた。1973年の水質汚濁防止法制定以前に立地した。1952年6月から本格稼働するが春日井市と公害防止協定を結び排水などが規制された。名古屋市は下流の工業用水に関する規制だけを設けた。国の一般排水基準（COD、BOD≤120、SS≤150）に県が上乗せ（BOD≤70~100、COD≤40~120、SS≤40~120）をしている、本協定は例えばCOD≤60、BOD≤45、SS≤40であって県を上回る基準となっているが、下水道基準に及ばない、大いに不十分なものである。いずれもmg/lで日間平均。しかもこの数値は戦後一貫して不変であり、技術の進歩を勘案すれば許されない。現に春日井工場はこの緩い規制値のおかげで（一王子製紙はそうは言わない）、パルプの生産量を3倍にしても既定の活性汚泥処理施設により基準には堪え得たとのこと。

かつて見学の際の処理槽は2、3建てで、面積と費用をかければ改善は可能と感じたものである。

わが会は過去に春日井工場と水質浄化の談判を重ねた。最近でも同工場と数回にかけて30余項のQ&Aを重ねた。この際の回答では「当社は法律は守る、法律が厳しくなっても守るがそれが技術的に可能かどうかは言えない。」との1点張りであった。処理はほかに黒液を重油とともに燃やす処理を合わせているので、安価である水処理とのシェアの問題もある。この現状を質しても0回答であった。

水質汚濁防止法の成立は製紙排水問題も背景にあったように思う。その後公害対策基本法に組み込まれた際、環境は経済との調和という考えは放棄されたはずだが、ことパルプ排水に関してはその際規制値が強化されたとは聞いていない。県の上乗せ基準は地域の事情によって採用されるが、県は最初に行ったのみで後は不変で事実上協定を縛っている。国が大本の基準を強化しない限り、特段強化する必要を認めない、一事不再理と言うのが県の言い分だろう。これだけ上流にあって名古屋市ははじめ市民に愛されようとしている庄内川の特殊事情は配慮されないのか。春日井市には協定が基準より厳しいこともあって、これ以上協定の強化は名古屋市のためなる動機付けがある。県は責任を避ける形になっているので下流の困っている名古屋市が動く必要があろう。

わが会が春日井工場に対して「法律は最低の基準であって企業のメセナ活動(1990年経団連提唱した1%クラブ：経常利益の1%を社会に還元)または社会的責任CSRを果たして欲しい。」と要請しても、王子製紙は水質改善には努力をしている、また改善策も検討していると回答、しかしその内容や計画を尋ねると言葉を濁す。ときどき水質事故を起こすが改善とはそんな事故は起こさないようにするという意味なのか。王子製紙の環境報告を見ても近年は日本の配下工場全体の合計値しか公表しかしていない、それも大気中、あるいは河川に捨てている汚染物質は廃棄物の扱いをしていないので改善項目にすら挙がらない。前述のQ&Aで殊勝にも王子製紙が市民の水質要望値を聞いてきたので、せめて下水道並み※にと要望したが回答はない。※後半言及。

中国は上海地区南通市へ王子製紙本社が500億円を以て2012年に進出した。汚染水を揚子江や海域に出すとして猛烈な反対にあった。南通市は研究者を動員し今や世界の処理方法となっているMBR(膜分離活性汚泥法 Membrane Bioreactor)を採用し、

処理水は大半南通市の中水道に使っているようだ。処理量5万トン程度で水質はCODで10mg/lを確保しているようだが実態はよくわからない。日本の下水処理でもガイドラインができており、堺市の三宝処理場は60,000m³/日で実稼働を始め、27か所の下水処理場で試験的に実施している(名古屋市は1か所5,000m³/日)。世界市場では40億ドルを超えている。王子製紙は中国と合併事業を展開しているので名古屋市が春日井工場にその顛末を聞いても知らないの一点張りだそうだ。ここが成功しているのなら春日井工場も可能ではないかと言いたい。

4. 取水量・排水量は20万トン

庄内川の河川の水質からみるともっと重要なことが見えてくる。すなわち公共用市域である庄内川の取水量が問題である。製紙工場では一般に膨大な用水を必要とする、春日井工場の場合19万3,000m³/日だ。これをすべて庄内川の伏流水に依存している。同工場排水は水分橋直上流(A≒590km²)に入るが取水はすべてこの上流からである、すなわち水分橋下流は20万トンの清浄水がなくなるその代わりに同量の汚染水が入るというわけだ。水分橋上流の河川水の減水被害ばかりでなく下流は汚染水増水となる。日量20万トンと言えば毎秒2.23m³/sとなる、庄内川の基準点枇杷島橋(A=705km²)では低水流量、平水流量がそれぞれ7.53、10.14m³/sであるから±2.23m³/sは影響大である。用水原単位は工程によっては半減していると言われるなかで、この取水量は工場設立当初から占用水流量として不変なのである。わが会は疑問を持った。水処理に費用をかけずに薄めて放流しているのではないかと。工場内のシステムは監督官庁にしかわからない、その運用に至っては官庁でも分からないことが多いのではないかと。

10年位1度の水利権更新の際、監督官庁の国交省に質問したが法律に則ってきちんと審査しているとだけのあっけない回答。審査の経緯の公開請求が必要だった。水量の測定の実態もわかったものではない。水量と水質は関連するのだが両監督庁には連携があるのだろうか。長年の既定(特許と言う既得権)路線を進むばかりで見直しは行われぬ。

水質とともに伊勢湾総量規制が途中から加わった。わが会はこれに期待した。何せ春日井工場の総排水負荷量はBOD換算で2,800トン/年であるから13万人の都市に匹敵する

∴40/1000/1000×193000×365=2817トン/年、

$2817 \times 1000 / 58 / 1000 \times 365 = 133000$ 人

しかし 5 年ごとの見直し審議会に際し意見を述べてきたが、明らかになったことに計画汚濁負荷量は制度が始まったときの値が既得権として事実上認知されており、計画案を提出する王子製紙が自ら減じない限り減らないのだ、春日井工場でいえば海域向け COD で 11.7 トン/日。規制を受けるのは小さな工場、新規の工場ばかりで当然減少量は毎期ごくわずかであり、従って名古屋港、伊勢湾の水質は一向に改善されないのは当然であろう。国の指導？が入っている。

5. 市民・行政・企業の連携が原則？

わが会には運動の原則があつてそれは市民・行政・企業の 3 者が連携協力することである。しかし市民は価値観の多様性でまとまらず、企業はコスパの厳しい時代となつてとみに株主の主張を聞くようになり法律は最低限守ればよい—その法律も規制緩和へ改正する、行政は政治に支配されているそんな時代の中、おとなしい市民の要請など無視される、行政は政治におもねる、企業は政治を支援する、そんな構図がまかり通っている。市民の環境改善運動は気候変動対策と同じく大きな曲がり角に来ている。市民は政治に訴えなければならない。よくある三者を結ぶトライアングル、鼎立はその三者が具体的に直接話し合つて初めて成り立つ。それどころか民主主義＝市民>政治>行政>企業＝資本主義なる構造は今や逆向きになっている感じがする、もう一度押し返さなければならない。

春日井工場の主張に「庄内川の汚染の原因は何も当社だけではない、下水道の未整備もその一つだ」と。確かに整備が進んでいない昔はその通り、皆で庄内川を汚してきた。しかし下水道整備は進んできて、2022 年度末現在、名古屋市 99.4 (99.7) %、春日井市 69.4 (88.6) %、瀬戸市 68.8 (85.4) %、尾張旭市 86.8% (96.0) など、岐阜県は多治見市 95.9 (98.2) %、瑞浪市 76.4 (88.7) %、恵那市 60.2 (88.2) %、土岐市 84.4 (94.4) % となった今、春日井工場だけが取り残されつつある。() は下水道以外の汚水処理を含む値。将来の県の水質シミュレーションで下水道整備が 100% となっても同工場の排水がネックになって庄内川の BOD<3 がクリアできないとわかっている。庄内川が春日井工場の専用排水管かつ専用下水処理場となっていることがますます顕在化してきている。王子製紙さん、あなた

の主張、大丈夫ですか？

しかし名古屋市の下水道にも問題ないわけではない。すなわちパリと同様、合流式であることだ。庄内川には合流式の平時の処理量が凡そ 63 万トンある。全国 21 都市で暫定的な改善計画が 2023 年を目標に先行実施され、名古屋市ではほぼ完了している。しかしこれとて根本的解決ではなく、最終的には分流式にしなければならない。この見通しは全く立っていない。さらに問われれば下水道の処理しきれない残留 BOD 負荷がある。庄内川全体の下水では年間 1,472 トン（名古屋市 820 トン）であり、春日井工場の排水残負荷 2,817 トンを大いに下回っている。同工場の排水の BOD40 mg/l から下水並みに 20 以下にすると半減し下水の値と並ぶ。※

6. 魚が臭くて食えない。名古屋市と「異臭」調査

ここまでは水質が悪くてつまり環境基準がランク C ではアユが食えないという一般論であつた。「魚が食えない」という特論に入ろう。異臭である。下水道のカビ臭などを含めていろんな異臭物質がある。悪臭防止法に言う 4 物質については春日井工場、名古屋市の下水道に対しても排水地点の排水中濃度で規制されている。同工場は規制に合格している、名古屋市は今まで計測すらして来なかったがわが会の指摘で 1 年だけ計測したことがある。結果はクリアだが春日井工場の値よりもわずかに大きかった。わが会では名古屋市に継続調査とともに異臭物質原因調査を要請した。

市環境局は市内河川に一般化して庄内川における生物等の異臭調査を始めた。2020 年は 1 月にコイとヤマトシジミを試験的に、21 年は 9 月には本格的に水分橋上下流 5 地点でコイ、アユ、オイカワ、ボラ、ヤマトシジミを対象にした。アユなどは検査に十分な量の確保も厳しかった。悪臭物質はメチルメルカプタン、硫化水素、硫化メチル、二硫化メチルの硫黄酸化物 4 種を提案した。わが会が受託して採捕・運搬と合わせて現地で 3 人が試食し、味と臭いを調査した。即、環境科学調査センターへ運び込んで同センターではガスクロマトグラフィーで分析してもらった。

結果は臭いと思われた魚の大半にやはり硫黄酸化物が含まれていた。ただ河川水にはあまり含まれていなかった。名古屋市の公式見解は必ずしもそれが異臭の原因とは思われない、もっと詳しく調査をする必要があるとのこと。わが会は「本調査にはいく

つかの不整合もあり、これでは原因がわからない、川の魚は河川水を飲まないの、魚のエサを含めた経路調査をしてほしい、また悪臭の判定は主観的に差があるので専門家の臭い判定士に委託してほしい」などと要望した。名古屋市はこれは公害調査ではない、また同センターではそのような能力がない、また外部委託する予算もないと 22 年度は他の河川を含めて概略調査にとどめたようだ。

2022 年 11 月庄内川釣り大会食味テスト

食味	非常に おいしい	おい しい	ふつ う	まずい	食べ られない
アユ	1	2	0	3	2
シジミ	2	0	3	8	7
コイ	4	4	11	2	1
異臭	特に問題 ない	異臭が する	その 他		
アユ	3	4	0		
シジミ	4	16			
コイ	10	10	2		

よってついにわが会は名古屋市に 2022 年 9 月 5 日市条例 123 条第 1 項に基づき公害調査請求をして受理された。しかし回答は「前述の異臭調査をしているので行わない」とのこと。異臭調査は公害調査ではないと言ったではないか。ほかの市の代表として清須市にも請求したが県の指導により市民生活に影響極少として却下不受理となった。結局本悪臭は公害とは認定されなかったということか。漁協もないので市民の生業に関係ない、アユは食えないだけで食っても病気で死には至らないからか。文化は？

アユは河川によってその匂いが違うと言われる。違うのではなく庄内川はアユが食えないのだ。このようなクレヨンのような異臭は専門家なら物質が特定できるのではなかろうか。

「庄内川の語り部」刊行に際するヒアリングにより、戦後すぐ庄内川漁協が発足したが 2001 年には漁場育成の努力もむなしく解散せざるを得なかったと知った。これも庄内川だけか？わが会のメンバーは釣り師に呼びかけ、漁協結成の準備もしている。

わが会は創立 50 周年を迎えるが、小生としては皆さんに慰労ないしは祝福をしてもらいたくない。庄内川をきれい？にするに 50 年かかった。が、まだ釣った魚が、捕ったアユが臭くて食えない！泳げな

い！

漁協は解散、学校のプールはあるからと言って泳がせない。

運動としてこの 2 つ命題を放棄するならわが会の存続意義はない。ほかの一般的な河川の生態系保全は河川管理者国交省の内部目的である。

(庄内川は矢作川と同じく砂河川で上流でないとい桂藻の着く大きな礫はない。アユなら落差工に良い魚道を付置し上流遡上を助けてやること忘れてはならない。)

さて…

王子製紙春日井工場の排水はペーパーレス時代が到来して製紙業が廃業にでもならないと解決しないようだ。

合流式下水を分流式に改修するにはもう 50 年かかる。やらないかも知れない。

よく「100 年河清を待つ」という、庄内川は黄河ではないが、王子製紙工場以来 100 年先まで後 28 年である。孔子の一説に「水至清則無魚、人至察則無徒」とか、ホテルの棲める水質は BOD=3 mg/l ともいう。

しかし魚を食わない、泳がない川は川ではない。

その頃には魚の異臭はなくなるかも知れないし、泳ぐ川ともなろうが、温暖化により、もう魚も人もいない！かも。

「アユなど養殖で十分！」「川が怖い人はプールで泳げ。」あるいは「川で泳いでも大腸菌では死なない、昔を思い出してみよ。免疫をもっと鍛えろ！」などいろんな声が聞こえてくる。

さはさりながら…

環境基準のレベル A (アユ・泳げる) にしなきゃっ！と川ガキや河童は言うのです。



2021.9.3.11:22 高貝用水堰



でアユ 3 匹 (魚の異臭調査) (本稿は個人の見解で、誤りも含めて筆者に責任があります。)

矢田川のセットバック魚道は良い魚道？

OB 会員 本守 真人・河原 進

1. 矢田川の現状と課題

矢田川は一級水系庄内川の支川である。瀬戸市猿投山 629m を水源とし名古屋市の北で流入している。流域面積は 115 km²、延長は 23 km で下流宮前橋から下流が国土省、上流が愛知県の管理である。瀬戸市は江戸時代からせともの産地で燃料薪炭の採取により日本の三大禿地となった。明治の初め外国の技師アメリカ・ホフマンを招聘し砂防の工事に始まり、昭和初期の時局匡救事業により下流の流路付け替え工事とともに上流まで一次拡幅改修が行われた。戦前の航空写真を見ると河川敷一杯に複数の交互砂洲に乱流していた。ついで昭和 25 年から 35 年に庄内川から香流川合流点まで 7 km を床固と低水路が、平成 10 年まで引き続き低水路固定がなされた。昭和 32 年の洪水を最後に近年漸く落ち着いてきた。河道が安定し、広い高水敷の公園的利用が盛んとなっている。上流は山口川と称して山口ダム（全国第 0 号の河水統制ダム=多目的ダム）が魚止めの堰となっているが、さらに上流は海上の森、東大の赤津研究林と瀬戸川にはホフマンの森が展開している。

矢田川で残された課題は環境問題、すなわち①上流瀬戸市、尾張旭市の下水道整備の遅れ（2022 年度末瀬戸市：68.8%、尾張旭市 86.8%）による水質汚染である。現在の環境基準は下流 C、上流 D に対して水質は 2022 年値天神橋で BOD2.8 mg/l、大森橋 5.2、宮下橋 4.5 である。②魚類等の遡上降下障害では国土省所管区間で成願寺（将来存置）、米が瀬、無名、山田北の各床止めの 4 基（落差 0.5~1 m）、県区間で 31 基、計 35 基ある。県区間の内訳は千代田橋まで 1 基、瑞鳳橋までに 11 基（1.5~2m）、瀬戸川合流点まで 7 基、山口川堰堤まで 13 基である。これらは大半落差工ないし床止めであり、取水堰は少ない。③しかし矢田川河床は未だにキラと呼ばれた産廃が残っていて庄内川とともに砂河川である。④直線的護岸で水辺が固められており瀬と渚の形成が少なくさらには河床が安定して平均化、水温が高いなど、魚のハビタートとして不適当、魚種も少なくコイが優占している。

このように矢田川は水質も悪いが、河川の自然的

要素も少なく、きれいにすることと並行して近自然的にリフォームすることが求められている。下流の天井川区間はともかく瑞鳳橋あたりからの中上流は堤内地盤は高いので掘込み河川対応ができる。

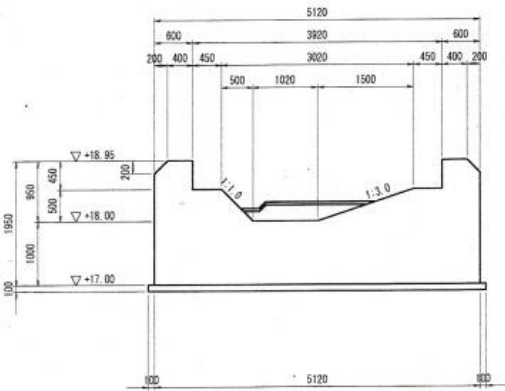
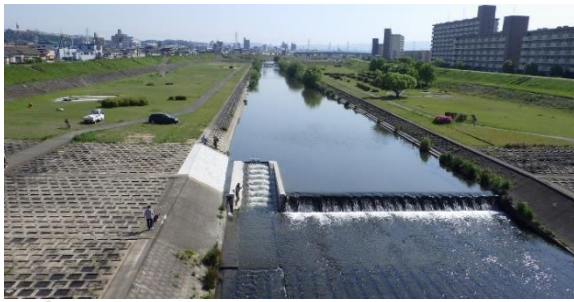
2. 矢田川の魚道設置の必要性

かつて尾張旭市新居ではウナギがとれたという、今でもかろうじてアユやウナギは採捕できる

矢田・庄内川をきれいにする会はアユ遡上 100 万匹作戦を行っており、2012 年に矢田川でも中流の 8 基の落差工に魚道の設置を要請した。県尾張建設事務所はこれを快諾し、翌年から毎年 1 基ずつ新設することとなった。11 年経過した今、宮下橋第 9 魚道まで整備済みである。このほかにこの間、西本地大橋下流の瀬戸川山口川合流点にある大きな落差工は将来計画を見越して全川幅のカスケード式魚道が、その下流に災害復旧で仮設のままであった矢板落差工が本格的な全断面魚道に改築された。

3. どんなタイプの魚道？

古くからあるタイプいわゆる階段式（正確にはプール式）がまず考えられるが、この欠陥は魚道の入り口が落差のかなり下流に突き出すので落差のすぐ下まで来た魚はその入り口を探せないことである。これを解決するために階段を折り返して入口を落差の下に持ってくるが行われる。矢田川ではセットバック、つまり落差工の上流に階段を、入口は落差工直下に持ってくるから魚は迷わずに階段に取りつくことができる優れたものである。魚道の一部が床止め本体となるので構造上頑丈にしなければならない。魚道は岸寄りにつくるが理想的には兩岸設置が望ましい。さらに今回の魚道にはもう一つの特長がある。それはプールの側壁が 1；3~1：1 の斜面になっていて非対称断面となりこれが流速の違いを与えて魚の凌げる流速を選ぶことができることである。現にプール断面を 3 スパン（岸側=1：3、中央、流心側 1：1）にわけ遡上調査をしてみると圧倒的に 13 のスパンから上ることが分かった。



魚道プール横断面図

4. 魚道の効果測定と機能評価

さて魚道の効果測定は管理者・施工者である県が行うのが本来であるが、

- ① わが会が要請したことであり、
- ② ②県環境局の

「あいち森と緑づくり環境活動・学習推進事業」において一水源の森の恵みを活用し生物多様性を実現しよう」と銘打って交付金を受ける。

- ③ 私たちの魚等の知識や取扱の専門的力の活用、
- ④ より確実な測定方法の研究など
- ⑤ 市民がこの調査に参加することによって矢田川に親しんでもらいひいては水質改善運動にも味方してもらおうとの魂胆？もあってわが会がしばらく担当することになった。第1号が2013年に完成、2014年から効果測定を始めた。

(1) 当初の3年はモンドリ網などの用具を準備しつつトラップの仕掛けを工夫しながらとにかく完成した魚道を対象に次々と調査をしていった。わが会の矢田川での市民参加の年中行事である5月の“魚を捕ろう”と10月の“川健康診断”を兼ねて、2014年：7回、15年：6回、16年：5回行った。

この結果は次項の2017年からの後半調査とともに別表を参照のこと。

この間県に要望をあげた、つまり設計協議をした

がその主なものを列挙すると、

2014：

- ① うなぎの遡上対策の研究、ヤナギ藻ロープ

2015：

- ② 流速が大きいので3月～11月の適切水位が得られるように魚道の地番高を5～10cm下げる
- ③ プール内の流れの乱れ、泡餅が見られる、①と合わせて流速計測定し、1.2m/s以下を確認すること
- ④ 下流の根固め護床工が魚の進入を阻害している撤去ないし水深確保のため据え直す
- ⑤ で下流側の護床工の撤去または据え直す。

2016：

- ⑥ 角落しの改善、コンクリート面の明度落とし、アバの取り付けフック、階段工、魚道近傍の深ぼれ対策

- ⑦ プール内三次元流速測定

2018：

- ⑧ 岸より側壁の転びを1：1に

2021：

- ⑨ 岸側にヤナギ藻ロープをフック穴に数条入れる。

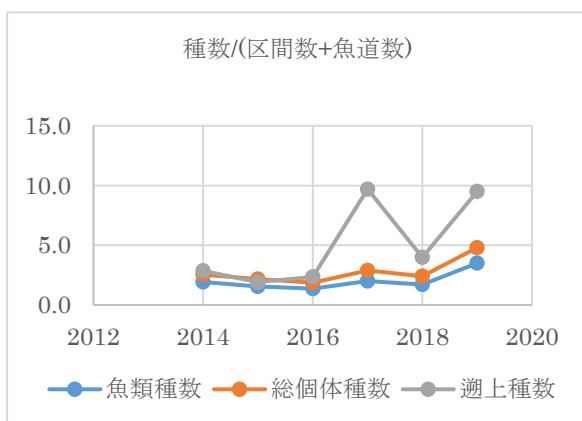
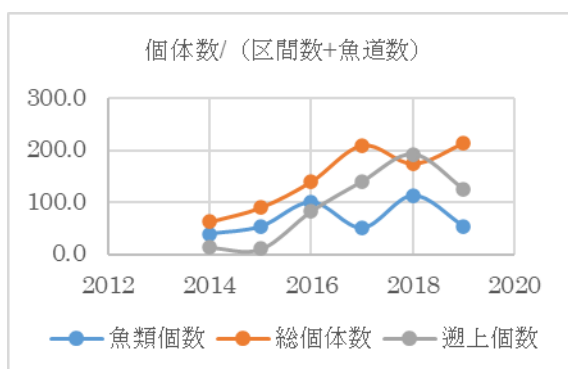
このほかわが会が工夫したことはモンドリ網・地獄、網のトラップ緊結法、上流側のアバ自作など。

2018年9月には急なる大雨でモンドリ網3基が流されうち1基は矢田川橋まで到達していた。

また調査区間の検討（対象魚道の下流、上流、上流

の落差工の上流の3区間が原則）を始め、たも網と投網による採捕・人工確認、水質調査、生物の同定・記録（毎回統一集計表）と市民向け講義、ゴミ拾いなども行った。

以下6年間を通して矢田川の魚道設置で魚相がどう変わったかを述べる。次の2つのグラフはともに魚道数例えば2とその上下流の調査区間数6計8当たりの個体数及び種数の変化である。遡上数はもちろん魚道数当たりである。



これら 26 回の調査を総括すると個体数は 1.5~4.3 倍に種数は 1.5~3.3 倍に増えている。因みに矢田川で出現した種は次表のとおりであった。

アユ	タ	コウライ	オイカワ	メダカ	コイ	ニゴイ	ナマズ	フナ	総個 体数	
	モロコ	モロコ								
71	94	22	4629	784	1349	20	19	60	11058	
ヨシ ノボリ	カマツカ	ドジョウ	ヌマ チサバ	モツゴ	マハゼ	スミ ウキゴリ	モクズ ガニ	ミナミ ヌマエビ	テナガ エビ	スジエビ
159	437	14	2	27	2	1	75	3212	364	497

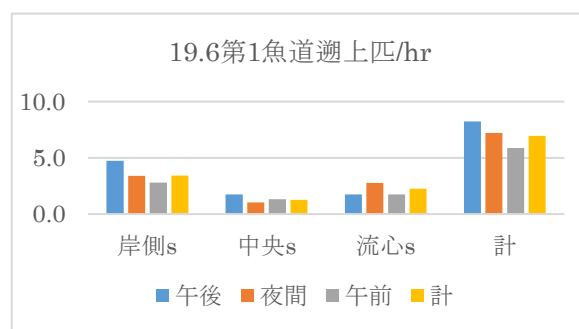
さらに魚道の機能的評価を次表にまとめた。

2016 年度 第 1~第 3 魚道

区分	堰下流	魚道遡上	堰上流
A	●	●	●
B	●	●	●
C	●	●	●
D			
E	●	●	●

A 大型小 B 型遊泳型、C 底生魚、D 匍匐・E 歩行遡上に分けて評価したが、いずれの魚道もウナギなど D グループに対応できなかった。何らかのアシストを付加するとよいと思われるが、実は 2016 年度以降この付近では我々はウナギを発見していない。

(2) また 2017 年からは新設の魚道対応と非対称断面を 3 つのスパンに分け、遡上数の多寡、遡上魚の種類及び午前、午後、夜間に分けた終日調査を行った。2017 年 : 3 回、18 年 : 3 回、19 年 : 2 回である。うち特別調査として全スパン・終日は 2017.6、2017.9、2018.10、2019.6 の 4 回である。その後も続けている。次表 2019.6 が第 1 魚道で下流側かつ香流川合流点直上流の代表的なもので、また早朝 5 時に改修・設置したケースである。これを見ると岸側は中央、流心側の合計相当遡上している。経時分布も割合均衡している。18.10 の第 4 魚道は午後の岸側スパンにオイカワが異常？に遡上したものでやや特異なケースである。



ここで象徴種であるアユに注目してみよう。

矢田川アユ採捕数		
年	月	匹
2014	5, 6, 7, 8	12
2015		12
2016	5	28
2017	5	10
2018	5, 9, 10	8
2019	5, 6	23

2019.6	アユトラップ分布	
午後	夜間	午前
6	2	13
左岸	中央	右岸
4	4	13

左表は区間、トラップ計のアユの年間採捕数で 16 年が最大である。

トラップには右表のように 2019. 6 のケースのように突進速度の大きいアユでも緩い速度を選考するようである。

このアユを会員が食したところ。クレヨンの臭いがしたというのは語り草になっている。

さて 2018 年コンサルがプール内の流速を調べたが、最大は 1.8m/s あった、少し大きい、またプールが小さくてその流速分布は 3 次元流速計でも判明しない。流れが乱れているどんな魚が魚道内のどんなルートでどのように遡上していくかは興味深いが本

調査では困難であろう。

魚道の流速が大きいのので 3 月～11 月の水位にみ
あう隔壁越流高を慎重に決定するよう希望したが基
本堰堤高に合わせているので、角落して高めに調整
したが、これは魚道の流速を管理するため維持管理
上重要なことであり、わが会は夏場（高め）と冬場
で角落しの枚数を代えることを進言している。

元来魚道の設計は学会が解散したほどで、困難で
ある。研究者の見解が違うこともある。また発注・
設計・施工者の技術力もまだまだである。完成後そ
の機能を評価して改善に努めるしかなかろう。

例えば矢田川上流西本地大橋の上流に先行施工し
た魚道は大きな石を用いたカスケード式となってい
るがいまだにその評価はできていない。下流魚道の
未整備と評価方法が不明である。石組みのうまいコ
ンサルが設計・監督をしたようだが、小生が見ると
魚窪池能力は十分だがそこへ至る流れに剥離が多い
のが難点に見える。

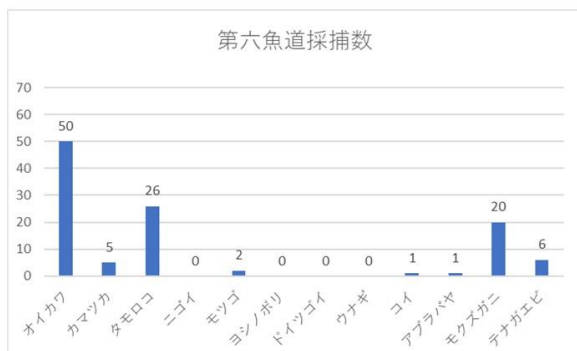
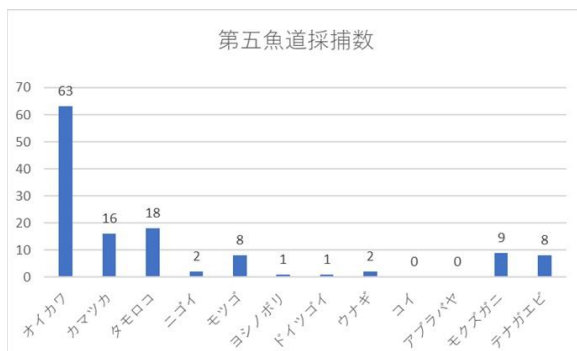
また一般に魚道の設計と言うと落差工だけに注目
するが魚道の入り口（下流側）に至るルートの上砂
堆積や護床工ブロックによる障害に配慮されていな
い。また魚が階段を上って行くとの誤解がある、魚
は階段を構成する石の間の流れの弱いところをスル
スルと登る（せせらぎ、一この場合流れの剥離はな
い方がよい）、魚窪池の深みを利用し推進力を得て
飛び上がるかどちら又は双方である。

(3) 2020 年以降の魚道設置と評価

①2020 年は大雨が続いており、延期が続いた後に
魚道調査は中止となった。だが魚道の建設は例年
通り実行されており、2021 年は計 2 箇所の魚道（第
5、6）において同時に魚道調査を行うこととなった。
特に第 6 魚道はこれまでにないカーブが中程にあり
それが魚類の遡上にどのような影響を与えるのか今
回の調査の検証事項の 1 つに上がっていた。実施に
あたりは、同時に 2 つの魚道の調査をおこなうに
あたり、トラップが不足し第 6 魚道の調査は通常 6
つ使用するがうち 4 つに相当する箇所を地獄網で代
用して調査を実施した。また通常夜間と昼間に分け
て漁獲を集計しているが、今回の魚道に関しては昼
夜まとめて 1 回の漁獲を集計することになった。



	第5魚道				第6魚道				両魚道計
種	左岸スパン	中央スパン	右岸スパン	計	左岸スパン	中央スパン	右岸スパン	計	
オイカワ	6	12	45	63	10	29	11	50	113
カマツカ	6	3	7	16	1	1	3	5	21
タモロコ	17		1	18	1	2	23	26	44
ニゴイ		1	1	2				0	2
モツゴ	8		8	16	2			2	10
ヨシノボリ	1		1	2				0	1
ドイトゴイ	1		1	2				0	1
ウナギ	2		2	4				0	2
コイ			0	0	1			1	1
アブラハヤ			0	0	1			1	1
モクスガニ	7		2	9		1	19	20	29
テナガエビ	8		8	16		0	6	6	14
捕獲数計	56	16	56	128	16	33	62	111	239
魚類計	41	16	54	111	16	32	37	85	196
甲殻類計	15	0	2	17	0	1	25	26	43



魚種別に遡上数を見ると第 5、6 ともにオイカワ
が最も多い。次に多いのはタモロコである。両魚道

においてこのタモロコの一番漁獲の多いスパンはテナガエビとモクズガニも一番漁獲が多いスパンである。付け加えると第5魚道においてタモロコがよく入った左岸スパンは漁獲種が一番多いスパンでありその中でも通し回遊魚であるウナギが漁獲されている。



魚道調査においてウナギが入ったのは初めてである。矢田川の魚道はオイカワがその個体数の多さから遡上対象とされているが、支川との接続を可能にするために魚道を設計する際にタモロコの臨界遊泳速度である3.5BL/sを参考にするのも成功のためには参考になるのではないだろうか？

③ 2022年天神川と矢田川の合流点の直上に第7魚道が設置された。それまでの魚道と同様の調査を実施している。ところが魚道直下の護床工下の川底が洗堀されて、護床工の下を水が流れてしまい魚の遡上が危ぶまれる中の調査実施となった。

魚類総匹数37 魚類種類数4 甲殻種類数0
7/23 16:00~7/24 07:00

	左岸			中央			右		
	匹数	体長(最大)	体長(最小)	匹数	体長(最大)	体長(最小)	匹数	体長(最大)	体長(最小)
カマツカ	1	6.5	-	1	5.3	-	2	11.2	9.6
オイカワ	4	8.5	7.2	2	9	-	8	10	8.4
コイ	-	-	-	-	-	-	-	-	-
タモロコ	7	7	5.3	2	5.6	5	3	6.5	5.3
カワムツ	1	8.2	-	-	-	-	-	-	-
カワヨシノボリ	-	-	-	-	-	-	-	-	-
計	13	-	-	5	-	-	13	-	-

7/24 07:30~7/24 11:45

	左岸			中央			右		
	匹数	体長(最大)	体長(最小)	匹数	体長(最大)	体長(最小)	匹数	体長(最大)	体長(最小)
カマツカ	-	-	-	-	-	-	-	-	-
オイカワ	4	5	3.8	1	10	-	-	-	-
コイ	-	-	-	-	-	-	-	-	-
タモロコ	-	-	-	-	-	-	1	5.5	-
カワムツ	-	-	-	-	-	-	-	-	-
カワヨシノボリ	-	-	-	-	-	-	-	-	-
計	4	-	-	1	-	-	1	-	-

結果は上記の通りである。2021年の同時期に実施した魚道調査と比較して少ない魚の遡上数、種数となっている。なお護床工の改善については県の担当者に申し入れ、改善の約束を頂いている。

④ 2022年からは既設魚道の改修という形で新設魚道が設置されている。2022年は魚の遡上を考慮して切り欠きが作られた落差工が過去に設置済みがあり、3段の落差を突き通すように左岸に今回セットアップ式の魚道が設置された。当初は既設の切り欠き箇所と新設魚道の遡上数の比較を検討していたが、既設切り欠き基部のコンクリートの状況からトラップの設置が困難なため新設魚道の遡上調査のみ

にとどめた。結果は以下の通り。

夜間遡上

	左岸スパン			中央スパン			右岸スパン			計
	匹	最大体長	最小体長	匹	最大体長	最小体長	匹	最大体長	最小体長	
オイカワ	60	3.2	10	3	9.2	3.2	25	3	-	88
モツゴ	3	4.2	3.2	1	5.1	-	0	-	-	4
タモロコ	3	7.5	5	0	-	-	0	-	-	3
カマツカ	1	-	-	1	6.5	-	2	7	5.5	4
コイ	1	67.0	-	0	-	-	0	-	-	1
ヨシノボリ	4	3.5	2.5	0	-	-	0	-	-	4
計	72	-	-	5	-	-	27	-	-	104
スジエビ	7	-	-	0	-	-	0	-	-	7
モクズガニ	1	-	-	0	-	-	0	-	-	1
計	80	-	-	5	-	-	27	-	-	112

昼間遡上

	左岸スパン			中央スパン			右岸スパン			計
	匹	最大体長	最小体長	匹	最大体長	最小体長	匹	最大体長	最小体長	
オイカワ	38	9.5	3.5	-	-	-	-	-	-	38
モツゴ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0
タモロコ	1	5.2	-	-	-	-	-	-	-	1
カマツカ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0
コイ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0
ヨシノボリ	4	3.2	2	-	-	-	-	-	-	4
計	43	-	-	0	-	-	0	-	-	43
スジエビ	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1
モクズガニ	-	-	-	-	-	-	1	2.7	-	1
計	44	-	-	0	-	-	1	-	-	45

遡上する魚はほぼオイカワで9割以上が仔魚であった。またほとんどが左岸スパンに集中しているが、これは魚道の流入部付近が洗堀されスパンが浮いてしまっていたことも関係していると思われる。この点については今後設置される魚道については改善されることである。

⑤ 次の第9魚道までは既設魚道が4つほど続く。尾張建設事務所の判断により宮下橋下の落差工が新設魚道設置対象として選定された第9魚道となる。第1魚道設置から数えて十余年。わが会の平均年齢は上り、アクティブなメンバーも減少した。そのため今年からは名城大学野生生物問題研究会を学生会員として迎えまた尾張建設事務所からも相当な人数の派遣を頂き3団体での共催という形での魚道調査実施となった。

罎引き上げ1回目 (7:30~8:30)

スパン	種名	種数	最大の体長(mm)	最小の体長(mm)
1	タモロコ	6	60	50
	アユ	2	67	65
	カマツカ	4	120	60
	カワヨシノボリ	3	36	34
	モクズガニ	3	14	13
2	タモロコ	5	54	46
	オイカワ	4	116	90
	ヌマエビ	1	30	
	モクズガニ	2	14	13
3	タモロコ	34	48	34
	カワヨシノボリ	5	40	34
	オイカワ	4	97	94
	カマツカ	2	73	64
	アブラハヤ	1	75	
	ヌマエビ	6	27	24
	テナガエビ	3	64	47
	スジエビ	1	43	
	モクズガニ	33	60	7

罎引き上げ2回目 (12:00~12:30)

スパン	種名	種数	最大の体長(mm)	最小の体長(mm)
1	モクズガニ	3	28	10
2	モクズガニ	3	15	13
3	カワヨシノボリ	2	38	35
	アユ	2	73	69
	タモロコ	2	55	39
	ヌマエビ	3	28	28
	モクズガニ	1	13	

結果は上記の通り。

魚類 6 種 甲殻類 4 種の遡上が確認でき通し回遊の 3 種 (アユ モクズガニ テナガエビ) も遡上している。特にアユの遡上の確認により、下流の既設魚道においても一定の設置効果は認められる。先だって実施した現地視察の結果から考えると瀬戸市内への遡上可能性も期待できるのかも知れない。これまでのオイカワが多数を占めていた調査結果と異なり今年は漁獲の 6 割程度をタモロコが占めていた。これについては周辺で採捕を行い生物相の確認が必要かと思われる。毎回話題に登る下流の護床工についても会からの提案により平板ブロックが採用され洗堀等は認められなかった。

各魚道の設置前に尾張建設事務所から図面を閲覧させていただき、魚の登り口には最低でも 15cm 程度の魚窪池を確保すること、呼び水の設定、スパンの長さや数についての意見を加えている。但し魚道については識者毎の意見があるので常に知識をアップデートさせて行きたい。

5. その他の 3 つのイベント

矢田川では魚道調査のほかに並行して次の 3 つの行事を行ってきた。いずれも市民のオープン参加でおこない、(1)、(2) では魚道調査を兼ね、その区間調査では大量動員による確度向上を狙った。同時に捕った魚を会の専門家が解説し市民の環境学習に資

した。参加者数は表のとおり。

参加者・人	魚捕ろう		健康診断		源流探訪	
s: スタッフ	s	市民	s	市民	s	市民
2014	11	29	14	26		
2015	17	71	15	22	6	12
2016	17	39	19	29		
2017	15	27	11	15	5	24
2018	18	36	15	13		
2019	9	102	20	53	5	17

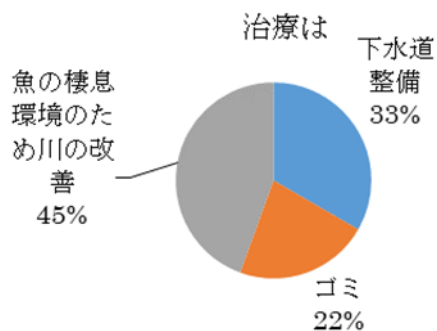
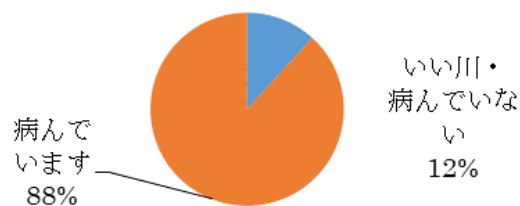
(1) 矢田川で魚を捕ろう！

川で魚を捕りたい市民親子向け、毎年 5 月

(2) 身近な水辺の再生と川の健康診断

下流や庄内川で行っていた行事でこの区間で再開、第 8 回~第 13 回、ほとんど第 1 魚道下流で実施。目の前の川を川の医者になったつもりで診断、カルテを書いてもらう (アンケート)。(第 12 回健康診断) この結果バープ工の提案に到る。

矢田川は病んでいる？



(3) 矢田川の水源の森を訪ねよう

矢田川の場合水源と言うと 2 つの意味がある。一つは瀬戸市の上水の水源になっており又瀬戸物の生産に欠かせない工業用水でもある。勿論下流の農業用水でもあり、浄化用水でもあった。しかし冒頭述べたように薪炭の取りすぎによる山の荒廃と土砂の生産、治水上の問題があった。さらに

下水道の整備遅れによる水質の悪化である、これらは上流にあるため影響は大きくなる。矢田川をきれいにし魚も棲む川にするため何をすればよいか市民にも学んでもらうためこの源流探訪を企画した。マイクロバスを借り上げ水源の山まで見学をするのである。県から交付される資金の本来的使用である。隔年で3回行って、各年によって若干異なるが見学コースを紹介しておこう。大曾根から赤津研究林まで80km。

- ① 小原橋セットバック魚道
- ② 尾張旭市西部・東部下酢処理場
- ③ 瀬戸川合流点のカスケード型魚道※
- ④ 瀬戸市西部下水処理場・水質テスト
- ⑤ 山口川水辺の緑の回廊・魚捕り
- ⑥ 山口堰堤(わが国初の多目的ダム)・魚捕
- ⑦ 屋戸橋で魚捕り・水生昆虫観察
- ⑧ 東大・赤津研究林・白藤川魚捕り
- ⑨ 瀬戸市の上水取水口・馬が城ダム
- ⑩ 瀬戸川の改修
- ⑪ 瀬戸のグランドキャニオン(陶土採掘跡)
- ⑫ ホフマンの砂防工事

大人は勉強、子供は魚捕りと言うわけである。バスの運転手確保、各施設での案内依頼、山口堰堤アクセスの伐開、タモの運搬、昼食会場などの準備が大変であった。大雨に遭遇した時もあった。



瀬戸川合流点のカスケード型魚道※

6. 川の健康診断からバープ工

前項Ⅰ.を受けてまずはこの単調な岸と平坦な河床、河川水の夏の温度上昇、河床材料の均一化をどうすれば治療できるか考えた。近自然工法も当時流行していたが、県内の河川は用地取得済の暫定改修済みであって近自然のためだけの手戻り再改修はありえない。従って可能な限り付加的工事による手直し＝リフォームで対応するのが妥当である。この一環としての魚道付置があり、バープ工がある。バープ工は通常河岸に洲を形成させるのが目的だが、これを利用すると瀬・淵の形成が期待される。適用可能かの判断は難しいが一応シミュレーションできる。

まずは勉強と、2018年10月、国・県、市民、会員24人集まり岐阜大の原田守啓先生に講義していただいた。19年2月県尾張建設事務所に試験的な設置要望をした。

これが県河川課に認められ、2020年“矢田川バープ工プロジェクト”が始まった。第1回検討会は10月現地調査、第2回は11月第9回「小さな自然再生」研修会を兼ね、全国的参加を得た。この際は原田先生の事前調査を経た矢田川特論の川の見方の講義と現地調査・議論が行われ、第3回は2021年3月会の立ち合いで第1号が施工された。会はその後の観察を続け、県も洲の形成や生き物調査をしている。3回ほど高水敷に乗る洪水があったがバープの先端部の深掘れは見られるものの洲の形成は軽微である。2023年?月会が魚に限り格子状に測点を設け投網による調査を行ったが、見事に中央滞でアユが2匹採捕された。2023年3月第2号が対岸に対称的に設置され、それ自体の効果の倍増及び今後の設計変更ないしは配置計画が期待されている。



バーブ工法の導入効果とりわけ河川地形や堆積物及び詳細な生物層の変化については県の報告書に譲るが、我々はバーブ工がつき場として機能しているかどうかという観点から簡便な調査を行った。



バーブの右岸左岸の上下流に一名ずつ配置し同時に投網を投げるという簡便な調査であったが、バー

ブ先端付近においてオイカワが入りつき場としての一定の役割を果たしていることはわかった。但し投網を投げる技量など計4地点でのばらつきも見受けられこの方法の成熟を待ちたい。

調査者の技量の差に左右されず客観的に検証可能なデータを取得するための方法を調べていたところ他のエリアに置いてはシュノーケルによる目視で魚類種及び個体数の把握を行っているという文献を見つけた。しかし遮蔽物のない浅い矢田川においてシュノーケルという手段が有効なのか検証がつかめない。代替案としてバーブ工周囲を5mメッシュに区切り、そこにアクションカメラを設置し動画を撮影した。他のメッシュと比較してバーブ工先端付近に魚（主にオイカワと思われる）が多いのがわかるが魚の動きが早すぎて数値化が難しい結果に終わった。今後は単位時間経過後に静止画像を取得し、一定のサイズ以上の魚類のみをカウントする方法に切り替えて行く予定である。



以上の結果も踏まえて、岐阜県揖斐川支流に桂川に設置済みのバーブ工を見学に向かったが、既に増水のために流失していた。バーブ工に限らず河川内に設置された人工物は変化が著しい、またその効果というものも設置後すぐに確認できるものではない。近視眼的な判断を避け適切な期間を置いて眺めていくことが必要なのではないだろうか？。

7.支川への遡上と小落差向け小枝式魚道

周知の通り、東アジアのモンスーン気候地域において下流域のコイ科ナマズ科の淡水魚は産卵に氾濫原及び水田を利用しており、その回復が急務であるとする。矢田川においては香流川を始め支川が14本存在しているが都市部の隅除川及び天神川の川岸には草がよく茂り増水時には水がそれに被っている。田畑との接続はないものの繁殖の代替地として候補に挙がるのではないだろうか？そうした考えのもと第5、6魚道調査に先立つ4月30日（氾濫発生時期よりは早い対象魚種の繁殖初期に当たる）に隅除

川及び天神川の矢田川接続部における落差工の上下流において採捕を行った。特に隅除川合流部においては矢田川には珍しく、止水と細い流れが連続しており、川岸の植生も比較的豊かな場所である。また様々な大きさの魚類を餌とする鳥類も飛来しそれを目当てとするバードウォッチャも目にする事ができる地である。結果は以下の通り。

隅除川

落差工下流

標準和名	合計	最大長(cm)	最小長(cm)
フナ属	1	10	
モツゴ	4	4	2.5
オイカワ	6	3.2	1.8
メダカ	2	2.3	2.3

落差工上流

標準和名	合計	最大長(cm)	最小長(cm)
カダヤシ	18	2.8	1.5
オイカワ	11	9.2	2.4
モツゴ	4	3.2	2.6
ゲンゴロウ	1	未計測	
コイ	2	目視	

天神川

天神川矢田川合流川落差工下流

標準和名	合計	最大長(cm)	最小長(cm)
オイカワ	7	5.5	4.2
カマツカ	1	10.6	2.4

落差工間

標準和名	合計	最大長(cm)	最小長(cm)
オイカワ	5	5.5	4.8
アユ	1	6.8	

落差工上流

標準和名	合計	最大長(cm)	最小長(cm)
オイカワ	72	5.4	2.1
モツゴ	2	3.9	3.5
タモロコ	1	5	
カマツカ	1	7.8	
ナマズ	1	目視	

調査の意図通り、落差工の直下でフナ、モツゴ、メダカが採捕されている。この3種については本川魚道調査において確認できていないもしくはごく少量のみ捕獲された種である。それらの種が繁殖活動を控えたこの時期に落差工によって遡上を阻まれていることになる。魚道をはじめとした手段により落差工上流へ接続させることにより魚類相を回復させることも可能ではないだろうか？但し魚道の設置に

は多大な労力及び公金の投入が必要となる。昨今の経済事情及び市民の生活環境を鑑みると多大な支出を実施するのは一般市民の理解を得られるであろうか？そこで我々は比較的資金及び労力が小さなスケールに留まる小技式魚道の研究及び提案活動に一層注力することとなった。また期せずして天神川の落差工の上流でアユが採捕されている。既に第六魚道も完成していた時期でもあり、我々としても第六魚道の有用性を魚道調査実施前に確認することができた形となった。

8. 今後の課題

(1) 魚道の設置は着々と進んでいる。矢田川が魚道のメッカになるかもしれない。しかし魚の棲息環境は整っていない。下流国交省の区間の魚道の問題も残っており、のみならず河岸、河床の単調化による瀬・淵の貧困、河床材料の砂と均一化など未解決な課題が山積みである。水質環境基準で上流が今だしDであるなど水質問題も解決の見通しが立っていない。注意したいのは魚道設置の超先行である。庄内川とともにコイのメッカと言われる都市河川である。

(2) 2021年の冬期、尾張河川事務所の有志とともに既設魚道の現地確認をおこなった。設置されたのが20年以上前のことであり、魚道の設計方針等現在との隔たりも感じられた。およそ海上の森に至るまでの様々なタイプの魚道及び落差工を新規魚道の設置もしくは改良の必要性の有無をスコアリングしていくのであるが、既設魚道には水泡の発生による魚の迷走、流水の魚道からの剥離による底生魚の遡上困難、下流に設置された護床工川底乱れによる遡上困難が共通して見て取れた、また短い間隔で設置されている落差工等も存在している。改善箇所等を協議したが、会としては前述の小技式魚道の採用を提案する良い場面ともなった。

(3) 現在矢田川には9つのセットバック式新設魚道とカスケード式を始めとする全断面魚道が新設され魚類をはじめとする水棲生物の上下流の移動については相当程度改善されたといえる。ただ川底川岸の地形が単調な矢田川において魚が休息、隠匿できる場所及び交尾産卵できる場所が不足している。

瀬戸川・山口川の合流点では治水のため工事が予定されていた2021年、魚類相の把握のために採捕をわが会単独で行った。

上流採捕			
-	匹数	体長（最大）	体長（最小）
オイカワ	81	9.6	4.5
ヨシノボリ類	25	4.5	3
アブラハヤ	15	4.5	2.5
タモロコ	12	6	3.5
カマツカ	4	10	9
計	137	-	-

下流採捕			
-	匹数	体長（最大）	体長（最小）
カダヤシ	80	4.0	2.0
オイカワ	45	5.2	5.2
ヨシノボリ類	15	3.7	2.5
タモロコ	4	4.5	-
計	144	-	-

処理場からの温かい処理水や礫の大きさにより上流下流で差が出ている。中でも上流でアブラハヤがよく採捕されておりこの地点より下流部とはちがった特色になっている。

この地点から上流の菱野橋に至るまで3箇所に落差工が存在し、いずれも魚道の設置が予定されている。これまでの魚道設置場所と異なり川幅も狭まり浅い地域が続く。また落差が大きいため止む無くこれまでのセットバック式の魚道とは異なる突き出し方の魚道が設置されることになった。セットバック式の利点は失われるがこれまで先人が培ってきたノウハウ、またこれまで取り組んできた既設魚道での経験知を投入してよい魚道を目指していくのだが、その中の新しい試みで安価な小枝式魚道が採用される見通しである。こちらを成功させ気軽に設置できる魚道としてのモデルケースとなれば望外の喜びである。これについては全国各地に設置されている小枝式魚道を実際に見学し事例を吸収して行きたい。

今後“魚を上流に登らせるための魚道” いわば縦の魚道から“魚を繁殖地につなげるための魚道” 横の魚道への変換が必要なのか。それともバープ工等のように川自身のリフォームをすすめていくのか、関連した知見をバランスよく配合して勧めていければと考えている。

(4) わが会は2021年に矢田川の河川協力団体に認定された。3年間の活動計画の提出のみで、誠に緩い規制で市民団体としては都合が良い。逆に諸要請はもとより、工事前の協議を受けたり、魚道などの設計協議に参加させてもらったりしながら、見合いに本来県が実施すべき魚道調査などを協力するなど良い関係にある。

矢田・庄内川をきれいにする会と国交省の50年の歩み

国土交通省 中部地方整備局
庄内川河川事務所 奥中智行

1. はじめに

「矢田・庄内川をきれいにする会」の50年の歩みに心から敬意を表するとともに、記念誌の編纂にあたり、ひとことご挨拶申し上げます。

2. 国交省と協働した歩み

昭和44年に当事務所が庄内川の河川管理者となって今年で55年、現在も庄内川・矢田川の整備や維持管理等について地域の皆様の協力を頂きながら進めているところです。

庄内川は都市部に残された貴重な自然空間であり、河川の美化・愛護活動に取り組む地域団体が多い河川です。中でも、昭和49年に設立された矢田・庄内川をきれいにする会との協働の歴史は特に古く、丹羽前会長や宮田会長をはじめ会員の皆様の活動の功績は大きく、他の団体の模範になるべき取組です。

3. 活動の功績について

庄内川は昔、陶磁器原料や工場排水の流入で白濁するほど水質が悪化していた時代（写真1）がありました。これに対し、河川浄化・環境整備の活動を続けてこられた「矢田・庄内川をきれいにする会」の功績が平成21年に認められ、斉藤鉄夫環境大臣（現国土交通大臣）から宮田会長ご夫妻に「日本水大賞・環境大臣賞」の表彰状が贈呈されています。



写真1：昭和46年（左） 令和元年（右）の庄内川

また、河川の生物の専門家の立場からも行政に助言を頂いています。令和6年2月より実施した矢田川の堆積土砂撤去工事にあたり、魚類の生息場や退避場所の保全など、工事に伴う環境・生物への配慮の観点について助言等を頂き、工事内容に反映させ

ることができました。重ねて御礼申し上げます。

4. 印象深かったエピソード

所長着任以降、多くのイベントに参加しましたが、特に印象深かったのは魚釣り大会のエピソードです。

昭和51年当時、水質が悪かった庄内川では「食べられない魚釣り大会」の名称で釣り大会を開始。その後も水質の改善とともに大会名も変更（表1）しながら、50年経過した今も大会は続いています。

現在は水質がC類型にまで改善し、釣ったコイや鮎を皆で食べて品評（写真2）しており、中には「美味しい」に一票を投じる子供もいたようです。（私はコイは「普通」、鮎は「美味しい」に投票しました。）

表1：大会名の変遷

- ・1976 食べられない魚釣り大会
- ・1980 いつかは食べられる魚釣り大会
- ・2015 まだまだ食べられない魚釣り大会
- ・2023 釣ってみよう食べてみよう魚釣り大会



写真2：令和5年大会で魚を試食中の筆者（右）

5. おわりに

近年、河川環境や利活用に対する行政へのニーズは大きく変化しており、ネイチャーポジティブなど世界的な潮流もあり、流域全体で取り組む機運が高まりつつあります。国交省としても庄内川の防災・減災の対策を進めるとともに環境の保全・創出、地域活性化の取組を地元の皆様と協働して進めてまいりたいと思いますので、引き続き宜しくお願い致します。

『川の汚れは心の汚れ』

庄内川河川事務所 坂口賢二

きれいにする会と私

私が前回（平成 27 年度）庄内川河川事務所地域連携グループに赴任した際は NPO 土岐川・庄内川サポートセンター担当として、清須市みずとぴあを中心とした活動（りばーぴあ）のマネジメント等が主な仕事でしたので、きれいにする会との直接的な交流はあまりなく、あくまでも NPO と我々が実施する総合学習に講師として来てくれる方々（間野氏や池田氏）の出身母体という程度の認識でした。

今回は、総合学習支援全般と 11 の河川協力団体全部を担当することとなりましたので、久しぶりに宮田会長ご夫妻と話をし、「きれいにする会が今年で 50 周年」と聞きそれならば何かしなくてはという思いできれいにする会の活動に参加するとともに、「手づくり郷土賞」への応募を行いました。

1. 「川の汚れは心の汚れ」看板の再設置



写真 1 庄内川橋右岸看板再設置 (R6/7/28)

これは、きれいにする会と私で庄内川橋右岸に看板を再設置した際の記念写真です。

それにしても、改めて思うのは「川の汚れは心の汚れ」という言葉の痛快さですね。そもそも市民団体を構成し主張を繰り広げる人は一般的に「自分は当事者や加害者ではなく被害者である」という前提に立って行動することが多いように思います。

ところがきれいにする会では、庄内川水系を汚す全ての汚染源に対しきれいで快適な生活環境を取り戻し、次代へ引きつぐことを目的として、河川の水を使用する全ての市民に対してメッセージを投げかけ

ていることが素晴らしいと思います。

2. 総合学習支援での「きれいにする会」の影響

今まで国が実施する総合学習支援では透視度計を子供たちに覗かせ水道水に比べ川の水は濁っているということを説明していましたが、これでは子供にその理由や意味が全く伝わらないと考え（途中からですが）紙芝居を用意し、「町にある川はなぜ汚いのか」「誰が汚しているのか」「自然な川の水はどういうものなのか」について説明することにしました。これは完全に「きれいにする会」の影響を受けて始めたものです。



写真 2 総合学習支援・紙芝居（説明者は筆者）

工場排水も悪いけど私たちが出す家庭排水も伊勢湾を汚している。水をできるだけ汚さないように！というメッセージを紙芝居を使って子供たちに投げかけると、今までよりも強いリアクションを得られるようになりましたし、確実に効果が出ていると思います。今後も継続していきたいですね。

3. 「きれいにする会」の今後

団体が活動 50 年っていうのはとんでもないことですが、やはり不安なのは今後の動向ですね。各種活動には高校生や大学生が多く協力してくれているようですし、我々もできる限りの協力は継続していくつもりですが、組織を動かすことができる方々が今後どのくらい残ってくれるのかそのあたりを注視させていただきたいですね。

勿論、小職が庄内川河川事務所にいる間は、最大限バックアップさせていただくつもりではいます。

一級河川矢田川における魚道整備について

愛知県尾張建設事務所 河川整備課 上原 弘嗣

1. はじめに

矢田・庄内川をきれいにする会の半世紀にわたる活動に心から敬意を表します。

恐縮ではありますが、この場をお借りして、本県が管理する一級河川矢田川における魚道整備を紹介させていただきます。

2. 矢田川について

矢田川は、昭和 44 年に一級河川に指定され、昭和 48 年には、庄内川合流点から宮前橋までの約 7 km が直轄管理となり、本県は宮前橋より上流約 15.8 km の区間を管理しています。

河川整備は、瑞鳳橋までの市民に親しまれる公園的整備や、瑞鳳橋から上流は、自然豊かな様相となるよう「多自然型川づくり」による整備を行ってきました。現在は、「安全・安心で、自然を育み、人をむすぶ川づくり」を基本理念として、瀬戸川合流点下流や国道 363 号上流区間で河道整備を進めているところです。



矢田川(小原橋下流付近)

3. 魚道整備について

矢田川の魚道整備は、平成 24 年に改修済み区間を含め、魚類等の遡上を妨げている 18 か所の落差工を抽出し、下流から順に詳細調査を行い、現地の状況を踏まえた魚道整備を行っています。

これまで、平成 25 年度に行った香流川合流付近の第 1 魚道を皮切りに、令和 5 年度には、宮下橋下流の第 9 魚道までの整備を完了しております。

魚道整備については、矢田・庄内川をきれいにする会の皆様にも関心を持っていただいております。今後も引き続き、矢田川の自然を育むための魚道整備をしっかりと進めてまいります。

最後になりますが、矢田川・庄内川をきれいにする会の 50 周年、まことにおめでとうございます。



第 8 魚道(瑞鳳橋下流)

整備済み魚道 箇所図



記号	呼称	場 所	位置
①	第 1 魚道	香流川合流点上流	右岸
②	第 2 魚道	小原橋下流	右岸
③	第 3 魚道	小原橋上流	右岸
④	第 4 魚道	隅除川合流点下流	左岸
⑤	第 5 魚道	国道 302 号橋梁下流	左岸
⑥	第 6 魚道	大森橋下流	右岸
⑦	第 7 魚道	天神川合流点上流	左岸
⑧	第 8 魚道	瑞宝橋下流	左岸
⑨	第 9 魚道	宮下橋下流	右岸

矢田・庄内川をきれいにする会 50 周年に寄せて

名古屋市 環境局長 小林 靖弘

このたび、矢田・庄内川をきれいにする会が 50 周年を迎えられましたこと、これまでの数々のご活躍に敬意を表し、心よりお祝い申し上げます。

本市では、2050 年の環境都市ビジョン「土・水・緑・風が復活し、あらゆる生命が輝くまち」の実現に向けて、4つの環境都市像「健康安全都市」「循環型都市」「自然共生都市」「低炭素都市」の実現を図ることとしております。現行の第4次名古屋市環境基本計画では、SDGs の理念である「包摂性」「参加型」「統合性」もふまえ、2030 年のまちの姿として、「パートナーシップで創る快適な都市環境と自然が調和したまち」を掲げております。

貴会におかれましては、庄内川での保全活動の実施や環境学習行事における講師、水環境に関する市民モニタリングへの参加、なごや生物多様性保全活動協議会への参画、環境デーなごや中央行事への出展など、様々な取り組みにご尽力いただいているところ です。

こうした貴会の活動は、まさに SDGs の理念や、本市の環境都市ビジョンに合致するものです。川や生きものに関する専門知識や経験、熱意あふれる講義等、市役所のみでは到底実現できないものであり、多大なるお力添えに感謝申し上げます。

矢田川と庄内川は、名古屋市を流れる主要な河川であり、都市化の進んだ市域に残された貴重な自然空間です。また、河川敷には緑地や公園、グラウンドなどが設けられ、多くの市民が散策やスポーツを楽しんでおり、市民にとって大切な財産となっています。

矢田川も庄内川も、以前から比べるとずいぶんきれいになりましたが、さらに泳げるくらいの水質にしていきたいと考えております。そのためには、市民のみなさんの熱意が必要であり、もっと庄内川の水環境に関心を持っていただけるよう、今後とも貴会と一緒に取り組んでいければ幸いです。

かつて、魚釣りや川遊びなどの場であった矢田川や庄内川を知る方々が設立され、この地域の人々にきれいな川とともにある生活を再び、という思いで続けて来られた貴会の活動により、今日の名古屋に

多くの種を蒔いていただきました。その種が、これからも豊かに実り、水とともにある魅力的な名古屋へとつながっていくこと、そして、貴会のますますのご発展並びに皆様のご健康とご多幸を祈念いたしまして、お祝いの言葉とさせていただきます。



令和 6 年 8 月 3 日「庄内川の水環境を学ぼう」
（名古屋市主催）での活動の様子

矢田・庄内川をきれいにする会と名城大学附属高等学校の協働について

名城大学附属高等学校 教諭 三輪 温子

1. 経緯

2006年から本校総合学科での授業展開の中で庄内川アダプトに参加しており、その関係で、名城大学の副学長を務められた原彰先生（矢田庄内川をきれいにする会元広報部長）から矢田・庄内川をきれいにする会を紹介して頂き、本校とのつながりができた。2011年、私は立ち上げて間がない自然科学部で庄内川を活用した活動ができないかと考えており、総合学科から紹介を受け、それ以降現在に至るまで協働事業を展開させて頂いている。

2. 名城大学附属高等学校自然科学部について

本校は庄内川枇杷島橋下流の左岸にあり、校舎全体の半数の教室から庄内川を見ることができる。2006年より現在まで、文部科学省スーパーサイエンスハイスクール (SSH) に認定され、科学人材の育成に力を入れている。

自然科学部は私と吉川教諭が2007年に立ち上げ、今年で創部18年目となる。立ち上げ初期は20名程度の部員で活動していたが、現在は200名を超える生徒が在籍しており、これは全校生徒の1割を超える。

現在は5つの活動班（飼育、化学、骨、天文、数理）に分かれて活動しており、庄内川に関連した活動をしているのは、飼育班（主に生態調査）、化学班（主に水質調査）、骨班（主に標本作成）の3班である。

3. 今まで継続している協働事業

(1) 投網講習会

アユ遡上調査を兼ねて、毎年春に、投網講習会を実施している。



投網講習会の様子

(2) 藤前干潟二枚貝調査

庄内川が海に流出する藤前干潟で、二枚貝の調査を行っている。年によりばらつきはあるが、ハマグリや大粒のヤマトシジミを採取し、汁とシジミの身について食味試験も行っている。



二枚貝調査の様子

4. 協働事業から発展した独自展開

(1) 生き物調査、水質調査

2011年～2015年頃、きれいにする会と協働で、魚の採集方法や同定方法を教えて頂いた。また、水質調査も協働で実施した。その後は本校の卒業生や生徒間で教えあうことで知識を増やし、部員が同定できるようになってきたため、本校で独自に展開し、現在は生態調査と水質調査を毎月実施している。

生物多様性センターまつりや三河湾大感謝祭などでのブース発表時には、庄内川の調査結果をポスターにて発表し、広く市民に伝える活動をしている。



庄内川生態調査のポスター

(2) ごみ調査

2013 年より、庄内川の河川内清掃活動を実施している。それに伴い、ごみの種類を調べるごみ調査も実施している。



清掃活動の様子



ごみの分別、調査の様子

(3) 骨格標本作製

生態調査時に死んだ魚や、特定外来種として殺した魚、庄内川で捕獲されたヌートリア（清須市より譲渡）を透明標本や骨格標本にして保管し、活動発表会の際には展示している。



(上) ヌートリアの仮剥製と
頭部の骨格標本

オイカワ（左）とマハゼ（右）の透明標本

協働事業の中で思い出に残る活動

私が今までの協働事業のなかで最も思い出に残る活動は、2013年度に実施した庄内川のいかだ下りである。この活動は、いかだを作るところから参加させていただき、旗を作り、川下りをしながら庄内川の水質改善を訴えることを目的とした活動であった。竹を組み、実際にいかだに乗って日頃活動している庄内川を下るという経験は生徒にとっても私にも、

今後とも忘れることはない貴重な経験となった。部活動だけでもやってみたいが、安全面を考えるとなかなか踏み出せない。



いかだ下りの様子

協働事業を通じて得たもの

庄内川をよく知ることができるようになり、活動手法を教えて頂いたことは、我々の財産である。川を見るだけであった我々が、五感で川を観察できるようになったことに対して、感謝している。

しかし、それよりももっと大きな財産となったことは、環境活動に携わる卒業生をたくさん輩出できていることである。庄内川での生態調査をはじめとして、藤前干潟や生物多様性センターでの調査、その他イベントに出展すると、必ずと言っていいほど卒業生が活躍しており、顧問として活躍を嬉しく思うだけでなく、在校生に説明やアドバイスをしてくれるので、非常に頼もしい。

ここ数年、特に卒業生の活躍が目覚ましく、その大きな要因となっているのが、この協働事業だと考えている。事業内容もちろんだが、「大人が仕事以外で、こんなにも川を大切に思っていて、楽しく懸命に活動している」その姿こそが、彼らの将来像になり、環境を守る活動の大切さを痛感し魅力を感じているのだと思う。学校では教えられない、机上の空論ではない生きた学習ができる、非常に良い経験を生徒に提供できるこの活動には、感謝しかない。

自然科学部を立ち上げてからの18年間だけで考えても、自然環境は大幅に変化している。夏の気温が異常に高くなり、例えば藤前干潟での二枚貝調査は夏季以外の時期で行わないと命の危険が伴うようになった。この面だけ捉えても目覚ましく変化しているこの社会で、五感を使って探究するこの協働事業は、生徒たちにとって非常に有益であることは間違いない。今後も、環境活動に従事する卒業生が多く輩出され、よりよい未来の創生に尽力することを期待したい。

祝辞

経政会 会長 木村 学

平素は格別のご高配を賜り厚く御礼申し上げます。

このたび、貴会が設立50周年を迎えられたことを心よりお祝い申し上げます。

昭和49年、貴会結成以来、歴代役員の方々並びに会員の皆様のたゆみないご努力の下、50年の長きにわたり矢田川、庄内川の河川浄化に尽力され、名古屋市や河川流域の環境保護に大きく貢献してこられましたことに、深く敬意を表します。

貴会は、「川の汚れは心の汚れ」をスローガンとし、看板設置による活動をはじめ、定期的に魚類の生息状況の調査や魚の生息や移動を妨げる汚水や魚道の改善を企業や行政に提言するほか、河川敷の桜植樹やビオトープ作り、小学校での講演やマスコミ出演により、長年にわたり尽力をされてきました。

これらの行動が実を結び、平成21年、第11回日本水大賞 環境大臣賞を受賞されました。

日本水大賞は、安全な水、きれいな水、おいしい水にあふれる21世紀の日本と地球を目指し、水循環系の健全化に寄与することを目的とし、秋篠宮文仁親王殿下を名誉総裁とし、各分野の有識者を委員とする日本水大賞委員会が主催、国土交通省、関係各省庁、各関係機関が後援しています。

このような素晴らしい賞を受賞されたのも、皆さまの並々ならぬ平素の活動の賜物だと思います。

50年という年月のご精進を経て今日のご繁栄を収められましたことは 弊会の目標とするところでございます。

貴会の皆様におかれましても、この50周年を機に宮田会長はじめ会員の皆様が一層結束を強め、益々活発に活動を展開されますことと、関係者の皆様方のご健勝を祈念いたしまして、お祝いのご挨拶とさせていただきます。

祝辞

経政会会員各位

矢田・庄内川をきれいにする会、50周年おめでとうございます。

私も経政会とのご縁もあり様々なイベントで交流させていただきありがとうございます。

矢田・庄内川をきれいにする会の理念を我々も受け継ぎ次世代へ継承できればと思います。

今後ともよろしくお願いします。

経政会 筆頭副会長 上山義之

会設立50周年、誠におめでとうございます。

半世紀という長い期間の活動には想像を超える大変なご苦勞があったかと思いますが、その活動があったからこそ現在の矢田・庄内川の環境改善に繋がっているのだと思います。

次の半世紀へ向け、貴会の更なる発展をお祈り申し上げます。

経政会 事務局長 曾山辰実

この度は会設立50周年誠におめでとうございます。半世紀にわたる活動により、汚染された川を鮎が帰ってくるまでにした功績に心より敬意を表します。

経政会 事業委員長 瀬口洋一

矢田・庄内川をきれいにする会、50周年おめでとうございます。

参加させていただいた際、投網の使い方から、川に入りガサガサで小魚やエビ・カニを取ったり、水質調査を行ったりと、大人もさることながら次世代を担う子どもたちにも興味を持ってもらえる活動内容で、とても楽しく川に触れることができました。次の世代にも繋ぐべく、今後ともよろしくお願いいたします。

経政会 広報委員長 小林哲也

矢田・庄内川をきれいにする会、設立 50 周年おめでとうございます。

私ども経政会も、これまでのご縁に深く感謝し、ともに豊かな自然環境を次代へ伝えていきたいと願っております。

今後とも末永いお付き合いをどうぞよろしくお願い申し上げます。

経政会 グループ長 藤本高好

矢田・庄内川をきれいにする会設立 50 周年、誠におめでとうございます。

半世紀にわたり、矢田川・庄内川の環境改善にご尽力され、周辺環境の改善においても重要な役割を担ってられました。

深く敬意を表するとともに改めて感謝を申し上げます。

経政会 グループ長 天野剛

矢田・庄内川をきれいにする会の皆様
設立 50 周年誠におめでとうございます！

私ども活動を見習い、自然を畏敬親愛し、地球人として自覚を持ち環境の保全と美化に貢献したいと思います。

今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

経政会 グループ長 横井茂

矢田・庄内川をきれいにする会と名古屋港を考える会

元住民に親しまれる名古屋港を考える会 事務局長 柿内賢治

私が矢田・庄内川をきれいにする会と初めて会ったのは1980年に、住民に親しまれる名古屋港を考える会を立ち上げてすぐでした。

1979年に名古屋市役所、水道局、名古屋港管理組合などに働く職員で作る労働組合、自治労連名古屋ブロック協議会が、主催した「住民に親しまれる名古屋港を考えるシンポジウム」の会場が初代会長の丹羽秀吉さんと、事務局長だった宮田照由さんとの出会いでした。

その後、そのシンポジウムでいろいろな方から出されたご意見を実現するにはそれをいつも取り上げ運動していく団体が必要だということで、「住民に親しまれる名古屋港を考える会（会長：中田実名古屋大学教授、事務局長：岡田全弘港職労書記長）」が結成され、矢田・庄内川をきれいにする会」からも役員に入ってもらい会同士のお付き合いが始まりました。

名古屋港管理組合から名古屋港水族館構想が出されてきたとき、建物の中のきれいな水槽を泳ぐ魚たちを見るのもいいが、名古屋港そのものをきれいにしてそこに泳ぐ魚たちを船から見たり、そこで採った魚を調理して提供するレストランができたりしたらいいなあというような「夢」を描きました。

それ以来、毎年行う名古屋港を考えるシンポジウムには宮田さんをはじめ多くの会員の皆さんに参加していただきました。一番の思い出は、辻敦夫さんが進めていた藤前干潟を守る運動との共同です。

これは、名古屋港の藤前干潟を名古屋市から出るごみを岐阜県多治見市の処分場で処理できなくなったからそこに捨てて港湾施設と公園を作ろうという計画が持ち上がった時、私たちや矢田・庄内川をきれいにする会の皆さん、愛知の健康と環境をまもれ！一斉行動実行委員会の皆さんと一緒に埋め立て反対行動をして、断念させたのです。

矢田・庄内川をきれいにする会の終点が庄内川河口に広がる藤前干潟であり、「住民に親しまれる名古屋港を考える会」が進める名古屋港をきれいにし多くの魚や貝が生息するようにしようとする運動の出発点の私たちとの接点があったのです。

又私たちは、矢田・庄内川をきれいにする会が主催する取り組み（食べられるかもしれない魚釣り大会）などにも、参加したり、協賛したりしました。

その後、毎年開催した「住民に親しまれる名古屋港を考えるシンポジウム」や「住民の命と健康を守れ！一斉行動」、又矢田・庄内川をきれいにする会の主催する様々な行事で一緒しました。

その会長の宮田照由さんとは、今NPO土岐川・庄内川サポートセンターで役員として一緒にやっていますが、これも何かの縁なのだと思います。

矢田・庄内川をきれいにする会50周年のお祝いに代えて

NPO 土岐川・庄内川サポートセンター 理事 浅野 和広

矢田・庄内川きれいにする会、設立50周年おめでとうございます、長年の活動、いろいろな出来事があったかと思いますが、各界に影響を与えてきたことは確かです、今後も引き続き、川の環境はもとより地域の課題解決のため邁進していただきたいと思っています。

さて、私からは貴会特に宮田ご夫妻との思い出をつづりながら、お祝いの言葉に変えたいと思います。

もう20年も前、平成15年4月私は就職で名古屋を出てからはじめて故郷に戻り庄内川河川事務所に赴任しました。当時、国土交通省は平成9年の河川法の大改正により地域とのかかわりを非常に重要視していた頃で、自分の立場で地元のいわゆる市民といわれる方々との接点ができるのか大変不安でした。そんな中、流域ネットワークの皆さんがすでに事務所との付き合いがあることを知り、月一回は会合があることがわかりました。是非その会合参加して自分の気持ちをお話ししたいと思っていたところ、すぐにその機会を設けてもらいました。宮田会長にお会いし病気のあとではありましたが、その熱意は十分伝わってきました。

そこからすべてが始まり、河口と源流と交流、堀川の活動との連携、流域ネットワークでの独自の活動の開始、特に皆さんと源流から河口まですべて自分の足で歩いたことを今でも思い出します。

そんな中でいずれは事務所を離れなければならないことがわかっていたため、将来につながるような活動を皆さんと一緒にできないか思い、持続的な市民活動が続けられるような機能は無責任だと思われるかもしれませんがみずとびあと NPO に託しました。

川ナビ、アダプト、交流会など市民活動を支える NPO、さらには、川守のいなくなった庄内川での環境漁業設立へのトライ。宮田会長のなんでも TRY（当

時、私も Let's begin と言ってましたが）しよ うという姿勢、それに加え奥さんの行動力、またそれについていく会員の皆さん……。素晴らしいと思いました。

さて、お祝いの言葉であえて書くことではないと思いますが、一つだけ気になっていることがあります。私が子供のころ、守山の母の実家に行くたびに嗅いだ悪臭のことです。今ではにおわなくなりましたが、庄内川の下流部の流れにはいまだに健在です。50年が経過し社会は大きく変わり、科学が飛躍的に発展した中で、今も変わらないことがあることは残念です、宮田会長・きれいにする会が多分最も力を入れてこられたことだと思います。今後も期待し……。

最後に、50年という節目ではありますが、この素晴らしい活動が、将来に向けて、さらに発展できることを心からお祈り申し上げます、私も地元に戻りましたので、微力ながらお手伝いしていきたいと思っています。

活動は「明るく、楽しく、美しく」

NPO 土岐川庄・内川サポートセンター 及川 理

矢田・庄内川をきれいにする会との出会い

かつて川ガキだった私は、名古屋港近郊で「川で遊び、川で学ぶ」こどもエコクラブ活動をしていた。

庄内川全区間踏破プロジェクトを通じ 2007 年 NPO サポートセンターに入会し連携するきれいにする会を知った。2009 年に回遊性魚類の生息調査で魚道不備による遡上阻害の現状を突き止め、課題と改善事項を整理¹⁾し、調査結果に基づき魚道の整備・新設に取り組む。「アユ遡上 100 万匹大作戦」を標榜し、推し進める会に感銘を受けた。会への初参加が玉野堰堤上流でのアユ汲み上げ放流で、作業を目の当たりにし会の庄内川への熱い念いに目を見張った。

採取した滞留アユにイラストマーでマーキングし放流動態調査を手始めにアユやウナギなど水生生物の生態、河川環境整備、水質浄化対策、市民・企業・行政・他団体との協働など多くを見聞、体験した。

1. 心に残る取り組みを振り返る

1) 本当にきれいだった庄内川

2020 年に発刊した「庄内川の語り部～次代に伝えたい、きれいだったあの頃～」では、泳げるきれいな庄内川を確認できた。川と関わる生活・文化があり、生活に欠かせない庄内川がイメージ出来るようになり、きれいな庄内川を取り戻したいとの想いがより強くなった。

2) 低学年の子どもたちとの川の生き物採捕

矢田川健康診断では定置網やガサガサで魚道効果を検証し、水質を調べ清掃活動を実施。一般参加の子ども達のガサガサを担当することが多い私は、タモと足の使い方を説明し実際に、採捕してみせる。簡単に生き物が捕れるのを見て子ども達もトライするも、はじめは上手くいかない。コツをつかむとヌマエビやメダカなど小魚を捕まえ大ハシャギする。

次こそ大きい魚をと息巻いて精力的にタモをまさぐる姿がたくましい。これが原体験となり川が好きな、川で遊ぶ「川ガキ復活」につながって欲しい思いながら子どもたちと接した。捕れた生き物の説明に耳を傾ける子どもにやり甲斐を感じた。生き物との触れあい後は、会長夫人の特製カレーをおいしそう

に食べる姿に、ほっこりする楽しい取り組みだった。



手作りアユヤナ体験で落ちてきたオイカワを手づかみし、満足するエコクラブの子どもたち(2011 年矢田川健康診断)

3) ユニークな取り組み

- ・ウナギ遡上アシスト(魚道に支援ブラシ、ヤナギモ)
- ・シラスウナギ遡上調査で遡上を確認
- ・庄内川でアユの流下仔魚調査で仔魚を確認
- ・アユやヤマトシジミの食味を指標とした水質評価

4) キャッチフレーズが面白い

- ① 「庄内川水系にアユ遡上 100 万匹大作戦」
*都市河川におけるド迫力標語にあっばれ
- ② 「川の汚れにも負けず、堰の落差にも負けず、夏の暑さにも負けぬ丈夫な鮎が庄内川では育っています」*庄内川天然アユ友釣り副題。
- ③ 「食べられない魚釣り大会」「50 年経っても食べない魚釣り大会」*庄内川の今を伝えるインパクトのある釣り大会の副題の数々

2. きれいにする会との出会いに感謝

きれいにする会での 10 余年の活動を通じ、多くの事を楽しく学ばせていただき感謝している。

目標達成に向け、躍進を遠方より祈念している。

1) 矢田・庄内川をきれいにする会活動 35 周年～日本水大賞 環境大臣賞受賞記念～会員報告「庄内川水系における天然アユの生息状況」～100 万匹のアユが川と海を自由に行き交う清流を目指して～ 佐久間元成

志段味ビオトープにおける矢田・庄内川をきれいにする会の功績

土岐川・庄内川流域ネットワーク事務局長 大村 博厚

土岐川・庄内川流域ネットワークは中流域に位置する志段味ビオトープの整備活動と夏、春年2回の「志段味ビオトープであそぼう」の取り組みの中に、2011年9月20日の台風15号による志段味地区の浸水被害を教訓に学ぶ流域治水と、自然資源を生かした体験型の環境学習を行っている。

志段味ビオトープであそぼう

令和6年の夏の開催は台風接近のため中止となったが、夏と春の2回志段味ビオトープの魅力発信のために行ってきた「志段味ビオトープであそぼう」も38回を数える。土岐川・庄内川流域ネットワークの一員である矢田・庄内川をきれいにする会の皆様にはこれまで流しそうめん、餅つき、ガサガサ・水生生物調査やトイレのレンタルなど多大なるご尽力をいただき感謝申し上げます。

過去の様子から一部を紹介します。



ガサガサ・水生生物調査（夏）

今でも夏の一番人気。

庄内川支流の野添川に入ってガサガサをします。
捕まえた生き物にみんな興味津々。



ソーメン流し（夏）・餅つき（春）



整備活動の様子

最後に

土岐川・庄内川水系のあるべき河川環境について、市民団体及び個人が集い情報交換や交流を進め、流域の行政や企業とも連携しながら三位一体となって信頼関係を構築し親水空間の創造を協働していくことを望みます。

30 年来の友人で有る宮田さんへ

河村 亨

私と宮田さんとの出会いは 30 年前に宮田さんが建設業をしておられた時に営業的にも、施工のお手伝いもして頂いた事から始まりました。

宮田さんはいつも穏やかで、気さくに接して頂きました。又、お互いに大の日本酒好きで若いころは 2 人でよく深夜まで飲んだものでした。宮田さんが病気になり大変心配しましたが懸命の努力、リハビリで見事に復活され我が事のように嬉しく思っています。今は年に数回 お酒が烏龍茶に変わりましたが、奥様も交え食事会を楽しんでいます。是非、長生きをしてほしいと願っています。

そんな中で宮田さんから矢田・庄内川をきれいにする会の事や環境についての考え方をお聞きしました。宮田さんの活動にける情熱や次世代の子供達へ少しでも良い状態で繋げていこうとする姿にはいつも感銘しています。

私共もほんの少しですが釣り大会のプール作り等でお手伝いをさせていただきますが、是非矢田・庄内川をきれいにする会の活動が今後もさらに活発となり、地域に愛される活動が続いていく事を祈念しています。衷心より宮田夫妻のこの活動にける情熱的な思いに敬意を表します。

庄内川での、いつかのお話です。

梶田 光太郎

いつだったか、小野天下さんに、庄内川で釣りの大会があるから参加しないかとお誘いを受けました。

小野氏との出会いは、堀川の浄化に私が少し参加している時、庄内川で川の環境を守っているのと同じ目標だから、紹介してほしいということからでした。

私も紹介上付いて行きましたがその後は、私の方が堀川の浄化に深く関わってしまうという、そのつもりではない結果でした。が、それをきっかけに、小野さんからは水質改善に効果的なビオトープの仕組みや水生植物の紹介などのお話をいただいていた。大阪の大学や名古屋大学にもその方面の研究している先生とも合わせていただきました。その研究熱心さや取り組みには正直驚き、感心至極。

研究発表にも誘われ参加もさせていただきました。私も、興味があったのでいろいろとお話を聞くよう

になり、冒頭の魚釣り大会につながるのです。

ちょうど釣りに、もぞもぞ興味を持ち始めたころで「是非！」と勢いよく快諾。しかし道具も何もないのでという貸し出しありということで、身一つで参加できました。会場に着くなり、小野さんが笑顔でお出迎え頂き、貸していただいた道具を手に意気揚々と川べりに「いざ、出陣！」

小学生ぐらいの子が数人、先に始めていました。私は、大人として「危ないから気を付けてねー」と一応役目を果たし目指す鯉の所在を確かめに川べりへ接近。少し崖になっていて危険を感じながら、川面を覗き込んだ。鯉が「いたー」と思った瞬間、川の中へ、ズルズルドボン。結構抵抗したのにそのまま、どこも引っかけらず胸まで滑り込んでしまった。それも、さっき注意した子どもたちの目の前で。でもそこは大人、滑り落ちて胸までつかったくせに何食わぬ顔をして、実は必死で脱出。なんとも言えない心境で、場所替え。次に選んだところは、もちろん滑り込みそうにない所。糸を垂らしいよいよ戦闘開始。数分後なんと目指す鯉をゲット。それが本日より一番！で、優勝。気持ちはうれしいはずですが複雑。小野さんに一連の事を話すと、「怪我無かった。大丈夫。無事でよかった！」ということは無く、ひたすら笑いこけるという天真爛漫さに、何となく自分も笑えて癒され、そこでやっといういい日に思えました。と、いつだったかの出来事でした。いまでは、とても良い小野さんと川とのある日の思い出です。

矢田川と庄内川と 60 年の思い出

名古屋市上飯田柴山釣り具店 柴山忠光

柴山釣具店は 1964 年に開業し、それ以前から庄内川は、遊漁料が必要でした。遊漁券の販売を任せられ、皆さんに、買っていただきました。秋になれば投網も許可されました。このころは、水がきれいでした。

それから年を追うごとに、よごれていきました。瀬戸物の粘土や汚染水のよごれです。1970 年代に、矢田・庄内川をきれいにする会が発足し 50 年のご努力で、どんどん水がきれいになりました。今年もアユがあちこちでたくさんみかけました。矢田・庄内川鮎釣り大会やバーベキューなどができるようになるのも夢でもないようです。もう少しの頑張りで夢でなく現実に。

庄内川まつり魚釣り大会に寄せて

渡辺 文夫

私は87歳になる老人です。上飯田東町に住んでいます。

此の方、庄内川釣り大会には63才の頃より参加させて頂いております。日頃釣り馴れた川ですが、11月という川の中では冬の始まりです。

此の方庄内川と矢田川では7月～9月頃と比較すると釣果が大変落ちるのです。瀬では全く釣れません。少し深めのゆるい流れのところで釣れています。

毎年の大雨や台風の洪水で川床の流れの様子が変わります。自分に合ったポイントを見つけて楽しく釣りをしてください。尚、釣り餌は紅サシやヨモギ虫が良い様です。



渡辺文夫さん



毛ばり仕掛け

庄内川釣り大会の思い出

川口 久志

まずは、五十回大会おめでとうございます。

私は小学生の頃、お父さんに連れられこの大会に参加しました。初めて参加したのに、シラハエの部で優勝したことを覚えています。

この釣り大会が楽しみで毎年のように参加しています。中学生になり、友達と参加するようになり楽しい思い出がいっぱいです。大きなコイを検寸所に持って行くときのワクワク感がたまりません。



結婚し子供ができ、じいじ、自分、子供と参加したこともあります。自分が朝早く場所取りをして、じいじが子供を連れて来て一緒に釣りを楽しみました。今となっては、自分の孫と、釣り大会を楽しむようになり、息子と孫と一緒に釣り大会を楽しんでいます。

私にとって、庄内川釣り大会は、年に一度の大イベントとなっています。親子四世代にわたり楽しませてくれて、これからも庄内川を守って綺麗にして、釣り大会が続くことを願っています。

皆さんも、庄内川を、綺麗に保てるようにごみのポイ捨ては絶対にしないよう、皆で庄内川を、守って行きましょう。



メッセージ

ソン・コマージュ

関東人の私は不覚にも矢田川・庄内川の存在を知らなかった。

魚も難渋する川の汚染を憂い半世紀にも及び活動を続けた宮田照由氏及びその関係者は称賛に値する。

<川>

なぜ、さすらうのか、この私にもよく判らない。

とある町中の橋の上に立って

悠久に流れる川を視（み）る。

川は沈黙のうちに、ただ流れる。

川よ！

私は、お前のように大きな心が欲しい。

苦しみや悩みを押し流してしまえるような…。

ああ、なんと人が純粋なままに生きることの

難しさよ。

この果てしない宿命と闘（たたか）いながら

生きてゆくのだろうか…

自らに尋（たず）ねる。

矢田・庄内川をきれいにする会の活動に ご協力いただきました皆様への感謝

矢田・庄内川は活動 50 年を迎えることができましたが、これも一重に多くの企業様、団体様、個人様のご支援の賜物でございます。ここにお名前を記載しまして深甚の感謝を申し上げます。

ご支援いただきました団体様、企業様のお名前（順不同）

アサヒビール株式会社名古屋工場
久光製薬株式会社
経政会
北区医療生活協同組合北病院
TUCHIYA 株式会社
名古屋釣具商組合柴山釣具店
株式会社愛研
FISHING 游 名古屋北店
NPO 土岐川・庄内川サポートセンター
王子製紙株式会社春日井工場
清溪流釣りクラブ山彦会
住民に親しまれる名古屋港を考える会
株式会社平田工業
株式会社オビタス
幸村米穀株式会社
水野電機工事
（株）豊造園
中京食材株式会社
国土交通省中部地方整備局庄内川河川事務所
公益財団法人 河川財団
中部地域づくり協会
名古屋市職員労働組合
名古屋市水道労働組合
愛知県あいち森と緑づくり事業、愛知県尾張建設事務所
名古屋市秘書課（表彰盾）、名古屋市環境局、名古屋市緑政土木局
名城大学付属高校自然科学部
東邦高等学校科学研究部
中部大学

なお、個人様につきましてはお名前を記載しておりませんが、様々な種類の活動やイベントへのご参加、励ましのお言葉、ご支援など本当に多数の皆様方にご支援をいただきました。有難うございました。

(資料)

矢田・庄内川をきれいにする会表彰および感謝状等受理の記録

年月日	種別	表彰者	お名前
昭和 53 年 5 月 14 日	感謝状	名古屋市長	本山 政雄
平成 2 年 7 月 14 日	感謝状	名古屋市長	西尾 武喜
平成 12 年 3 月 14 日	感謝状	名古屋市長	松原 武久
平成 12 年 12 月 4 日	中部の未来創造大賞	表彰委員長	松尾 稔
平成 13 年 7 月 17 日	感謝状	国土交通省中部地方整備局長	岡野 貞久
平成 17 年 6 月 1 日	表彰状	環境省環境管理局水環境部長	甲村 嫌友
平成 20 年 5 月 23 日	表彰状	社団法人日本河川協会	近藤 徹
平成 20 年 6 月 5 日	表彰状	愛知県知事	神田 真秋
平成 21 年 6 月 5 日	感謝状	愛知県知事	神田 真秋
平成 21 年 6 月 30	日本水大賞環境大臣賞	環境大臣	斉藤 鉄夫
平成 23 年 7 月 1 日	感謝状	国土交通省中部地方整備局長	富田 英治
平成 23 年 9 月 24 日	いい川づくりワークショップ 準グランプリ	第 4 回いいかわ・いいかわづくり 実行委員会	
平成 25 年 11 月 6 日	表彰状	公益財団法人河川財団理事長	鈴木藤一郎
平成 28 年 1 月 29 日	表彰状	河川財団理事長	関 克己
平成 29 年 2 月 3 日	表彰状	河川財団理事長	関 克己
平成 29 年 3 月 12 日	感謝状	名古屋市長	河村 たかし
平成 31 年 3 月 24 日	感謝状	名古屋市長	河村 たかし
令和 2 年 1 月 17 日	中部の未来創造大賞奨励 賞	表彰委員長	山本 幸司
令和 2 年 3 月 15 日	感謝状	名古屋市長	河村たかし
令和 2 年 10 月 15 日	グッドプラクティス	愛知県・名古屋市	大村秀章ー河村たかし
令和 3 年 3 月 14 日	感謝状	名古屋市長	河村たかし
令和 3 年 7 月 19 日	感謝状	国土交通省中部地方整備局長	堀田 治
令和 4 年 3 月 13 日	感謝状	名古屋市長	河村たかし
令和 5 年 3 月 12 日	感謝状	名古屋市長	河村たかし
令和 6 年 3 月 10 日	感謝状	名古屋市長	河村たかし
令和 7 年 2 月 11 日	手作り郷土賞	国土交通大臣表彰	中野洋昌

矢田・庄内川をきれいにする会の活動の記録

年 月 日	で き ご と
1974 年 3 月	・王子公害をなくす住民の会に参加
12 月 27 日	・王子製紙に工場廃液について口頭で申し入れ (丹羽)
12 月 28 日	・毎日新聞できれいにする会の結成が紹介される
	・矢田川で大量の魚が浮く
1975 年 1 月 14 日	・三階橋温泉に王子製紙の工場廃液の写真を展示
5 月 22 日	・「川の汚れは心の汚れ」看板完成 (15 枚)
6 月 1 日	・看板を庄内川、矢田川堤防に立てる
6 月 29 日	・庄内川で「喰えない魚釣り大会」を開く、350 名参加 (大盛況)
8 月 14 日	・この頃より、庄内川・矢田川に釣りブーム起きる
9 月 28 日	・矢田川 香流川合流点付近・合成洗剤の害を訴える
10 月 25 日	・土方康夫、日本福祉大学教授による当会のシンボルバッジのデザインが決まる
10 月 26 日	・第 3 回「食べられない魚 母子釣り大会」を開く (松河戸橋付近) 国際婦人年にちなんで釣り女子選手権争奪戦、宝探 しなど楽しく行う。・合成洗剤の害を訴える
12 月 9 日	・庄内橋六価クロム検出量日本一、新聞に発表される
	・水分橋上流、八田川より流出したもよう
12 月 30 日	・堀川に庄内川の水が導入される (360 年ぶり)
1976 年 1 月 4 日	・堀川導入終る
	・「きれいにする会」堀川浄化作戦実施、看板を 2 枚立てる
	・堀川と庄内川は兄弟であることを沿岸住民に訴える
1 月 28 日	・「矢田・庄内川をきれいにする会」が NHK のテレビリポートで紹介される
3 月 7 日	・愛知県の依頼により、庄内川の魚種の採取 (枇杷島橋、水分橋、志段味橋)
3 月 13 日	・CBC テレビの「市政ニュース」で丹羽さんが市長と対談、住民運動と行政の一致が早く川をきれいにする と訴える
5 月 9 日	・第 1 回「庄内川まつり」バッジで大行進
	・「きれいにする会」のテーマソング、川の歌発表会、「喰えない魚釣り大会」「川のこみ清掃」などの行事 参加者 400 名
6 月 14 日	・9 年ぶりに愛知県によつて 17,000 匹の鮎が庄内川へ放流される 場所は吉根橋、体長 6~7 センチのもの
	・「きれいにする会」の運動の成果大いに上がる 追跡調査行う
6 月 30 日	・庄内川漁業協同組合、吉根橋で採取。半月で体長 11 センチ、体重 12 グラム
8 月 8 日	・全国放送協会主催の環境美化キャンペーンに参加
	・三階橋上流の河岸清掃
8 月 9 日	・世話人会で「きれいにする会」の中に釣りクラブ (山彦会) をつくること決定
10 月 6 日	・庄内川で採取された鮎は天然鮎、名古屋女子大学廣教授発表
10 月 18 日	・「食べられるかもしれない魚釣り大会」試食会
12 月 20 日	・「川の汚れは心の汚れ」看板百本記念、本山市長によって立てられる
	・黒川をきれいにする会とともに堀川清掃
1977 年 1 月 30 日	・庄内川上流・土岐川支流・肥田川にあまご放流
2 月 10 日	・大和メッキ、矢田川にコイ放流 (シアン流出のおわび)
2 月 21 日	・「さくらの銀行」開設
5 月 15 日	・鮎救出作戦決行、鮎土岐川に送る
6 月 4 日	・第 1 回「健康と環境を守れ愛知の住民一斉行動デー」に参加、知事に要望書提出
1978 年 3 月 24 日	・「さくらの銀行」植樹祭に本山市長参加
6 月 3 日	・庄内川で重金属調査のため魚採取

年 月 日	で き ご と
1978 年 12 月 21 日	・名港に釣り公園、名古屋港管理組合発表
1979 年 3 月 18 日	・猫ヶ洞釣り場として一般に開放
3 月 24 日	・「きれいにする会」5 年のあゆみ「川の汚れは心の汚れ」発刊 1 冊 1,000 円
6 月 4 日	・愛知県知事と交渉 ・庄内川の河川ランク上げ D 級→C 級 ・魚道の見直しなど
7 月 10 日	・庄内川にシラス(うなぎの稚魚)戻ってくる
10 月 21 日	・名港を考える会結成 会長中田名大教授、副会長きれいにする会会長
1980 年 1 月 30 日	・釣り池開放問題で名古屋市農政局と対談、東谷山フルーツパーク内、お神池
3 月 2 日	・合成洗剤追放策、三川連絡会支援
4 月 4 日	・「六価クロムたれ流し」春日井市池上化研工業摘発
4 月 26 日	・愛知県水質審「伊勢湾総量規制」7 月スタート
6 月 8 日	・バクテリアのプール装置 BOD ぐんと改善、滋賀県が実験(中日新聞)
7 月 1 日	・伊勢湾浄化総量規制スタート
8 月 19 日	・映写会守山下水処理場内集会場
11 月 16 日	・庄内川まつり「いつかは食べられる魚釣り大会」600 名参加
12 月 19 日	・庄内川の水質向上と建設省中部地建発表
12 月 24 日	・名古屋市が公害白書、伊勢湾は富栄養化
1981 年 4 月 26 日	・水分橋上流八田川より廃棄物流される
7 月 24 日	・市内河川魚類調査、宮田
10 月 29 日	・建設省申し入れ 吉根堰堤問題、玉野堰堤改修、庄内橋下流地下鉄工事
1982 年 5 月 10 日	・市長対談下水道問題
7 月 10 日	・中部の環境を考える会
1983 年 4 月 24 日	・「観桜会」
6 月 4 日	・矢田川千代田橋上流アシスト
10 月 14 日	・水分け橋上流にて鮎採取 25 センチ
1984 年 1 月 18 日	・庄内川水生昆虫調査
1985 年 1 月 23 日	・市長交渉 親水護岸問題
3 月 25 日	・王子公害、公害対策局と交渉
1986 年 4 月 27 日	・「サバイバル庄内川 86」(ボート下り)
5 月 30 日	・水マイリバー堀川オブザーバー参加
7 月 24 日	・魚取り(建設省展示用)
9 月 21 日	・名港フェスティバル魚展示
9 月 28 日	・志段味を考える会 宮田講演
11 月 6 日	・堀川と私たち
1987 年 8 月 4 日	・建設省水生生物調査
8 月 29 日	・SOS 伊勢湾会議参加
11 月 28 日	・伊勢湾・なこや港の環境を考える市民の集い 参加・報告
1988 年 4 月 23 日	・13 年のあゆみ出版記念パーティー(ぼくらの川“庄内川よ”(テーマ曲第 2 弾発表)
6 月 25 日	・柳川堀割物語上映会大森会館
8 月 11 日	・水冒険
8 月 21 日	・水冒険フェスティバル
9 月 16 日	・堀川魚取り中京テレビ
10 月 16 日	・名港フェスタ' 88
1989 年 3 月 26 日	・瀬古団地内河川にホタル放流(ヘイケ 30 匹、ゲンジ 50 匹)
6 月 12 日	・サンサンモーニングラジオインタビュー
10 月 8 日	・89 水冒険フェスティバルボートウォッチング

年 月 日	で き ご と
1989 年 10 月 5 日	・「新しい川づくりをめざす庄内川魚釣り大会」
12 月 9 日	・土岐川視察 恵那荘交流会
1990 年 2 月 11 日	・柳川視察
2 月 25 日	・山岡町立木トラスト
3 月 29 日	・木曽川シンポ
4 月 15 日	・「けいしょうの森」石碑除幕式
6 月 24 日	・市内トンボ湿地見学会
7 月 24 日	・庄内川魚とり 建設省 CBC まつり
8 月 24 日	・名港フェスティバル シンポジウム
9 月 16 日	・藤前干潟ウォッチング
10 月 14 日	・「けいしょうの森まつり」バスツアー
10 月 28 日	・「鮎が泣いている庄内川魚釣り大会」
11 月 24 日	・ため池研究会
1991 年 6 月 4 日	・大矢川ゲンジボタル確認
6 月 30 日	・庄内川絵画展
7 月 31 日	・親子水辺教室
8 月 21 日	・庄内川水生生物調査 建設省
9 月 30 日	・オ井戸流 スナヤツメ、カワモズク発見
11 月 3 日	・「鮎が泣いている庄内川魚釣り大会」
1992 年 4 月 29 日	・水冒険マス釣り大会
6 月 10 日	・中志段味安田池保存へ 買い取り
8 月 26 日	・名古屋市市民フォーラム
10 月 17 日	・花水緑の市民フォーラム参加
10 月 18 日	同上
11 月 1 日	・「よみがえれ庄内川魚釣り大会」
11 月 8 日	・リバーピア庄内川魚の写真パネルで参加
1993 年 2 月 20 日	・「けいしょうの森」スケッチ画展
3 月 24 日	・「海上の森」もみの山視察
6 月 3 日	・瀬戸環境を考える会
6 月 5 日	・愛知万博シンポジウム
8 月 9 日	・庄内川視察庄内川工事事務所
8 月 20 日	・水濁協魚類調査
9 月 13 日	・志段味長戸川調査
10 月 30 日	・東海水環境ネットワーク
11 月 7 日	・第 19 回庄内川まつり「よみがえれ庄内川魚釣り大会」
1994 年 2 月 15 日	・カワヒバリ貝調査
3 月 23 日	・庄内川 4 輪ジープシンポジウム(庄内川河川利用フォーラム)
3 月 24 日	・水分橋緑地公園植樹祭(桜つづみモデル事業)
4 月 21 日	・庄内川山菜調査
4 月 28 日	・庄内川残土によるシャチ出来上がり
8 月 7 日	・矢田川水生生物魚類調査 医療生協
11 月 6 日	・リバーピア庄内川
11 月 13 日	・第 20 回庄内川まつり「20 周年記念魚釣り大会」
12 月 19 日	・庄内橋ゴルフ場視察
1995 年 9 月 2 日	・愛知県河川課野外パネルセッション(古巣水辺公園)
10 月 22 日	・リバーピア庄内川、名港を考える会フェスタ
10 月 25 日	・庄内川志段味橋立木調査下見(野鳥の会)

年 月 日	で き ご と
1995 年 10 月 29 日	・ 第 21 回庄内川まつり (20 周年庄内川釣り大会ニジマス釣り大会)
11 月 21 日	・ 河川問題、多自然型工法
12 月 13 日	・ 志段味地区保全問題会議 (愛知県有林について)
1996 年 3 月 14 日	・ 庄内川環境特性検討会議 庄内川環境基準ランク引き上げ E→D へ
3 月 22 日	・ ヘリコプターにて庄内川視察と講演
7 月 24 日	・ 水辺教室講演と魚とり (建設協会)
8 月 6 日	・ 水環境フェスタ 96 (岡山・建設省〈庄内川について宮田発表〉)
9 月 28 日	・ 東区保健センター環境問題 (香流川)
11 月 3 日	・ リバーピア庄内川
11 月 10 日	・ 第 22 回庄内川まつり (水質基準ランクアップ魚釣り大会)
11 月 16 日	・ 愛岐処分場見学
1997 年 1 月 18 日	・ 丹羽秀義死去 (84 歳)
3 月 26 日	・ 愛知用水トンネル工事視察
4 月 5 日	・ 東谷山シデコフシ観察会
6 月 6 日	・ NHK おはよう東海ヨシ原再生 ビオトープ問題で宮田出演
6 月 11 日	・ 矢田川上流、海上の森看板立て
6 月 25 日	・ 庄内川ヨシ原再生の視察と発表
7 月 23 日	・ 庄内橋堰堤右岸、ソウ魚発見 (死骸)
8 月 8 日	・ 水環境フェア宣言発表
9 月 4 日	・ 庄内川ビオトープ
11 月 2 日	・ 第 23 回庄内川まつり 「もっときれいになれ庄内川魚釣り大会」
11 月 3 日	・ リバーピア庄内川
12 月 19 日	・ 多治見保健所申し入れ 定光寺及び曾木汚濁問題・
1998 年 1 月 16 日	・ 愛知用水東谷山付近貫通式
2 月 13 日	・ 愛知用水志段味開水路検討「意見聴取会」
2 月 22 日	・ 県河川フォーラム
4 月 19 日	・ 観桜会記念碑除幕式
6 月 7 日	・ ビオトープ ヨシ茎植え
7 月 21 日	・ 庄内川工事事務所にて表彰される (建設事業関係功労者)
7 月 25 日	・ 第 28 回なこやまつり第 18 回河川コーナーにきれいにする会出展
7 月 26 日	同上
8 月 7 日	・ 建設協会親子水辺教室
10 月 27 日	・ イタセンバラ現地調査
11 月 3 日	・ リバーピア庄内川
11 月 8 日	・ 第 24 回庄内川まつり 「もっときれいになれ庄内川魚釣り大会」
11 月 15 日	・ 庄内川ビオトープ生物調査
12 月 13 日	・ ドンキホーテ隊打ち上げ (中本賢さんより寄付金をもらう)
1999 年 2 月 20 日	・ グランドワークセミナー
3 月 4 日	・ 建設省浄化事業
3 月 27 日	・ 日本環境会議名古屋大会
4 月 15 日	・ 才井戸流 CBC 放映
4 月 18 日	・ 藤前干潟「生きものまつり」
4 月 27 日	・ NBN「こけこつこ」でインタビューを受ける
5 月 11 日	・ 建設コンサルタント総会にて講演
5 月 12・13 日	・ 庄内川ビオトープ「ズームイン朝」で放映
5 月 21 日	・ CBC「そこが知りたい」サツキマス確認
5 月 31 日	・ 県知事交渉

年 月 日	で き ご と
1999 年 6 月 26 日	・ 陸水会水質調査
6 月 27 日	同上
7 月 17 日	・ 東海水環境ネットフォーラム 99
7 月 24 日	・ 建設協会親子水辺教室
7 月 25 日	同上
7 月 26 日	・ 名古屋市長交渉
8 月 9 日	・ イタセンパラ保護連絡会
9 月 3 日	・ 中部国際空港を考える愛知県民ネットワーク
11 月 3 日	・ リバーピア庄内川
11 月 7 日	・ 庄内川まつり魚釣り大会
11 月 9 日	・ 瀬戸市長交渉
2000 年 4 月 26 日	・ 東生涯学習センター宮田講演
4 月 30 日	・ 志段味懇談会宮田講演
6 月 2 日	・ 庄内橋魚道調査
6 月 4 日	・ 井戸流ビオトープ観察会
6 月 9 日	・ 河川生態環境評価に関する講演会
7 月 26 日	・ 庄内川流域ネットワーク「庄内川の魚を見る会」
7 月 29 日	・ CBC 夏まつり河川コーナー
7 月 30 日	同上
8 月 11 日	・ 東海豪雨
9 月 15 日	・ 愛知サンショウウオを見る会 才井戸流ビオトープ調査
10 月 21 日	・ 堀川を考える小学生の集い(八熊小学校)いつせい行動
10 月 29 日	・ 流域自治体ゴミクリーン作戦
11 月 3 日	・ リバーピア中止
11 月 5 日	・ 庄内川まつり魚釣り大会
11 月 16 日	・ 名港を考える会宮田講演(住民と企業と行政)
12 月 2 日	・ 矢田中学講演 宮田
12 月 4 日	・ 中部未来創造大賞受賞
12 月 13 日	・ 王子製紙環境管理課と話し合い
12 月 21 日	・ 万博座談会
12 月 25 日	・ 八田川浄化問題
2001 年 2 月 15 日	・ 堀川浄化問題
4 月 18 日	・ 才井戸流報告会
2 月 25 日	・ 庄内川流域ネットワーク王子製紙見学
4 月 12 日	・ 桜植樹米が瀬緑地
6 月 2 日	・ 名東保健所 魚類を採る
6 月 13 日	・ 庄内川・土岐川流域ネットワーク 毎上の森視察
6 月 17 日	・ 志段味の歴史と自然に親しむ会
6 月 20 日	・ 県吉根堰堤魚道打合せ
6 月 27 日	・ 白沢小学校庄内川観察会
7 月 22 日	・ 夏まつり 河川コーナー
7 月 23 日	同上
7 月 24 日	・ 香流川 親子水辺孝教室
7 月 26 日	・ 山崎川 親子水辺教室
7 月 27 日	・ 春日井北白小学校 水生生物調査
8 月 2 日	・ 守山保健所水生生物調査 投網
9 月 5 日	・ 矢田川水生生物調査

年 月 日	で き ご と
2001 年 9 月 8 日	・河川シンポ(河川文化ディスカバーフォーラム)
11 月 3 日	・リバーピア庄内川
11 月 4 日	・庄内川まつり 魚釣り大会
12 月 20 日	・八田川懇談会
12 月 24 日	・産廃焼却施設を阻止する北区の会
2002 年 3 月 2 日	・名成産業説明会 松川戸産廃問題
3 月 7 日	・桜の植樹
3 月 11 日	・庄内川ビデオ撮り
3 月 12 日	・愛知亜鉛ビオトープメダカ
4 月 7 日	・保険医協会 才井戸流見学
5 月 6 日	・いつせい行動出版懇談会
5 月 11 日	・名古屋テレビロケ
5 月 20 日	・名古屋テレビロケ(小野さんほか)
6 月 3 日	・名古屋テレビ「アユ元気か？」放映
11 月 3 日	・リバーピア庄内川
11 月 10 日	・庄内川まつり 魚釣り大会
12 月 2 日	・守山自然ふれあいスクール
12 月 21 日	・藤前ラムサール登録報告
2003 年 2 月 6 日	・カモカモウオッチング藤前干潟
2 月 23 日	・三河湾環境問題
3 月 12 日	・八社小学校 講演
5 月 2 日	・国交省 才井戸流視察
5 月 24 日	・エコストック 矢田川・新川中橋上流
5 月 25 日	同上
7 月 3 日	・自沢小学校庄内川の水生生物
7 月 26 日	・夏まつり河川コーナー
7 月 27 日	同上
7 月 28 日	・愛知川交流会
8 月 27 日	・リバーヘッド公演(ミュージカル)
9 月 25 日	・名古屋港を見よう(名港を考える会)
11 月 2 日	・庄内川まつり 魚釣り大会
11 月 3 日	・リバーピア庄内川
12 月 7 日	藤前干潟立入調査
12 月 10 日	・堀川大学 能楽堂
2004 年 1 月 13 日	・長久手との話し合い
1 月 25 日	・伊勢湾 NGO パートナーシップ会議
2 月 14 日	・大山川の自然に親しむ会
3 月 6 日	・庄内川下り水分橋より
3 月 23 日	・庄内川ビオトープ 春日井市役所・王子製紙
3 月 28 日	・「ダム撤去」シンポ
4 月 6 日	・一色干潟調査(三河湾)
4 月 29 日	・名古屋市水質環境目標値設定にかかる懇談会
5 月 8 日	・矢作川川会議
5 月 12 日	・庄内川流域ネットごみひろい
5 月 14 日	・伊勢三河湾市民ネットワーク
5 月 16 日	・新川町魚類調査

年 月 日	で き ご と
2004 年 5 月 18 日	・流域ネット下水処理場見学
5 月 19 日	・玉野発電所定期点検
5 月 23 日	・才井戸流ビオトープ試験地草刈
6 月 6 日	・国交省水環境一斉調査
6 月 12 日	・中京テレビ「WAKU WAKU」取材
6 月 13 日	同上
6 月 15 日	・土岐川観察
6 月 17 日	・菜の花プロジェクト
6 月 21 日	・伊勢・三河湾貧酸素打合せ
6 月 24 日	・名古屋港見学会
7 月 4 日	・「30 年のあゆみ」出版についての話し合い
7 月 10 日	・中京テレビ「WAKU WAKU」放映
7 月 15 日	・藤前干潟第 2 回ごみひろい
7 月 19 日	・矢田川浄化実験場見学
7 月 24 日	・CBC 夏まつり 河川コーナー
7 月 25 日	同上
7 月 28 日	・環境大学説明会
8 月 10 日	・志段味ビオトープ
8 月 20 日	・引山小学校 石井式浄化槽設置
9 月 7 日	・つゆはし作業所視察
9 月 18 日	・天自川サミット
9 月 25 日	・エコストック 矢田川・新川中橋上流
9 月 26 日	同上
10 月 18 日	・春日井市との話し合い
10 月 24 日	・クリーン大作戦 藤前干潟
10 月 28 日	・名古屋港見学会
11 月 3 日	・リバーピア庄内川 2004
11 月 7 日	・庄内川まつり 魚釣り大会
11 月 14 日	・30 周年誌「庄内川浪漫」出版記念パーティ、ソンコ マーヂュ出演
12 月 1 日	・才井戸流 志段味推進室が視察
12 月 21 日	・瀬戸市との話し合い
2005 年 1 月 20 日	長久手町との話し合い
1 月 23 日	・伊勢・三河湾流域ネットワーク設立総会
1 月 31 日	・名古屋港管理組合との話し合い
2 月 10 日	・瀬古小学校 4 年生総合学習
2 月 25 日	・瀬古学区 矢田川ゴミ拾い
3 月 10 日	・相川竹林ワークショップ見学会
3 月 20 日	・才井戸流 草刈り
3 月 27 日	・藤前干潟 ビジターセンターオープン
5 月 8 日	・クリーン大作戦 庄内川河口
7 月 23 日	・愛知万博 県民参加ワーキング発表会
7 月 24 日	・土岐川・庄内川交流会
7 月 30 日	・愛知万博 県民参加ワーキング発表会
	・CBC 夏祭り河川環境に参加
7 月 31 日	・CBC 夏祭り河川環境に参加
8 月 7 日	・志段味ビオトープで遊ぼう

年 月 日	で き ご と
2005 年 8 月 20 日	・愛知万博で発表
8 月 28 日	・土岐川庄内川交流会
9 月 11 日	・庄内川上流調査 漁協と交流会
9 月 18 日	・名城大学 Day ボランティア活動の発表
9 月 25 日	・いっせい行動 決起と交流集会
10 月 1 日	・鍋田視察
10 月 2 日	・森の健康診断 恵那市
10 月 15 日	・尾張旭市 矢田川サミット
10 月 21 日	・琵琶湖環境ビジネスメッセ 2005 長浜ドーム
11 月 3 日	・りばーびあ庄内川 2005
11 月 6 日	・庄内川まつり 魚釣り大会 水分橋
11 月 13 日	・クリーン大作戦 庄内川河口
11 月 20 日	・野井川クリーン作戦
11 月 26 日	・笠原の森 整備事業
12 月 14 日	・名古屋市との話し合い
2006 年 1 月 17 日	・ハヶ村用水上流の湖畔林の調査
18 日	・水質調査 名古屋市モニタリング
2 月 3 日	・庄内川水辺空間に関する懇談会
2 月 13 日	・第 1 回水が結ぶ水辺空間に関するあいち
3 月 5 日	・志段味ビオトープで遊ぼう
3 月 6 日	・名古屋港管理組合との話し合い
3 月 18 日	・名古屋市水質モニタリング発表会
3 月 24 日	・瀬戸市との話し合い
4 月 5 日	・庄内川新池の整備
5 月 21 日	・森の健康診断 報告会
5 月 27 日	・クリーン大作戦庄内川中堤
6 月 3 日	・矢作川森の健康診断
	・エコストックフェスティバル
6 月 4 日	・全国一斉水環境調査
	・エコストックフェスティバル
6 月 8 日	・才井戸流 草刈
6 月 11 日	・多治見 生田川整備
6 月 18 日	・多見水質生き物調査
7 月 11 日	・愛知県との話し合い
7 月 23 日	・恵那市 野井川整備
7 月 29 日	・CBC 夏祭り
7 月 29 日	・第一回水とびあ朝市
8 月 6 日	・上流水質生き物調査
	・志段味ビオトープで遊ぼう
9 月 17 日	・名古屋環境デー
9 月 26 日	・水辺の学校準備会
10 月 5 日	・NP0 土岐川・庄内川サポートセンター設立
10 月 22 日	・水分橋下流河川敷 整備
10 月 28 日	・恵那市 森の健康診断
11 月 3 日	・リバーピア 庄内川 2006
11 月 4 日	・クリーン大作戦

年 月 日	で き ご と
2006 年 11 月 5 日	・庄内川まつり 魚釣り大会
11 月 12 日	・恵那市 野井川 クリーン作戦
12 月 10 日	・川ナビ 歩こう会
2007 年 1 月 13 日	・森の健康診断 全国会議
2 月 13 日	・琵琶池地区整備ワーキング
2 月 24 日	・尾張旭市の豊かな自然
2 月 27 日	・水循環再生指標検討会愛知県
3 月 4 日	・志段味ビオトープで遊ぼう
3 月 6 日	・才井戸流 整備
3 月 11 日	・伊勢・三河湾流域ネットワーク総会
3 月 13 日	・瀬戸市話し合い
4 月 13 日	・ゴミシンポジウム 藤前ビジターセンター
4 月 18 日	・水質調査モニタリング
5 月 7 日	・守山高校訪問
5 月 18 日	・NPO サポートセンター総会
5 月 19 日	・クリーン大作戦 庄内川中堤
5 月 22 日	・生物多様性の日
6 月 24 日	・いっせい行動 決起と交流の集会
7 月 21 日	・才井戸流 自然観察会
7 月 28 日	・CBC 夏祭り
7 月 29 日	同上
8 月 9 日	・愛知水シンポ
8 月 20 日	・愛知川の会
8 月 26 日	・志段味ビオトープで遊ぼう
9 月 4 日	・名古屋市との話し合い
9 月 15 日	・ため池シンポジウム
9 月 22 日	・ボランティアフェスティバル
9 月 23 日	・環境デー名古屋
9 月 27 日	・東谷山古墳群見学会
9 月 29 日	・第 2 回森の健康診断報告会
10 月 18 日	・才井戸流 整備
10 月 19 日	・環境セミナー2007
10 月 27 日	・恵那市 森の健康診断
11 月 3 日	・りばーびあ庄内川 2007 投網打ち
11 月 4 日	・庄内川まつり 魚釣り大会
11 月 10 日	・クリーン大作戦庄内川河口
11 月 11 日	・恵那市 野井川クリーン作戦
11 月 15 日	・みずとびあ 草刈り
11 月 19 日	・身近な水辺再生と川の健康診断 矢田川
12 月 6 日	・名古屋港見学会
12 月 12 日	・志段味収穫祭
12 月 14 日	・矢田川 川の健康診断の反省会
12 月 27 日	・矢田川子ども水辺現地視察
2008 年 1 月 30 日	・瀬戸市との話し合い
2 月 8 日	・ごみゼロ社会推進あいち県民大会
2 月 12 日	・守山自然ふれあいスクール
3 月 2 日	・尾張水環境再生プロジェクト

年 月 日	で き ご と
2008 年 3 月 3 日	・名古屋港管理組合との話し合い
4 月 12 日	・守山ふれあいスクール マメナシを知ろう
4 月 20 日	・NPO サポートセンター総会
5 月 6 日	・山菜を楽しむ会
5 月 22 日	・あいち川の会総会
5 月 23 日	・水環境保全活動で環境省より表彰を受ける
6 月 1 日	・クリーン大作戦 庄内川河口
6 月 21 日	・愛知県環境調査
6 月 29 日	・恵那市 森の健康診断下見
7 月 5 日	・水質調査 大森橋
7 月 6 日	・環境問題懇談会
8 月 8 日	・名古屋市との話し合い
8 月 10 日	・伊勢・三河湾シンポ
8 月 24 日	・志段味ビオトープで遊ぼう
9 月 20 日	・いっせい行動決起と交流の集会
10 月 12 日	・身近な水辺再生と川の健康診断 矢田川大森橋
10 月 26 日	・あいち川の会 大山川
11 月 2 日	・庄内川まつり 魚釣り大会 水分橋
11 月 3 日	・りばーびあ庄内川 みずとびあ
11 月 14 日	・藤前干潟ふれあいデー
11 月 15 日	・クリーン大作戦 稲永会場
11 月 21 日	・矢田川のアユを食べる会 天神橋
11 月 25 日	・矢田川水辺協議会
11 月 30 日	・恵那市間伐体験
2009 年 1 月 10 日	・水質調査 大森橋
1 月 15 日	・守山東中学校総合学習
1 月 25 日	・きれいにする会会議
2 月 14 日	・伊勢湾流域圏再生シンポ
2 月 23 日	・王子製紙との協議
3 月 1 日	・伊勢湾の再生・保全に関する意見交換会
3 月 7 日	・志段味ビオトープで遊ぼう
3 月 15 日	・アユ調査
3 月 22 日	・名古屋市水環境モニタリング発表会
4 月 11 日	・きれいにする会総会 ・漁業組合設立準備会
4 月 19 日	・アユ 52 匹確認 4 名参加
4 月 25 日	・多自然川づくりワークショップ
5 月 2 日	・アユ遡上調査 庄内川・矢田川
5 月 3 日	・アユ遡上調査 庄内川・矢田川
5 月 12 日	・守山ふれあいスクール
5 月 22 日	・守山高校と才井戸流の清掃
5 月 23 日	・川と海の清掃活動 庄内川アダプト
5 月 31 日	・漁業組合設立発起人会
6 月 14 日	・米が瀬ビオトープで遊ぼう
6 月 30 日	・日本水大賞 環境大臣賞受賞式出席
7 月 12 日	・あいち海上の森大学開校記念講演会
7 月 18 日	・モリコロパーク夏祭り 出展

年 月 日	で き ご と
2009 年 7 月 19 日	・モリコロパーク夏祭り 出展 ・アユ遡上調査 庄内川・矢田川
7 月 20 日	・アユ遡上調査 庄内川・矢田川
7 月 25 日	・水質調査 大森橋
8 月 9 日	・あいち川の会「川の石ころ」 豊川
8 月 12 日	・才井戸流 草刈り
9 月 29 日	・河村名古屋市長との懇談
10 月 4 日	・身近な水辺再生と川の健康診断 矢田川大森橋
10 月 10 日	・COP10 開始 1 年前記念事業（モリコロパーク） 出展
10 月 11 日	同上
10 月 24 日	・恵那市 森の健康診断
10 月 25 日	・藤前干潟 ふれあいデー
10 月 31 日	・川と海の清掃活動 庄内川アダプト ・クリーン大作戦 庄内川河口
11 月 1 日	・庄内川まつり 第 35 回記念魚釣り大会 水分橋
11 月 14 日	・環境大臣賞受賞・35 周年記念祝賀会
2010 年 4 月 3 日	・庄内川水系にアユ遡上 100 万匹大作戦（4 月 4 日、5 月 2・3 日、7 月 19 日）
5 月 22 日	・矢田川ウオーキング（あいち森と緑事業）
6 月 6 日	・庄内川アユ遡上調査 山西用水堰—高貝用水堰—神明上条用水堰—諏訪大橋
9 月 6 日	・藤前学生環境サミット基調講演
9 月 19 日	・リバーピアブース出展
10 月 9 日	・Cop10 地球生き物 Expo ブース出展（10 月 10 日）
10 月 20 日	・庄内川アユ産卵場の造成
10 月 31 日	・矢田川アユヤナ設置
11 月 7 日	・庄内川祭り 魚釣り大会
11 月 24 日	・東生涯学習センター（名古屋マイスター講座）矢田川の魅力 生物多様性を感じて ・第 5 回矢田川を変えよう 矢田川ボランティアの魅力講演
2011 年 1 月 25 日	・山西用水堰視察・意見交換会（名古屋市）
2 月 8 日	・尾張地域水循環再生地域協議会 事例報告、庄内川アユ遡上 100 万匹大作戦、才井戸流環境整備
3 月 6 日	・春の志段味ビオトープで遊ぼう参加
3 月 12 日	・庄内川再生フォーラム 庄内川アユ遡上 100 万匹大作戦報告
4 月 17 日	・投網講習（名城大学付属高校生参加）
4 月 29 日	・アユ遡上調査（4 月 30 日、6 月 19 日・名城大学付属高校生参加、20 日）
5 月 14 日	・藤前干潟クリーンアップ大作戦参加
6 月 5 日	・才井戸流 ホタル鑑賞会
7 月 14 日	・藤前干潟二枚貝調査（名城大学付属高校生と協働）
7 月 21 日	・国土交通省中部地方整備局より感謝状を受ける
9 月 19 日	・50 年ぶりのアユ友釣り大会（第 1 回）
9 月 24 日	・川づくり いい川づくりワークショップ 準グランプリを獲得(25 日)
10 月 1 日	・才井戸流 台風後の修復と生き物調査
10 月 2 日	・庄内川アユ産卵場造成
10 月 20 日	・山西用水堰改善、庄内川河川事務所および名古屋市と協議
10 月 30 日	・身近な水辺再生と川の健康診断
11 月 6 日	・庄内川祭り 魚釣り大会
11 月 16 日	・リバーピアに参加
12 月 4 日	・才井戸流 環境整備

年 月 日	で き ご と
2012 年 1 月 29 日	・伊勢湾のゴミを考える集い 「庄内川水系にアユ遡上 100 万匹大作戦」を講演
3 月 11 日	・才井戸流 環境整備
3 月 24 日	・モリコロ春祭りに出展
4 月 15 日	・投網講習（名城大学付属高校生参加）
5 月 1 日	・アユ遡上調査（5 月 5・20 日、6 月 18・25 日、7 月 8 日、11 月 29 日）
5 月 6 日	・庄内川で遊びませんか 庄内川ウォーキング
5 月 16 日	・名古屋国際学園に才井戸流れを紹介
6 月 10 日	・才井戸流 ホタル観賞会
7 月 22 日	・藤前干潟二枚貝調査（名城大学付属高校生と協働）
9 月 8 日	・三重県奈佐の浜 大清掃大会参加
9 月 15 日	・第 2 回庄内川天然アユ友釣り大会
10 月 21 日	・リバーピア、第 1 回庄内川川会議
10 月 28 日	・身近な水辺再生と川健康診断
11 月 4 日	・庄内川祭り 魚釣り大会
11 月 30 日	・中部電力玉野堰魚道見学
2013 年 1 月 26 日	・第 2 回 ゴミと水を考える集いー庄内川を救おう
3 月 17 日	・アユ遡上調査（庄内川）
3 月 30 日	・庄内川山西用水堰に簡易魚道設置
4 月 16 日	・投網講習（名城大学付属高校生参加）
5 月 24 日	・藤前干潟クリーンアップ大作戦参加（名城大学付属高校生と協働）
6 月 9 日	・才井戸流ホタル観賞会
6 月 15 日	・オオキンケイギク調査（名古屋市生物多様性センターに協力）
7 月 7 日	・藤前干潟二枚貝調査（名城大学付属高校生と協働）
7 月 14 日	・庄内川竹筏下り（会員）
7 月 28 日	・庄内川竹筏下り（名城大学付属高校生参加）
9 月 16 日	・第 3 回庄内川天然アユ友釣り大会
10 月 27 日	・第 2 回 庄内川川会議
10 月 30 日	・身近な水辺再生と川健康診断
11 月 3 日	・庄内川祭り 魚釣り大会
2014 年 1 月 25 日	・才井戸流 環境整備
4 月 20 日	・投網講習（名城大学付属高校生参加）
4 月 22 日	・庄内川河川事務所の魚道づくりに協力
5 月 11 日	・庄内川清掃活動（6 月 8 日、7 月 13 日、8 月 10 日、9 月 14 日）
5 月 25 日	・矢田川で魚を捕ろう活動
6 月 1 日	・庄内川にアユを呼び戻そう
6 月 8 日	・才井戸流 ホタル観賞会
6 月 22 日	・矢田川アユ遡上調査（7 月 27 日、8 月 28 日）
7 月 21 日	・才井戸流 ザリガニ調査（名古屋市生物多様性センターに協力）
7 月 26 日	・藤前干潟二枚貝調査（名城大学付属高校生と協働）
9 月 15 日	・第 4 回庄内川アユ友釣り大会
10 月 19 日	・第 3 回庄内川川会議、リバーピア終了後
10 月 26 日	・身近な水辺再生と川健康診断
11 月 2 日	・庄内川祭り 魚釣り大会
11 月 22 日	・名城大学付属高校の庄内川清掃活動に協力
2015 年 3 月 2 日	・春の志段味ビオトープで遊ぼう
4 月 19 日	・投網講習（名城大学付属高校生参加）
5 月 3 日	・庄内川にアユを呼び戻そう

年 月 日	で き ご と
2015 年 5 月 31 日	・矢田川で魚を捕ろう
6 月 7 日	・才井戸流 ホタル観賞会
6 月 17 日	・(株) アサヒビールより助成金をいただく
6 月 27 日	・矢田川魚道調査 (7 月 25 日)
8 月 1 日	・藤前干潟二枚貝調査 (名城大学付属高校生と協働)
9 月 19 日	・第 5 回庄内川アユ友釣り大会
10 月 18 日	・第 4 回 庄内川川会議
10 月 4 日	・矢田川の源流を訪ねる活動
10 月 25 日	・身近な水辺再生と川の健康診断
11 月 1 日	・庄内川祭り 魚釣り大会
2016 年 1 月 29 日	・河川財団平成 27 度川づくり団体優秀事例発表会において優秀成果団体表彰を受ける
3 月 5 日	・庄内川小田井堰堤下流に自動水温度測定器を設置
3 月 12 日	・春の志段味ビオトープで遊ぼう
3 月 19 日	・才井戸流水質検査 (名古屋水質目標値水質モニタリング報告会で結果発表)
3 月 21 日	・庄内川の魚類に寄生するイカリムシの講演 (水防センター三重大学大学院 好峯氏)
4 月 9 日	・アユ遡上調査、小田井床止め、4 月 23・29・30 日、5 月 16 日、6 月 2・14 日、7 月 15・21 日、8 月 20・31 日)
4 月 30 日	・矢田川魚道調査 (5 月 29 日、7 月 23 日、9 月 24 日、10 月 30 日)
5 月 1 日	・投網講習 (名城大学付属高校生参加)
5 月 16 日	・山西用水堰魚道調査
5 月 18 日	・小田井床止め下流でアユの毛バリ釣り
5 月 28 日	・庄内川にアユを呼び戻そう
6 月 5 日	・才井戸流 ホタル観賞会
7 月 6 日	・カヌーで庄内川下り
7 月 31 日	・藤前干潟二枚貝調査 (名城大学付属高校生参加)
8 月 10 日	・庄内川天然アユ友釣りのための事前調査
8 月 28 日	・夏の志段味ビオトープで遊ぼう参加
9 月 5 日	・第 6 回庄内川アユの友釣り大会
10 月 30 日	・身近な水辺再生と川の健康診断・矢田川魚道調査
11 月 6 日	・庄内川祭り 魚釣り大会
11 月 20 日	・第 5 回庄内川川会議
2017 年 2 月 3 日	・平成 27 年度河川財団優秀成果団体として表彰
3 月 5 日	・春のビオトープで遊ぼう
3 月 30 日	・矢田川上流の赤津川でアマゴの生息確認
4 月 16 日	・食味を指標とした水質調査マニュアルを制作
4 月 22 日	・小田井堰 魚道問題点の調査 (5 月 3・29 日)
5 月 8 日	・水質モニタリング (松川橋下流、才井戸流、9 月 24 日、11 月 18 日、2018 年 2 月 17 日) ・山西用水堰について名古屋市と設計計画協議 (2018 年 3 月 1 日)
5 月 20 日	・庄内川にアユを呼び戻そう
5 月 21 日	・投網講習 (名城大学付属高校生参加)
5 月 28 日	・矢田川で魚を捕ろう
6 月 24・25 日	・矢田川魚道調査 (9 月 23・24 日)
7 月 23 日	・藤前干潟二枚貝調査 (名城大学付属高校生と協働)
7 月 26 日	・一斉行動 愛知県知事要請活動 (8 月 4 日・名古屋市長、2 月 23 日・名古屋港管理組合)
8 月 11 日	・矢田川源流探訪
8 月 27 日	・夏の志段味ビオトープで遊ぼう

年 月 日	で き ご と
2017 年 9 月 10 日	・ 第 7 回庄内川天然アユ釣り大会（初めておとりアユで捕獲）
9 月 16 日	・ 環境デーなごや出展
11 月 5 日	・ 庄内川まつり 魚釣り大会
12 月 8 日	・ 庄内川 漁の語り部聞き取り調査（～2018 年 4 月 24 日）
2018 年 3 月 4 日	・ 春の志段味ビオトープで遊ぼう
3 月 25 日	・ 桜植樹 経政会と協働
4 月 8 日	・ 白沢溪谷桜祭り 魚の採捕に協力
5 月 7 日	・ 王子製紙春日井工場に庄内川の水質改善について質問書提出（回答 10 月 25 日）
5 月 27 日	・ 「矢田川で魚を捕ろう」 イベント 矢田川魚道調査
6 月 17 日	・ 投網講習（名城大学付属高校生参加）
7 月 31 日	・ 伊勢湾流域圏一斉モニタリング調査参加
8 月 26 日	・ 夏の志段味ビオトープで遊ぼう
9 月 1・2 日	・ 矢田川魚道調査
9 月 9 日	・ 第 8 回庄内川天然アユ釣り大会
9 月 15 日	・ 環境デーなごや 2018 出展
9 月 9 日	・ 「庄内川語り部」 発刊
10 月 21 日	・ リバーピア 参加
10 月 27・28 日	身近な水辺再生と川の健康診断
10 月 29 日	・ バープ工学習会参加
11 月 4 日	・ 庄内川祭り 魚釣り大会
11 月 30 日	・ 矢田川魚道に関する協議（尾張建設事務所）
12 月 4 日	・ 小田井堰階段式魚道の実験結果報告（庄内川河川事務所・12 月 20 日）
2019 年 1 月 25 日	・ 庄内川水系水質改善取り組みに関する要請（名古屋市環境局）
2 月 1・26 日	・ 小田井堰堤扇形魚道の改善工事現地打ち合わせ（庄内川河川事務所）
2 月 19 日	・ 一斉行動名古屋港管理組合との話し合い
2 月 22 日	・ 山西用水堰の設置魚道に関する協議（名古屋市、清須市）
3 月 6 日	・ 流域内の主な市（春日井市、瀬戸市、尾張旭市）に下水道整備を要請
3 月 24 日	・ 桜の植樹 経政会と協働
4 月 13 日	・ ウナギ登りアシスト活動を実施（6 月 2 日）
4 月 23 日	・ 小田井堰堤階段式魚道内生物調査（岐阜大学向井研究室と協働、計 6 回）
5 月 2 日	・ 気候変動適応に向けた長期水温モニタリングを開始（瀬古、志段味、多治見）
5 月 23 日	・ 水循環シンポジウムに参加、発表
5 月 26 日	・ 矢田川で魚を捕ろう
6 月 1 日	・ 藤前干潟二枚貝調査（名城大学付属高校生と協働）
6 月 2 日	・ ウナギを呼び戻そう市民調査（株コーワ、パルシステム、名城大学付属高校）
6 月 22・23 日	・ 魚道の遡上調ならびに堰堤間の生物調査
7 月 7 日	・ 投網講習（名城大学付属高校生参加）
7 月 7 日	・ 水辺で乾杯 in 庄内川を実施
7 月 30 日	・ 一斉行動に参加、知事との話し合い（8 月 2 日・名古屋市長との話し合い）
8 月 11 日	・ 夏の志段味ビオトープで遊ぼう
8 月 12・13 日	・ ウナギ遡上調査を実施、矢田川源流探訪（名城大学付属高校生と協働）
9 月 16 日	・ 第 9 回庄内川天然アユ釣り大会を実施
10 月 27 日	・ 身近な水辺再生と川の健康診断
11 月 3 日	・ 庄内川祭り 魚釣り大会
2020 年 1 月 20 日	・ 「庄内川水系・魚道視察 2019」を実施
1 月 27・29 日	・ 小田井床止め右岸魚道（階段式）を修繕
2 月 6 日	・ 第 20 回中部未来創造大賞「奨励賞」を受章

年 月 日	で き ご と
2020年3月	・「庄内川の語り部」を作成・寄贈、食味調査マニュアル（アユ編）を作成
3月15日	・桜の植樹 経政会と協働
5月10日	・「森の体験館」見学会を実施
6月6日	・第9回小さな自然再生現地研修会 in 名古屋・矢田川」に主催団体として参加
6月7日	・第17回身近な水環境の全国一斉調査に参加
8月20日	・中部大学村上哲生教授の協力で御幸樋門の汚濁調査、春日井市に質問
8月22日	・才井戸流の水質調査（11月14日、1月16日、他計4回）
8月22日	・環境デーなごや2020に動画出展（ブースは中止）
10月5日	・矢田川バープ工による河道環境改善試行（第2回11月13日、第3回3月2日）
11月1日	・庄内川祭り 魚釣り大会
11月13日	・小さな自然再生現地研修会 in 名古屋・矢田川
11月17日	・「都市の軌跡・庄内川天然アユ釣り大作戦」を」開催
11月26日	・守山生涯学習センター「なごや環境大学共育講座学」講師を担当
2021年1～3月	・庄内川における生物の異臭調査（名古屋市との協議、12月8日、1月21日、1月28日） ・魚類異臭調査のサンプル採集）
2月16日	・シラスウナギ調査を実施
2月18・25日	・北生涯学習センター「なごや学」講師担当
3月3日	・矢田川バープ工の設置立ち合い
3月14日	・桜の植樹、経政会と協働
4月24日	・投網講習（名城大学付属高校生参加）
5月1日	・才井戸流 水質調査（7月31日、10月9日、1月15日、計4回）
5月23日	・水生生物採捕調査（バープ工）、中部大学学生、尾張建設事務所と協働
6月6日	・身近な水環境の全国一斉調査に参加
6月26日	・藤前干潟二枚貝調査（名城大学付属高校生と協働）
7月1日	・愛知県河川協力団体に認定
7月17・18日	・矢田川で第5、第6魚道調査、中部大学学生尾張建設事務所と協働
7月27日	・「健康と環境を守れ」愛知の住民一斉行動（知事交渉）に参加（8月6日・名古屋市長交渉）
9月2日	・名古屋市実施の2021年度庄内川河川生物異臭調査に協力（9月3・21日）
10月3日	・土岐川漁協と意見交換
10月5日	・矢田川バープ工プロジェクト見学、モニタリング
10月15日	・山西用水堰魚道改善について 名古屋市・清須市との協議（翌3月22日）
11月7日	・庄内川まつり 魚釣り大会
11月19日	・守山生涯学習センター講座「きれいな水を未来へ 庄内川をきれいにする取り組み～生き物調査を通して～講師を担当」
12月19日	・上流矢田川ウオーク（第7魚道～山口堰堤）
2022年1月15日	・シラスウナギ調査
3月13日	・桜の植樹（経政会と協働）
3月27日	・春の志段味ビオトープで遊ぼう参加
3月27日	・才井戸流水質調査（12月19日、他計4回）
4月20日	・才井戸流 水質調査（7月16日、10月21日、1月21日、計4回）
4月25・26日	・山西用水堰の魚道調査（5月19日）
4月28日	・上条地区掘削工事説明会（9月1日）
5月15日	・投網講習（名城大学付属高校生参加）
5月19日	・山西用水堰魚道設置に向けた関係機関との協議（翌3月16日）
5月22日	・矢田川魚類調査（7月23・24日）
5月27日	・庄内川玉野堰において魚道改善に向けて中部電力と協議

年 月 日	で き ご と
2022 年 7 月 16 日	・伊勢湾流域圏一斉モニタリングに参加
7 月 23・24 日	・矢田川魚道調査
8 月 24 日	・夏の志段味ビオトープで遊ぼう参加
9 月 4 日	・矢田川第 8 魚道計画 尾張旭・瀬戸エリア現地見学（9 月 25 日）
9 月 15 日	・名古屋市「市民の健康と安全を確保する環境の保全に関する条例」に基づく「調査の請求」申請を実施
9 月 17 日	・環境デーなごや 2022 に出展
10 月 9 日	・藤前干潟二枚貝調査（名城大学付属高校生と協働）
10 月 24 日	・ゴルフボール河川投棄問題（庄内川ゴルフ倶楽部）、10 月 2 日〈幸心ゴルフ練習場を訪問〉
11 月 6 日	・庄内川祭り 魚釣り大会
2023 年 1 月 24 日	・シラスウナギ遡上調査（2 月 9 日、3 月 12 日）
3 月 12 日	・桜の植樹（経政会と協働）
2 月 15 日	・小田井床止 魚道の土砂撤去
5 月 21 日	・投網講習（名城大学付属高校生参加）
6 月 4 日	・身近な水環境の全国一斉調査に参加
7 月 15 日	・才井戸流 水質調査（2024 年 1 月 27 日、他計 4 回）
8 月 9・30 日	・矢田川魚道調査
8 月 10 日	・矢田川パープ工調査
9 月 16 日	・環境デーなごや 2023 に参加
9 月 30 日	・藤前干潟二枚貝調査（名城大学付属高校生と協働）
10 月 1 日	・庄内川中流 魚類調査
11 月 5 日	・庄内川祭り 魚釣り大会
11 月 7 日	・矢田小学校有志児童と矢田川橋緑地にて環境学習実施
2024 年 2 月 9 日	・玉野堰魚道改善協議
3 月 10 日	・経政会と協働で桜植樹
4 月 21 日	・投網講習会（名城大学付属高校生参加）
4 月 27 日	・才井戸流 水質検査
6 月 2 日	・第 21 回身近な水環境の全国一斉調査参加
7 月 6 日	・伊勢湾流域圏一斉モニタリング参加
7 月 13・14 日	・矢田川第新魚道（尾張旭市宮下橋下流）調査
7 月 18 日	・矢田小学校にて環境学習
9 月 14 日	・環境デーなごや 2024 に参加
9 月 14 日	・名城大学大学院総合学術研究科において「矢田・庄内川をきれいにする会 50 年の歩み」講演
9 月 29 日	・藤前干潟二枚貝調査（名城大学付属高校生参加）
9 月 29 日	・尾張漁業協同組合設立発起人会
10 月 15 日	・矢田川橋緑地にて矢田小学校現地学習（10 月 24 日矢田小にて補習）
10 月 27 日	・矢田川のガサガサを実施
11 月 3 日	・庄内川祭り 第 50 回魚釣り大会
11 月 28 日	・矢田小学校にて児童の環境学習発表会に参加

矢田・庄内川をきれいにする会会則

第1章 名称および目的

第1条（名称）この会は矢田・庄内川をきれいにする会（略称きれいにする会）とします。

第2条（目的）この会は、庄内川水系を汚すすべての汚染源に対し、きれいで快適な生活環境をとり戻し次世代に引きつぐとともに、農育活動をととして食料問題に取り組み、次代の食の安定を目指すことを目的とします。

第2章 会員およびその役割

第3条（会員）この会は会の目的、会則、活動方針に賛同し、入会を希望する人を会員とします。ただし、17歳までの人は準会員とします。

②会員は入会の翌年度から年会費3000円を会に納入することとします。ただし、準会員ならびに学生（高校生、大学生、その他専門学校生）の会費は免除します。

第4条（会長）この会は会を代表し、活動を統括する会長を置きます。

②会長は役員会により選びます。

第5条（事業部）この会は事業を円滑に推進するために次の事業部を置きます。

(1)経理部 会の経理を担当します。

(2)広報部 会の広報を担当します。

(3)環境調査部 環境の調査・分析を担当します。

(4)農育部 地域農業の支援・里山保全事業を担当します。

(5)矢田川部 矢田川の調査ならびに環境改善に向けた活動を担当します。

②部員は会員の中から希望する人を当てます。

③各部は部長および副部長を役員会に推薦します。

第6条（事務局）この会は運営に必要な事務を担当するために、事務局（名古屋市守山区川西一丁目1304番地）をおきます。

②事務局は会長の指名に基づく事務局員で構成し、局員の中から事務局長を役員会に推薦します。

第7条（連携）この会はNPO土岐川・庄内川サポートセンターと密接な連携のもとに事業を進めます。

第3章 会議等

第8条（総会）総会は会長が年1回召集し、会の基本方針、事業など重要事項を決定します。また、必要に応じて開催することができます。

第9条（役員会）役員会は必要に応じて会長が招集し、運営に必要な次の諸事項を審議し、決定します。

(1)会長の選任

(2)事務局長、事業部長および事業副部長の選任

(3)事業計画および報告

(4)予算および決算

(5)会員の入会及び退会

(6)会則の改正

(7)その他本会の運営に関し、必要な事項

②役員会は会長、事務局長、各事業部長および副部長により構成します。

③会長およびその他の役員の任期は1年とし、再任を妨げません。

第4章 経理

第10条 この会の経費は会費、寄付金、官民からの委託金、補助金、広告料およびその他の収入によってまかないます。

②この会の会計年度は毎年4月1日から翌年3月31日とし、監査を受けます。

付則 この会則は2008年10月1日から施行します。

付則 この会則は2018年4月1日から施行します。

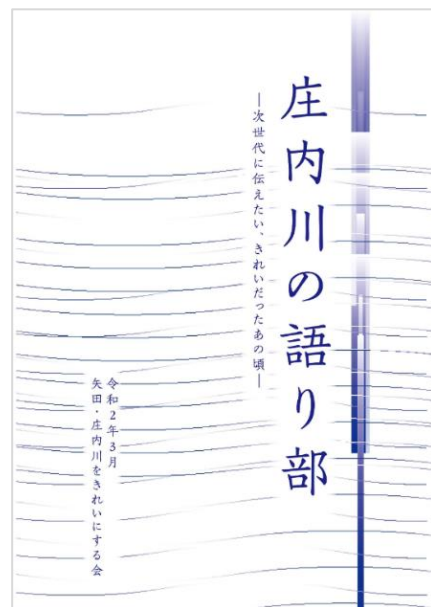
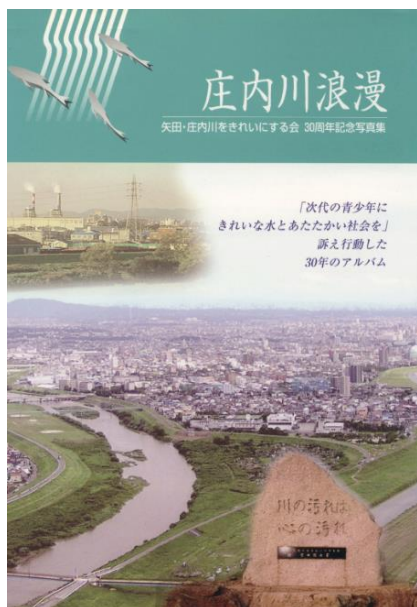
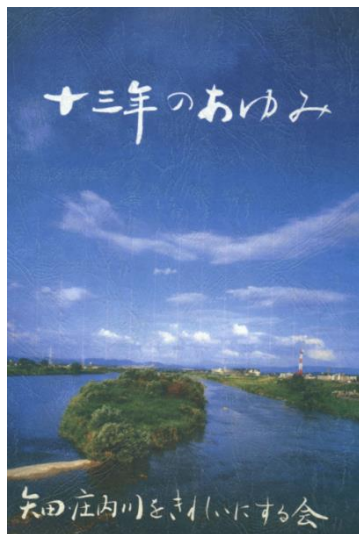
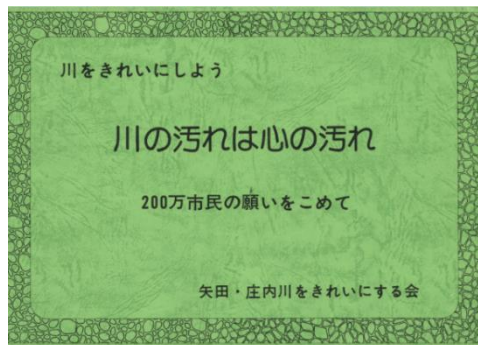
付則 この会則は2021年4月18日から施行します。

付則 この会則は2022年4月10日から施行します。

付則 この会則は2023年4月9日から施行します。

(資料)

矢田・庄内川をきれいにする会出版物



矢田・庄内川をきれいにする会活動 50 周年記念誌

令和 7 年 2 月

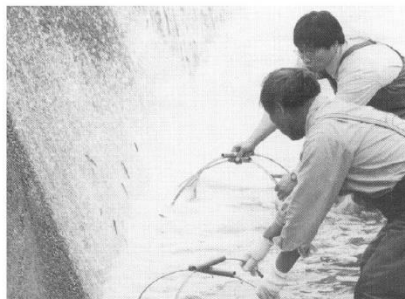
編集者 原 彰・池田 正明・佐久間 元成

発行者 宮田 照由

矢田・庄内川をきれいにする会

〒463-0080 名古屋市守山区川西一丁目 1304 番地

TEL 052-794-3876



矢田・庄内川をきれいにする会
川の汚れは心の汚れ-50年のあゆみ

2025年2月発行